峭して其の時を知るに非ず。嗚伊嗚伊、年年二月是れ仲春。」

三月旦上堂、「甘草は先に生じ苦草は後に生ず。好し蠶麥熟す天平に地平なり。忽ち此の漢有つて出で來つて、和尚與麼の說話、是れ佛法と爲んか是れ世法とせんかと道はゞ、山僧他に向つて揶揄して道はん、㊁三月三卯無きも田家必ず飽くと。」

上堂、「春山は青く春水は綠なり、是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ず。且く道へ、畢竟是れ什麼ぞ。」拂子を擊つて云く、「常に憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。」

㊀和羅飯は方語に曰く、家常飯なり。

㊁五雜俎田家四時占候諺語に云く、「三月三卯無ければ田家米飽かず、三月初三雨ふれば桑葉人の取る無し、三月初三晴るれば桑上銀瓶を掛く。」

大德寺語錄 終

筑州太宰府萬年❹崇福禪寺語錄

侍者宗貞編す

㊀山門、「門頭の實地、个个踏著す。甚に因つてか諸人、我れに隨つて入得す。」喝一喝す。

佛殿、「前佛後佛、隱顯一に非ず。咄。新長老が證明に因らずんば、知んぬ他一對の無孔鐵。」

土地堂、「護法先づ須らく主人公を識得すべし。阿誰か是れ主人公。」齒を扣くこと三下して云く、「東西南北、一等の家風。」

祖師堂、「者の一隊の老漢、惜しい乎者裏に坐在することを。」㊅坐具を提起して云く、「若し此の令を行せずんば誰か敢て扶起することを得ん。」

㊆方丈、拄杖を橫へて云く、「關中の主、能く㊇本分の草料を與ふることを解す。烏臼薄舌、㊈胡亂に欵を供し去ること莫れ。」拄杖を靠く。

拈帖、「溫潤の文、格調の氣、直饒ひ衲被蒙頭なるも、奚ぞ讓を以て之れ

❹崇福開山は大應國師、元、太宰府に在りしを、黑田長政入國の後、現今の東公園千代の松原に移せしなり。大燈國師行狀に、「元弘元年辛未太宰府小武藤居士、名は頼尙、其の父妙慧居士と橫岳山崇福寺に住せんことを請ふ、師住すること一期にして本寺に歸る。」

㊀山門は三門なり、佛地論に云く、「大宮殿あり、三解脫門を所入の處と爲す、大宮殿は法空涅槃に喩ふ。」三解脫門とは、謂く、空門、無相門、無作門なり。今寺院は是れ持戒修道して涅槃に至るを求むる

が義と爲さん。」

山門の疏、「言を語に成し、語を言に成す、如何如何。官には針をも容れず。」

法座、「諸人喚んで高廣の座子と作す、山僧喚んで者箇の座子と作す、何が故ぞ。」一歩して云く、「只だ與麼の地に到るが爲なり。」

師、陞座、香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して恭しく爲に今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。陛下恭しく願はくは、龍圖永く固く、玉葉彌芳しからんことを。」

次に香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、征夷大將軍の爲に祿算を增崇し奉る。伏して願はくは、高く域中の德を贊け、長く塞外の令を提げんことを。」

又香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、大檀主筑州の㋒大空門泊び㋓都督司馬の爲に、祿算を增崇し奉る。伏して願はくは、威風を千歲に扇ぎ、佛日を萬世に輝さんことを。」

香を拈じて云く、「此の香、爐中に爇向して、前住㋔巨福名山建長禪寺、

人、之れに居す、故に三門に由つて入るなり。

㋑梵語に尼師檀、坐具と譯し、又は隨坐衣と義譯す、僧侶六物中の一にして座下に敷くものなり。

㋺祖庭事苑に、「今禪林の正寢を以て方丈と爲す、蓋し則ち毘耶離城維摩の室に取り、一丈の室を以て能く三萬二千の師子の座を容る、不思議の妙事有るが故なり。」

㋻拄杖は僧の携ふる杖なり。

㋼本分は已の守るべき分限の意にて、草料の料は牛馬の食ふ所の芻豆、卽ち「まぐさ」のこと、師家の學者を接する手段を云ふ。

㋽胡亂は曖昧の意。事物起源に「胡亂とは祕書に曰く、五胡、華を亂るの日、漢人の兵を避くる者、事倉卒にして完備する能はず、則ち相率ゐ胡亂且

先師敕諡圓通大應國師南浦和尙大禪師に供養し、用つて法乳の恩に酧ゆ。」

師衣を斂めて座に就いて云く、「明鏡臺に當り、明珠掌を歷、妍醜を分たんと要する者は、直下に來つて相見せよ。有りや有りや。」時に僧有り問ふ、「綠樹陰濃にして夏日長し、樓臺影を倒にして池塘に入る。」師云く、「時節逢ひ難し。」僧云く、「和尙、帝里を辭すれば、皇帝之を留むと、更に甚れの處に向つてか一路を通じ來る。」師云く、「鐵船水上に浮ぶ。」僧云く、「寰中は天子の敕と。」師云く、「誰か恩を承けざらん。」僧云く、「與麼ならば則ち杲日天に麗しく、清風地を匝る。」師云く、「大方外無し。」僧云く、「記得す、㋾保壽開堂、三聖一僧を推し出す、意旨如何。」師云く、「白雲深き處金龍躍る。」僧云く、「壽便ち打つ、又作麼生。」師云く、「碧波心裏玉兎驚く。」僧云く、「若し忽ち人有つて一僧を推し出さば、如何が祇對せん。」師云く、「風光愛しつ可し。」僧云く「者箇は且く置く、今日還つて禁足安居底の道理有りや。」師云く、「大家者裏に在り。」僧云く、「十五日結制は則ち問はず、卽今一時に結し去れ看ん。」師云く、「處處の綠楊馬を繫ぐに堪へたり。」僧云く、「恩大にして酧い難し。」師云く、「能く幾人か有る。」僧禮拜す。

く罷むと云ひて、一時の急に備ふ、今人、事苟且なる者を胡亂と稱するは此に始まる。」

㋿大空門は蓋し妙慧居士を云ふか。智度論に曰く、「涅槃に三門有り、一に空門、二に無相門、三に無作門。」空門と謂ふは諸法を觀じて我我所無く、諸法因緣より生じて作者受者無し、是れを空と名づく、今出家の人、此の門より涅槃の宅に入る、故に空門子と號す。

㋿職原抄に、「筑州太宰帥、唐名都督少卿。」蓋し都督は頭尙を云ふか。

㋾關東五山第一相州鎌倉巨福山建長興國禪寺は、後深草院建長元年平時頼之れを建創す、開山勅諡大覺禪師、諱は道隆、蘭溪と號す、法を宋國無明慧性禪師に嗣ぐ。

㋿鎭州保壽沼禪師、鎭州三聖院

師乃ち云く、「世尊拈花、迦葉微笑、君子財を愛す、之を取るに道有り。正法眼藏此れより流通す、遞代傳持して虛を受け響を接す。㋐激揚鏗鏘古今を坐斷す。珠回り玉轉じて八面玲瓏、其の大機圓應、大道無方なるに迄つては、一賓一主、擒縱擡搦、收放明暗、電轉じ星飛ぶ。㋑窮するときは則ち變じ、變ずるときは則ち通ず。㋒藍よりも青く、水よりも寒じ。聽敎あれ威音那畔に挺拔し、空劫已前に蕭然たり。況んや亦淸風明月雅興多く、白雲流水詩緣寬し。四海九州雷動き風行く、漁歌樵唱共に太平を賀す。正當興廢の時、人人禁足護生、人人剋期取證、皇恩佛恩一時に報じ了る底の事、又作麼生。」拂子を擊つて云く、「版圖遠く奏して堯天濶し、萬物祥を呈して聖情を樂ましむ。」

復た擧す、㊂三聖道く、「我れ人に逢へば卽ち出づ、出づるときは則ち人の爲にせず。」興化道く、「我れ人に逢ふときは則ち出でず、出づるときは卽便ち人の爲にす。」師云く、「二大老、謂つ可し㋓漆の隱す處は黑く、朱の隱す處は赤しと。若し是れ山僧底ならば、天平に地平なり。」卓拄杖下座。

當晚小參、僧問ふ、「三月安居、九旬禁足は則ち問はず、遠く華洛を離れて親しく岳峰に到る一句如何。」師云く、「八角の磨盤空裏に走る。」僧云く、「和尙此の山に住す、何を以てか衆を安せん。」師云く、

慧能禪師と同じく臨濟玄に嗣ぐ。

㋐臨濟錄に云く、「夫れ至理の道の如きんば、評論に非ずして求め、激揚鏗鏘以て外道を摧く。」字衆に鏗鏘は金玉の聲。

㋑以下二句、易經繫辭傳の語。

㋒荀子一勸學篇に、「青は藍より出でて藍より青く、氷は水より生じて水よりも寒し。」

㊂會元十一三聖の章に見ゆ。

㋓家語に云く、「丹の藏する所の者は赤く、漆の藏する所の者は黑し、是を以て君子は必ず其與り處る所の者を愼む。」

「山色夕陽の時、泉聲中夜の後。」僧云く、「與麼ならば則ち大衆德に他き去らん。」師云く、「限り無き淸風來つて未だ休せず。」僧云く、「德山小參答話せず、『問話の者有らば三十棒』と、意旨如何。」師云く、「去り得て來ること得ず。」僧云く、「趙州小參答話を要す、『問話の者有らば一問を置き將ち來れ』と、又作麼生。」師云く、「來り得て去ること得ず。」僧云く、「今夜小參答話を要するか、答話を要せざるか。」師云く、「天外に出頭して看よ、誰か是れ我れ般の人。」僧云く、「三大老の用處、止だ一般なること莫しや。」師云く、「儞をして休せしむれども也た肯て休せず。」僧云く、「若し此の如くならば、則ち一卽ち三、三卽ち一。」師云く、「吽吽。」僧云く、「學人今夜小出大遇」といつて便ち禮拜す。師云く、「手を那邊に撒し去れ。」

乃ち云く、「今夜大衆と箇の識面の話有らんことを要す、各各切に宜しく起倒分明なるべし。㋒陵王溪畔此君亭邊、諸人有ることを知れども未だ主と做ることを得ず。崇福區宇件件の數目、山僧主と做つて未だ大毫を辨せず、既に其の居を一にす、甚と爲てか受用同じからざる。還つて會すや。所以に道ふ、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし、明朝賴に是れ結制安居の辰、箇箇慧身を成熟し、坐底立底㋔築著磕著、自然に者箇に孤負することを得ず。」便ち拄杖を卓すること一下す。

㋒陵王溪、此君亭、皆崇福の境なり、陵王の故事詳にせず、此君は東坡の詩に「此君那ぞ知らざらん。」註に「王子猷竹を愛す、嘗て曰く、何ぞ一日も此の君無かる可けんと。」按するに此の亭竹林に近し、故に名づくるか。

㋔築著磕著は、到る處つきあたること、「がつつりこつつり」と譯すべし。

復た擧す、雲門因に官有りて問ふ、「佛法は水中の月の如しと、是なりや也た無や。」門云く、「清波透路無し。」師拈じて云く、「答を以て問を見れば、問最も可なり、問を以て答を見れば、答未だ奇ならず。且く道へ、諸訛甚れの處にか在る、具眼の禪流、請ふ縝素を辨じて看よ。」

次の日上堂、「我が个の一衆尋常と同じからず、金剛圈を跳出し、栗棘蓬を呑透す。激電の神機雲の如くに飛び、飈の如くに到る。既にして此の如し、今朝甚に因つてか行かんと要して行かず、住せんと要して住せず、還つて會すや。」拂子を擊つて云く、「塌薩阿竭二千年。」

五月旦上堂、僧問ふ、「聲前に薦得するも未だ是れ作家にあらず、喝下に承當するも猶ほ是れ鈍漢と、什麼と爲てか此の如くなる。」師云く、「石壓して笋斜に出で、岸懸つて花倒に生ず。」進んで云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」師云く、「鳳林吒之。」進んで云く、「記得す、僧、投子に問ふ、『如何なるか是れ十身調御。』投子禪床を下つて立つ、意旨如何。」師云く、「頂上に骨無し。」進んで云く、「又問ふ、『凡聖相去ること多少ぞ。』投子亦禪床を下つて立つ、意那裏にか在る。」師云く、「頷下に鬚有り。」進んで云く、「若し人有つて、如何なるか是れ十身調御と問はゞ、如何が祗對せん。」師云く、「眼中の童子、面前の人。」進んで云く、「上來一一指示分明、爲人底の一句、又作麼生。」師云く、「三十年後自ら悔い去るも亦定らず。」

乃ち云く、「崇福に三訣有り、若し第一訣に參得せば、儞に許す拄杖、頭上に日月を挑ぐることを。若し第二訣に參得せば、妨げず拂子頭上に筋斗を打することを。若し第三訣に參得せば、我れ且く儞に問はん、山前麥熟すや也た未だしや。」

端午檀家の補寺齋を謝する上堂、僧問ふ、「今朝五月端午、符を書し土を咒することを用ひず、請ふ師現量法門の一句、直下に至論せよ。」師云く、「一峰雲片片、雙磵水潺潺。」進んで云く、「家に白澤の圖無くんば、又作麼生。」師云く、「將に謂へり、問話を要する漢と。」進んで云く、「善財、文殊に撞著する底の時節は且く置く、㋿天澤の三轉語還つて學人が咨參を許さんや也た無や。」師云く、「㋾之を鑽るも是、之を仰ぐも是。」進んで云く、「己眼未だ明めざる底、甚に因つてか虛空を將つて布袴と作して著く。」師云く、「脛に毛無く股に肉無し。」進んで云く、「地を劃して牢と爲す底、甚に因つてか者箇を透り過ぎざる。」師云く、「脚下荊棘深きこと數丈。」進んで云く、「海に入つて沙を算ふる底、甚に因つてか針鋒頭上に足を翹つ。」師云く、「儞が鼻孔を築著することを覺ゆるや。」進んで云く、「恁麼ならば則ち金殿も禪を譚じて大いに皇情を悅ばしめ、嶽峰道を聲して衲子を奔走せしむるも、也た未だ分外と爲さざること在り。」師喝して云く、「阿儞が境界に非ず。」進んで云く、「錦上に花を鋪く、又一重。」師云く、「咦。」

乃ち云く、「㊥端午天中の節、諸方盡く土を咒し、壁に書して以て妖怪を消す。藥を採る模樣を認

㋿ 虛堂錄十行狀に云く、「師兩朝恩遇の寵に感じ、賜ふ所の稻帛を將つて、小庵を望雲亭の東に創し、扁して天澤と曰ふ云々。」

㋾ 論語子罕篇に曰く、「之を仰げば彌々高く、之を鑽れば彌々堅し」とあり。

㊥ 事文前集に云く、「九、五の月五日午時天中節と爲す。」

めて、落草以て伎倆を作す。爭か如かん、我が者裏、靈山の付囑を忘れざるの人有つて、忽ち妙術の手を展べて、貧を拔いて富と做す。一衆个个石人の機、鐵漢の用、風吹けども入らず、水洒げども蓄かず、諸人此の人を見んと要すや。」拄杖を卓して云く、「切に忌む、當面に諱却することを。」

㋕和泉和尙至る上堂、僧問ふ、「長松嶺頭風颯颯、飛瀑岸前水潺潺。現成公案、大難大難、如何が履踐せん。」師云く、「好し大難の處に向つて履踐するに。」進んで云く、「恁麼ならば則ち薰風自南來、殿閣生微涼。」師云く、「㋙驢鞍橋を認めて阿爺の下頷と作す。」進んで云く、「和尙に三訣有り、一一吝參を許さるんや也た無や。」師云く、「何ぞ妨げん、問ひ將ち來ることを。」進んで云く、「若し第一訣に參得せば、儞に許す、拄杖頭上に日月を挑ぐることを、意旨作麼生。」師云く、「虛空迸裂す。」進んで云く、「若し第二訣に參得せば、妨げず拂子頭上に筋斗を打することを、又如何。」師云く、「山嶽起つて舞ふ。」進んで云く、「若し第三訣に參得せば、我れ且く儞に問はん、山前麥熟すや也た未だしやと、意那裏にか在る。」師云く、「㋝眼睛烏律律。」進んで云く、「者箇の三訣、畢竟什麼邊の事をか明めせざるものを渾淪と云ふ。」

㋕和泉和尙の傳未だ詳にせず。

㋙驢鞍橋は驢馬の背骨のこと。會元十一に「谷隱蘊聰禪師曰く、驢鞍橋を認めて、阿爺の下頷と爲すこと莫れ、他の妄想を認めて、自己の佛性と爲すこと莫れ」の意なり。

㋝眼睛は目の玉、烏律律、又烏萃萃に作る、漆黑の意。

㋟鐵崑崙は、又、渾淪に作る、正字通に「圓にして未だ剖散せざるもの」と云ふ。

㋠聯燈錄に云く、「師、同參の來るを見て、法堂に上る、師便ち喝す、僧亦喝す、行くこと三五步、師又喝す、僧亦喝す、師近前棒を拈ず、僧又喝す、師云く、儞看よ瞎漢猶ほ主と作る在り、僧擬議す、師便ち打つて直に法堂を下る、時に僧有り、問ふ、者の僧甚の和尙に酬作すること有りや、師得る。」師云く、「金香爐下の㋡鐵崑崙。」

乃ち㋢興化、同參の來るを見て喝する底の㋣公案を舉して、師云く、「古人只だ價の高き處に就くことを要して、其の管賞の義を篤うすることを缺く。崇福今日和泉和尙の光訪を得て、事事自然に㋤函蓋相應ず。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「火を竟めては煙に和して得、泉を擔つては月を帶びて歸る。」

退院上堂、「衲子從來定迹無し、天涯海角情に任せて遊ぶ。一毫頭上に華洛を辭し、三鼓聲中九州を出づ。」

㋡崑崙は、又、渾淪に作る、

㋢興化は、同參の來るを見て喝する底の

㋣公案は公界定むる所の法式案文なり、例へば今の民法、刑法等の如きもの卽ち是れなり。禪林寶訓音義に云く、「乃ち公府の案牘に喩ふるなり、法の在る所は而も正道治まれり、公とは乃ち聖賢一期の轍と、天下通途の理なり、案とは聖賢の正文なり、凡そ天下云く、是れ伊れ遠來也た權有り、也た實有り、也た照有り、也た用有り云々。」

㋤公案は公界定むる所の法式案文なり、例へば今の民法、刑法等の如きもの卽ち是れなり。禪林寶訓音義に云く、「乃ち公府の案牘に喩ふるなり、法の在る所は而も正道治まれり、公とは乃ち聖賢一期の轍と、天下通途の理なり、案とは聖賢の正文なり、凡そ天下を有つ者は、未だ嘗て公府無くんばあらず、公府有つて未だ嘗て案牘無くんばあらず、蓋し取つて法と爲して、天下の不正を治するなり、夫れ佛祖の機緣を目づけて公案と曰ふものは、亦之れに由るのみ云々。」

㋡函は「はこ」なり、蓋は「ふた」なり。函と蓋と相契合して少しの間隙無き樣子なり。

崇福寺語錄 終

洛陽龍寶山大德禪寺語錄

㊀横岳を退き本寺に歸る

侍者惠眼編す

七月旦上堂、「秋雲清淡、秋水清冷、東西と南北と、觸處嫩涼生ず。且く道へ、其の中の事作麼生。」拄杖を卓して云く、「四海隆平にして煙浪靜に、斗南長く見る㊁老人星。」

解夏小參、「隨處に主と作る、聖制を横嶽山頭に結び、立處皆眞なり、賞勞を龍寶峰頂に解く。此の事相謾せず、時人に孤負せず。破衲雲を逐ふて飛び、草鞋路に隨つて轉ず。左足先づ應ずる處、脚頭是れ通宵。何ぞ必ずしも㊂臺山驀直の途轍に落ち、流榮肯はざるの道伴を慕はんや。然も是の如くなりと雖も、山僧親切の一句子有り、各各分明に善爲せよ。處處忘却することを得ず」といつて、便ち拄杖を卓すること一下す。

復た文殊、三處に夏を度る公案を擧して、師云く、「文殊、當年列聖の眉毛裏に於て渾身を瀉し得ると雖も、二千年後、未だ免れず人の點檢に遭ふことを。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「雲は嶺頭に在つて閑不徹、水は磵底に流れて太忙生。」

次の日上堂、「風梧葉に到り露槿花に凝る、無寸草の地其の多きを較べず。莫教あれ語默人の對するに逢ふことを。首を回せば忽然として是れ月華。」

八月旦上堂、「八月初一日、天下太平の節、人人無爲を樂み、箇箇災難絶す。且く道へ、箇の什麼に因つてか是の如くなる。」拄杖を卓すること一下して云く、「㊃分一節。」

中秋上堂、拄杖を拈じて卓一下して云く、「㊄靈山に者个を指し、曹溪に者个を話る。我が者裏指さず話らず、還つて親疎有りや也た無や。」又卓一下して云く、「人の此の意を知る無し、我れをして南泉を憶はしむ。」

臘八上堂、「澄月映徹して衆星粲朗たり、箇の中悟處無し、世尊何をか悟道す。」拄杖を卓すること一下して云く、「二千年前二千年後。」

除夜㊅小參、「日一上月一上、晝一上夜一上、窮めて一十二箇月に到り、數へて三百六十日に到る、之を新舊交頭除夜結尾と謂ふ。諸人若し身をして舊年に在らしめば、新定の機を發せず。也た心をして新年に在らしめば、

㊀横岳は崇福寺の山號なり、行狀に「纔に百日の主と作りて退を告げ、大德に迂歸す」とあり。

㊁老人星は史記天官書に云く、「南極老人、」注正義に曰く、「老人一星、弧南に在り、一に老極と曰ふ、人主の壽命延長の應と爲り、常に秋分の曙を以て景に見はる、春分の夕丁に見はる、國の長命を見る、故に之れを壽昌と謂ふ、天下安寧人主の憂を見ざるなり。」又「老人見はるれば治安兵の起るを見ず。」

㊂會元四趙州章に云く、「臺山路上に一婆子有り、見そ僧有りて問ふ、臺山の路其麼の處に向つてか去る、婆云く、驀直に去れ、僧纔に行くこと三五歩すれば、婆云く、好箇の師僧、又與麼に去る、後に僧有り、趙州に擧似す、州云く、待て我れ去りて調伏が爲に道の婆子を勘過せん、明日便ち去りて亦是の如く問ふ、婆も亦是の如く答ふ、州歸りて衆に謂つて云く、臺山の婆子、我れに勘過し了らる。」

㊃碧巖十五則雪竇の頌に云く、「倒一說、分一節云々。」竹を二つに切りて、合するを分一節と云ふ。

㊄傳燈十八、玄沙備禪師、衆に示して曰く、「且つ吾が正法眼藏、大迦葉に付囑すと道ふが如きんば、我が道猶ほ月を話るが如し。」曹溪拂子を竪つ、月を指すに還す。

本來の用を失却せん。所以に北禪、露地の白牛を烹、祖翁、半宵の燈を挑ぐ。然も是の如くなりと雖も、山僧終に與麼の窠窟に入らず。何が故ぞ。

鵑雪天に連つて白く、春風戶に逼つて寒し。」

復た擧す、僧、香林に問ふ、「萬頃の荒田、是れ誰か主と爲る。」林云く、「看よ看よ、臘月盡く。」師拈じて云く、「此れ箇の時節、最も是れ愛しつ可し、來日定めて大年、一乘須らく保愛すべし。」

正旦上堂、「鳳曆開元の日、王春肇始の時、雪は北嶺に寒く、梅は南枝に香し。好箇の好時節、龍天須らく匡持すべし。且く道へ、何を以てか驗と爲ん。」拄杖を卓すること一下して便ち下座。

元宵上堂、僧問ふ、「今朝上元の節、㊀處處燈毬を掛く、意旨如何。」師云く、「風吹けども入らず。」進んで云く、「只だ此の正言を將つて、以て天下の春を祝す。」師云く、「言を知るの漢。」進んで云く、「記得す、僧、香林に問ふ、『如何なるか是れ室內一盞の燈』と、此の意如何。」師云く、「言鋒、冰よりも冷じ。」進んで云く、「林云く、『三人龜を證して鼈と作す』と、又作麼生。」師云く、「利舌、鐵よりも硬し。」

乃ち云く、「燈燈相續、燈燈窮り無し。處處夜光の珠を列ね、頭頭夜明符を莊る。只だ此の光輝底、都べて者裏より普し。」拂子を擊つこと一下す。

佛涅槃上堂、僧問ふ、「今宵夜半、世尊涅槃に入る、兒孫何を以てか法乳に酧いん。」師云く、「杜鵑啼き斷えて月晝の如し。」進んで云く、「與麼ならば則ち恩を知つて、恩を報ずることを解す。」師云く、「也た何ぞ妨げん。」進んで云く、「世尊昔靈山會上に在つて一枝の花を拈起す、此の意如何。」師云く、「萬里一條の鐵。」進んで云く、「迦葉獨り微笑す、意、那裡にか在る。」師云く、「金、金に博へず。」

乃ち云く、「我れ若し滅度すと謂はゞ、我が弟子に非ず、我れ若し滅度せずと謂はゞ、亦我が弟子に非ず。當年若し人有つて、生薑終に辣きことを改めずと道はゞ、但だ釋迦老子を救ひ得るのみに非ず、也た須らく一會の列聖を扶け得べし。何が故ぞ。」良久して云く、「紅霞碧靄高低を籠む、芳草野花一樣の春。」

三月旦上堂、「㊁山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し。堅固法身太だ蹠無し、大龍何れの處にか心肝を露す。諸人見得すること無きにあらず、甚に因つてか擧し得ることを解せざる。」拂子を擊つて云く、「又流鶯を逐ふて短墻を過ぐ。」

上堂、「㊂一卽ち一切、一切卽ち一。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「三祖大師、端無く柳巷を穿つて花街に入る。忽然として幽鳥語喃喃、雲を辭して亂峯に入るに逢著す。合掌低頭して道く、揭諦揭諦、と、是れ什麼の道理ぞ、諸人各〳〵辨別せよ。」又拄杖を卓して下座。

佛生日上堂、僧問ふ、「釋迦老子、今日初めて閻浮に下る、四衆筵に臨む、願はくは法要を聞かん。」

㊀事苑八に、禪門詰旦陞堂、之れを早參と謂ひ、日晡念誦、之れを晚參と謂ひ、非時說法之れを小參と謂ふ。

㊁會元十二、石霜の章に見ゆ。

㊂會元八、鼎州大龍山智洪弘濟禪師、得法白兆圓禪師問ふ、「色身敗壞如何なるか是れ堅固法身」師曰く、「山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し。」

㊃三祖鑑智禪師の信心銘の語なり。

師云く、「斧頭元是れ鐵。」進んで云く、「薔薇露を滴して楊柳煙を籠む、是れ粗鑿の眞面目なること莫しや。」師云く、「驢鞍橋を認めて阿爺の下頷と作すこと莫れ。」進んで云く、「世尊初生下の時、周行七歩、一手は天を指し一手は地を指す、是れ什麼の心行ぞ。」師云く、「鐵丸縫罅無し。」進んで云く、「天上天下唯我獨尊と稱す、是れ傍若無人なるにあらずや。」師云く、「他後、雲門一棒の有る在り。」進んで云く、「雲門の棒頭、還つて相當るや也た未だしや。」師云く、「焦埼打著す連底の凍。」

乃ち云く、「地を指し天を指して獨尊と稱す、顚言倒語卒に論じ難し。金容萬德誰有つてか看ん、徧界堂堂として常に獨り存す。然も是の如くなりと雖も、一杓の惡水更に放過し難し。」拂子を以て禪床を擊つこと一下す。

結夏小參、僧問ふ、「結制已前月白く風清し、豈に是れ慧身を成就する底の時節にあらずや。」師云く、「眼睛を刺破す。」進んで云く、「結制已後風清く月白し、甚麼の處に向つてか剋期取證せん。」師云く、「三生六十劫。」進んで云く、「今夜小參緊要の一句、結制の前後に落ちず、願はくは提唱を聞かん。」師云く、「勘破了也。」進んで云く、「和尙縵天の網子を布いて禿子を籠絡す。忽ち如し金剛圈を透得する底の漢有らば、亦作麼生か他を羅籠し得ん。」師云く、「森森たる夏木杜鵑啼く。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し、隨處に主と作れば、立處皆眞なり」といつて便ち禮拜す。師云く、「且く地に坐して商量せよ。」

乃ち云く、「鵝護の雪鵝人の冰、古今結制の榜樣、禿子禁足の風規、三月九旬の內、七尺單前に於て身心を澄濾し本智を成熟す。情と無情と一齊に安居、前無く後無く同時に寂定、之を大圓覺を以て我が伽藍と爲し、身心、平等性智を安居すと謂ふ。若し其れ境を逐ふて走作し、物に隨つて紛拏せば、此の處り有ること無けん。正與麼の時、本色行脚の師僧此の ㊂保社に入るか、此の保社に入らざるか。」拂子を擊つて云く、「金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る。」

復た擧す、「僧、雲門に問ふ、『如何なるか是れ諸佛出身の處。』門云く、『東山水上行。』韶陽只だ箇箇鐵壁を以て、戶牖と爲し去らんことを要す。山僧は然らず、若し人有つて如何なるか是れ諸佛出身の處と問はゞ、便ち佗に對して道はん、鷲峰の山色青更に青と。且く道へ、那箇か親、那箇か疎、分明に辨別して看よ。」

次の日上堂、僧問ふ、「樹頭紅稀に林下綠暗し、好箇の時節、請ふ師提唱せよ。」師云く、「萬里一條の鐵。」進んで云く、「恁麼ならば則ち薰風自南來、殿閣生微凉。」師云く、「之を見て取らざれば、之を思ふこと千里。」進んで云く、「今朝盡く是れ護生安居、當に何事をか圖るべき。」師云く、「黑衣を著け黑柱を護る。」進んで云く、「朝には西天に行き、暮には東土に歸るが如きんば、還つて禁足の分有りや。」師云く、「我が者裏、喚んで走作の漢と作す。」進んで云く、「學人今夏和尙に依附す、何の方便か有る。」師云く、「只だ此の一問何れよりか來る。」進んで云く、「若し樓に登つて望まずんば、焉んぞ滄海の深きこ

㊂山谷、元明に寄する詩に云く、「本、江鷗と保社を成す。」保社は保伍同社の義なり。

とを知らん」といつて便ち禮拜す。師云く、「何ぞ必ずしもせん。」

乃ち云く、「今日是れ結制、一衆各〻禁足、眼眸重きこと千斤、堂裏兩脚を伸ぶ。是れ个の什麼の道理ぞ。三條椽下に摸索せよ。」

上堂、僧問ふ、「學人心猿未だ穩かならずして意馬奔馳す、願はくは方便を示せ。」師云く、「鐵鎚孔無し。」進んで云く、「與麼ならば則ち要津を把斷し去れり。」師云く、「又與麼にし去るや。」進んで云く、「記得す、巖頭、德山に問ふ、『是れ凡か是れ聖か』と、意、那裏にか在る。」師云く、「石は空裡より立つ。」進んで云く、「山便ち喝すと、如何が理會せん。」師云く、「火は水中に向つて焚く。」進んで云く、「若し人有つて、和尙に是れ凡か是れ聖かと問はゞ、奪。」師云く、「九九八十一。」

乃ち擧す、「僧、洞山に問ふ、『寒暑到來、如何が回避せん。』山云く、『何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。』僧云く、『如何なるか是れ無寒暑の處。』山云く、『寒の時は閻梨を寒殺し、熱の時は閻梨を熱殺す。』山僧は然らず、若し人有つて如何なるか是れ無寒暑の處と問はゞ、只だ他に對して道はん、靜處薩訶と。且く道へ、那箇か親、那箇か踈、諸人各〻辨別せよ。」

端午上堂、僧問ふ、「今朝正に是れ端午の節、家家艾虎を掛け、處處香湯を浴す。和尙節に應ずる一句、願はくは提唱を聞かん。」師云く、「黃鶴樓前鸚鵡洲。」進んで云く、「恁麼ならば則ち山は自ら青く、水は自ら綠なり。」師云く、「㊇隨後婁搜の漢。」進んで云く、「記得す、文殊、善財をして藥を採らしむ。財云く、『手に信せて採り來るに、是れ藥ならざるは無し』と、此の意如何。」師云く、「瞎漢、亂統して什麼をか作ん。」進んで云く、「善財一莖草を拈じて文殊に度與す、文殊云く、『此の藥亦能く人を殺し亦能く人を活す』と、又作麼生。」師云く、「上は是れ天、下は是れ地。」

乃ち云く、「今朝端午の節、妖も無く亦怪も無し。善財の藥を假らず、人人自ら處快。」拂子を擊つて下座。

半夏上堂、僧問ふ、「一夏已に半を過ぐ、崑崙生鐵を嚼む。半夏已後又如何が履踐し去らん。」師云く、「晨朝は粥、齋時は飯。」進んで云く、「已前已後は且く置く、正當今日直に指示を聞かん。」師云く、「頭、天を頂き脚、地を履む。」進んで云く、「記得す、僧、㋐智門に問ふ、『蓮華未だ水を出でざる時如何。』門云く、『蓮華』と、意旨作麼生。」師云く、「水酒げども著かず。」進んで云く、「僧云く、『水を出でて後如何。』門云く、『荷葉』と。還つて端的なりや也た無や。」師云く、「風吹けども入らず。」進んで云く、「水を出づると水を出でざると、相去ること多少ぞ。」師云く、「何ぞ老僧に向つて問ひ將ち來らざる。」進んで云く、「花を移しては蝶の至るを兼ね、石を買うては雲を得ること饒し」といつて便ち禮拜す。師云く、「畔。」

㊇隨後婁搜は、人の後へに隨つてかきさがす義なり。婁は搜と同じく取るなり。

㋐擴燈二に云く、「隨州智門光祚禪師は久しく香林に參じ、大いに心印を悟る云々。」

乃ち拄杖を拈じて云く、「六月熱せざれば五穀熟せず、今日諸人の爲に之を熱し之を熟せしむ。」卓拄杖一下して云く、「已に熱し已に熟して後如何。」拄杖を擲下して云く、「天平に地平なり。」

上堂、僧問ふ、「火雲空を燒き普天炎熱、什麼の處に向つてか正に回避することを得ん。」師云く、「迦葉門前風凜凜。」進んで云く、「學人今日㋐鶻臭布衫を脱却し去れり。」師云く、「淨躶躶地の一句、作麼生か道はん。」進んで云く、「記得す、馬大師、一日陞堂、百丈出でて席を捲く、意那裡にか在る。」師云く、「㋑方木圓孔に投ず。」進んで云く、「大師便ち下座、方丈に歸る、又如何。」師云く、「清風步に隨つて生ず。」進んで云く、「和尚今日上堂、人の席を捲く無し、豈に是れ無事にし去るにあらずや。」師云く、「子を養つて父に及ばざれば、家門一世に貧し。」進んで云く、「席を捲くと席を捲かざると、那箇か是れ親、那箇か是れ疎。」師云く、「苦なる哉佛陀耶。」

乃ち云く、「㋒大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道。既に是れ坐道場、甚に因つてか佛法現前せざる。」拂子を擊つて云く、「千里萬里一條の鐵。」

上堂、「一葉落ちて天下秋なり、是の處風流ならずといふこと無し。若し箇の時節を記得せば、終に語默を將つて酧いず。且く道へ、是れ阿誰が分上の事ぞ。」大衆を喚んで云く、「還つて頂門に獨立することを覺ゆるや。」

㋐鶻臭布衫は汚れて惡臭ある麻の衣と云ふこと。
㋑方木は四角なる木、圓孔はまるいあなのこと。
㋒以下不得成佛道に至る、法華化城喩品の文。

解夏小參、僧問ふ、「學人一夏已來、㋓波波挈挈として過ぎ了る。」㋔剋期取證の事、請ふ師爲に證明せよ。」師云く、「嫩涼秋意籠櫳に入る。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し光陰虛しく度らずと。」師云く、「直饒ひ儞實に度るも也た何ぞ是ならん。」進んで云く、「記得す、雲門因に僧問ふ、『初秋夏末、前程忽ち人有つて問はゞ、如何が祇對せん。』門云く、『大衆退後』と、意旨作麼生。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」進んで云く、「僧云く、『過什麼の處にか在る。』門云く、『我れに九十日の飯錢を還し來れ』と、又作麼生。」師云く、「平出。」進んで云く、「前程問過の事は卽ち且く置く、卽今和尚如何が勘過せん。」師云く、「一拶を消せず。」進んで云く、「柳栗橫に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る」といつて便ち禮拜す。師云く、「脚下泥深し。」

乃ち云く、「秋初夏末、季熱未だ散せず、自恣賞勞、箇箇缺くこと無し。時に隨ひ節に應じて漏逗せずといふと無く、理に就き事に就いて現前せずといふと無し。軒かに知んぬ會するときんば則ち途中受用、龍の水を得るが如く、會せざるときんば則ち世諦流布、羝羊の藩に觸るるに似たり。畢竟與麼にし去るも、步步淸風起る、佛手も遮ること得ず。人心等閑に似たり、路頭踏著して曾て瞋らず。萬里の神光頂後の相、然も是の如くなりと雖も、只だ雲門の我れに九十日の飯錢を還し來れと道ふが如きんば、是れ阿誰が分上の事ぞ。」拂子を擊つて

㋓波波は奔走して安からざるの貌、挈挈は引きまはして忙がしきなり。
㋔剋は刻と同意、定むること、日數を限り、其の期間中に、大事の證明を取らんと欲するなり。

云く、「樵子の徑に因らずんば、爭か葛洪が家に到らん。」

復た翠巖夏末、徒に示す公案を擧して、師拈じて云く、「一畝の地、三蛇九鼠。」

次の日上堂、僧問ふ、「衲僧家四月十五、他を結することを得ず、七月十五、他を解することを得ず、畢竟什麼の處に向つてか安身立命せん。」師云く、「須彌南畔の閻浮樹。」進んで云く、「與麼ならば則ち西風一陣來、落葉兩三片。」師云く、「矮子、戲を看る。」進んで云く、「昔老宿有り、一夏師僧の爲に說話せず、僧有り、嘆じて云く、『我れ只麼に空しく一夏を過す、敢て和尙の佛法を說くことを望まず、❶正因の二字を聞くことを得ば也た得てん』と、意旨如何。」師云く、「黃金を拋却して碌甎を捧ぐ。」進んで云く、「老宿聞いて云く、『閻梨、聲速すること莫れ、若し正因を論ぜば一字も也た無し』と道ひ了つて、齒を扣いて云く、『我れ端無く恁麼に道ふ』と、又作麼生。」師云く、「三千八百。」進んで云く、「隣壁に又老宿有り、聞いて云く、『好一釜の羹、兩顆の鼠糞に汙却せらる』と、意那裏にか在る。」師云く、「同病相憐む。」進んで云く、「和尙一夏已來、什麼の法を說いてか人の爲にす。」師云く、「山青く水綠なり。」進んで云く、「❷長河を攪いて酥酪と爲し、大地を變じて黃金と作す。」便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨げん。」

❶金剛明經玄義に、一に正因佛性とは正に中正を謂ふ云々。

❷宗鏡錄二に云く、「若し自心を了ぜば頓に佛慧を成ぜん、謂つ可し百川を會して一溫と爲し、衆塵を摶つて一丸と爲し、鋼鋼を融して一金と爲し、酥酪を變じて一味と爲すこと なと。」

乃ち擧す、趙州因に僧辭す、州云く、「有佛の處住することを得ざれ、無佛の處急に走過せよ。三千里外人に逢ふて錯つて擧すること莫れ。」僧云く、「與麼ならば則ち去らじ。」州云く、「❸摘楊花摘楊花。」師云く、「趙州若し後語無くんば、須らく是れ人の點檢に遭ふべし。何が故ぞ。風は八月より凉しく、月は七月より明かなり。」

八月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「月月初一、雨無きを吉と爲し、今月初一、雨有るを吉と爲す。且く道へ、吉甚れの處にか在る。」拄杖を卓すること一下して云く、「吉吉、吾れは道はん最も吉と。」拄杖を靠けて下座。

上堂、「西風一陣來、落葉兩三片。鋼鑼生鐵を著く、佛祖渾べて辨せず。辨せず辨せず、諸人且く那邊に過ぎよ。」

重陽上堂、僧問ふ、「今朝是れ九九の日、諸方盡く佳辰を賞す。衲僧門下常機に墮せず、節に應ずる一句、願はくは法要を聞かん。」師云く、「秋晚頓に寒し、个个萬禍。」進んで云く、「只だ菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る底の如きんば、未審し和尙如何が證明せん。」師云く、「眼睛を刺破す。」進んで云く、「古德云く、『重陽九日菊花新なり』と、又是れ什麼の道理をか呈す。」師云く、「答話を謝す。」

乃ち云く、「菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る。靖節只だ其の愛することを知つて、其

❸摘楊花は、支那の俗、人の旅行を送りて別るゝ時、柳の枝を折り、行く人に渡すことあり。玆は「さらばさらば」と譯すべし、訣別の詞なり。

の用ひることを知らず、今日重九、作麼生か用ひ得ん。」拂子を擊つて云く、「二三三、三三二。」

上堂、擧す、官有り、雲門に問ふ、「佛法は水中の月の如しと、是なりや不や。」門云く、「清波透路無し。」官云く、「和尙何れよりか得たる。」門云く、「再問復た何れよりか來る。」

官云く、「正與麼の時如何。」門云く、「重疊たり關山の路。」師云く、「雲門、官には針をも容れず、官人私に車馬を通す。點檢し將ち來れば、兩り俱に失利。何ぞや。㊥賢聖の法に從つてより來、未だ嘗て殺生せず。」拄杖を卓して下座。

開爐上堂、「無賓主の話、十八の高人、一回擧し來れば一回是れ新なり。其の意旨を問ふに及んで、大半便ち道ふ、知らざる最も親しと。阿呵呵、只だ爐下煖かにして春に似んことを要す。」

上堂、「南山の松北嶺の雪、夜雨晝晴、太平節を得たり。達磨東土に來り二祖西天に行く。行脚の禪和子、目前を失却すること莫れ」といつて、喝一喝す。

上堂、「㋐一切の諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は、皆此の經より出づ」と。忽ち拄杖を拈じて卓一下して云く、「君に勸む此の一盃の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人無からん。」

㊥增一阿含經に曰く、「瑜闍、城に入り、乞食して還り來りて佛に白して云く、我れ向きに城に入り乞食す、婦の重妊を見て我れ是の念を作す、衆生苦を受く、何ぞ斯に至る。佛言く、汝往いて婦人に告げて言へ、我れ賢聖の法に從つてよりこのかた、未だ嘗て殺生せず、此の至誠の語を持す、此の母人をして他無きを得せしめんと。瑜闍敎の如くす、母人聞き已つて胎み、解脫することを得たり。」

㋐一切諸佛云々、金剛經の文。

冬至小參、僧問ふ、「葭管灰を飛し、繡紋線を添ふ。陰陽造化に涉らず、願はくは法要を聞かん。」師云く、「八角の磨盤空裏に走る。」進んで云く、「恁麼ならば則ち岸柳未だ眼を開かず、庭梅先づ花を發く。」師云く、「好し與麼にし去れ。」進んで云く、「記得す、僧、百丈に問ふ、『如何なるか是れ奇特の事。』丈云く、『獨坐大雄峰』と、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「要津を把定して凡聖を通せず。」進んで云く、「僧禮拜すと、又作麼生。」師云く、「頂上を拶破せず。」進んで云く、「丈便ち打つと、如何が理會せん。」師云く、「令に依つて行ず。」進んで云く、「古人は則ち且く置く、卽今和尙に如何なるか是れ奇特の事と問はゞ、如何が祗對せん。」師云く、「三十年後、面熱し汗出でん。」進んで云く、「虎穴に入らずんば、爭か虎子を得ん」といつて、便ち禮拜す。師云く、「我が爲に將ち得來れ看ん。」

乃ち云く、「六陰謝し盡して一氣方に生ず、鐵樹花を開き、石筍條を抽んづ。衲僧家若し者裏に向つて轉身し來らば、自然に枯枯燥燥、得失是非一時に放却せん、也た是れ㋙省錢俗き易き底の事。古來淨㋐悄悄地なるも、之を爭ふに足らず、何ぞ須ひん步を運んで㊥阿伽門を念ずることを。而今多くは是れ時を知つて節を知らず、猶ほ妨げず東西南北烏飛び兎走ることを。直饒ひ山僧が背後に向つて問訊するも、也た山僧敢

㋙虛堂錄九運庵忌拈香に云く、「松源の省饒を使はず、衲僧の鎭口訣を用ふるに慣る。」侯鯖錄に云く、「五代周の太祖の時、王章財賦を掌る、舊、出入皆八十を以て陌と爲す、章始めて入る者は八十、出づる者は七十七を以て之れを省陌と謂はしむ。」

㋐詩經說約二郞風に、「憂心悄悄群小に慍らる。」註に、「悄悄は憂への貌。」

㊥阿伽は梵語、淸淨水、功德水等の譯あり。

て横に點頭だもす可からず。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「國清うして才子貴く、家富んで小兒嬌る。」

復た擧す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ趙州。」州云く、「東門南門西門北門。」僧云く、「這箇を問はず。」州云く、「儞趙州を問ふ」と。拈じて云く、「機を以て機を奪ひ、❶毒を以て毒を攻むることは、趙州老漢之れ無きにあらず。其れ奈何せん八十行脚の事、猶ほ未だ全く用ひざること在り、若し全く用ひ去ることを得ば、兒孫滿堂今に至るまで繁興せん。」

次の日上堂、僧問ふ、「霜大野に飛び風林丘を戒しむ、普天普地寒威凜然、更に什麼の處に向つてか回避し去ることを得ん。」師云く、「陽氣發する時硬地無し。」進んで云く、「❷璿璣未だ動せざるに全機顯露、❸朕兆纔に分れて❹覿體現成。時節に涉らず言薦を借らず、親切の一句願はくは擧揚を聞かん。」師云く、「家家❺觀世音。」進んで云く、「慈明牌を掲げ、皓老布裩を洗はず。點檢し將ち來れば、早く是れ❻劍去つて久し。寶山今日別に條章有ること莫しや。」師云く、「一冬二冬、叉手當胸。」

乃ち云く、「瑞雪地に滿ち、祥雲天に翻る。龍寶山頂和氣靄然、好箇の時節君が爲に報じて知らしむ。一氣言はず有象を含む、萬靈何れの處にか無私を謝せん。」

❶輟耕錄七に云く、「骨嚥犀は蛇角なり、其の性至毒にして而も能く毒を解く、蓋し毒を以て毒を攻むるなり、故に蠱毒犀と曰ふ。」

❷璿璣は天文を量るの器械なり。

❸朕兆は物の生ぜんとする「きざし」なり。

❹覿は見と同じ。

❺楞嚴六疏に云く、「梵音阿那波婁吉底輸、此に觀世音と曰ふ、能所境智に從ひ、以て名を立つる也、佛に値ひ法を觀ず、皆、其の師とする所、師資相承相違無し、耳聞思修慧諸行

進退兩班を謝する上堂、「竿頭に一歩を進めて大千沙界に全身を現ず、歩を退いて已に就く、萬が中一箇も失はず。蓋し是れ與麼の人にして與麼の❼行履を作す者なり、大衆此の人を見んと要すや。雲は嶺頭に在つて閑不徹、水は澗底に流れて太忙生。」

臘八上堂、僧問ふ、「釋迦老子六年冷坐、臘八の夜に逗到して始めて方に開悟し去る。未審し个の何事をか悟り得たる。」師云く、「鼻孔、上唇に掛く。」進んで云く、「未だ明星を見ざる時、已に雪山雪白く、明星を一見して後、又雪山雪白し。這裏端的の事、和尚如何が甄別せん。」師云く、「鐵丸縫罅無し。」進んで云く、「只だ一人有り、眞を發して源に歸するが如きんば、大地の衆生何れの處に向つてか去る。」師云く、「儞が眼睫上に向つて去る。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し、劫外一壺の春、更に好し優曇花綻びて普天香し」といつて、便ち禮拜す。師云く、「道ふことは卽ち道ひ得たり。」

乃ち云く、「盡く謂ふ、世尊臘月八夜成道と、是なることは則ち是、敢て諸人に問ふ、如何なるか是れ成ずる底の道。若し是れ識得せば、恩を報ず

❼呂氏春秋十五に云く、「楚人江を涉る者有り、其の劍舟中より水に墜つ、遽に其の舟を刻んで曰く、是れ吾が劍の墜つる所と、舟止つて其の刻む所より水に入り、之れを求む、舟已に行く、而して劍行かず、劍を求むる此くの若き、惑はずや。」

❼行は躬行、履は履踐なり。

❽法華序品に云く、「初善、中善、後善、其の義深遠、其の語巧妙。」徐注に云く、「初め頓教大乘七善を開くなり、初中後は卽ち頓教、序正、流通なり、此れを時節善と名づく、其の義深遠則ち頓教了義の理、此れを名づけて義善と爲す、其の

るに分有らん、若し也た識不得ならば、」拂子を擊つて云く、「㊂初中後三大劫。」

除夜小參、僧問ふ、「舊歲今宵去る、甚れの處に向つてか去る。」師云く、「頭上一堆の塵。」進んで云く、「新年明日來る、甚れの處よりか來る。」師云く、「脚下三尺の土。」進んで云く、「還つて新舊に涉らざる底有りや也た無や。」師云く、「有り。」進んで云く、「如何なるか是れ新舊に涉らざる底。」師云く、「大底鼻孔向下に垂る。」進んで云く、「記得す、㊃感首座、法昌に問ふ、『昔日北禪分歲、露地の白牛を烹る、和尙今夜分歲、何の施設か有る。』昌云く、『臘雪天に連つて白く、春風戶に逼つて寒し』と、意旨作麼生。」師云く、「兩口一舌無し。」進んで云く、「感云く、『大衆如何が喫せん。』昌云く、『嫌ふこと莫れ冷淡にして滋味無きことを。一飽能く萬劫の飢を消す』と、此の意如何。」師云く、「鬼、漆桶を爭ふ。」進んで云く、「感云く、『是れ何人か置辨す。』昌云く、『無慚愧の漢、來處も也た知らず』と、又作麼生。」師云く、「彼此出家兒。」進んで云く、「古人は卽ち且く置く、和尙今夜分歲、何の施設か有る。」師云く、「且く待て、㊄童行有つて報じ去らん。」進んで云く、「大衆如何が喫せん。」師云く、「鼻よりして入る可からず。」進んで云く、「是れ何人か置辨す。」師云く、「衣鉢閣中常に相逢ふ。」進んで云く、「和尙與麼の施設、古人と是れ同か是れ別か。」師云く、「倆に許す、疑ふこと三十年せよ。」進んで云く、「鶴は飛ぶ千尺の雪、龍は起る一潭の氷」といつて、便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨げん。」

㊂會元十六に云く、「求禪鬢の法嗣法昌倚遇禪師、感首座と歲夜渴を喫する次で、座曰く、昔日云々。」

㊄南海寄歸傳に云く、「白衣、苾芻の所に詣りて、專ら佛典を誦し、落髮を求むるを童子と號す」と。卽ち行者の屬なり。

乃ち云く、「今宵臘月三十夜、家家爆竹結尾を賞す。或は歌吹の音を操り、或は鐘鼓の響を促して、來日新年の吉を祝し、萬歲松栢の操を壽す。龍寶山頂の人、未だ必ずしも點頭せずんばあらず。只だ是れ終に悄然の機に墮せず、豈に等閑の風味を將つて、以て合山の龍象に供養せんや。然も是の如くなりと雖も、衆と分歲、各各須らく飽足すべし。」拂子を擊つて云く、「趙州の喫茶、雲門の胡餅。」

復た擧す、僧、古德に問ふ、「萬頃の荒田、是れ誰か主と爲る。」德云く、「看よ看よ、臘月盡く。」師云く、「大衆此の僧を見んと要すや、當頭霜夜の月。古德を知らんと要すや、任運前溪に落つ。然も是の如くなりと雖も、㊆靜處娑婆詞。」

正旦上堂、僧問ふ、「瑞草嘉運に生じ、林花早春に結ぶ。好箇の時節願はくは擧揚を聞かん。」師云く、「箇箇道體、起居萬福。」進んで云く、「恁麼ならば則ち元正啓祚、萬物咸く新なり。」師云く、「一句に道著す。」進んで云く、「正當今日大年朝、如何なるか是れ新年頭の佛法。」師云く、「風暖かにして鳥聲碎け、日高うして花影重る。」進んで云く、「僧、雲門に問ふ、『如何なるか是れ淸淨法身。』門云く、『花藥欄』と、意旨作麼生。」師云く、「眼睛を刺破す。」進んで云く、「僧云く、『便ち恁麼にし去る時如何。』門云く、『金毛の獅子』と、又作麼生。」師云く、「兩重の公案。」進んで云く、「卽今和尙に問ふ、如何なるか

㊆靜處娑婆詞とは、靜かなる處で誦呪するの意。

是れ清淨法身。𤍠。」師云く、「千峰雪色寒じ。」

乃ち云く、「今日大年朝、山僧渾べて道ふことを解す、大衆箇箇道體、起居萬福。且く道へ、是れ佛法か是れ世法か。」拄杖を卓して云く、「東西南北、吾が道大いに亨る。」

元宵上堂、僧問ふ、「今宵處處燈を揭げて萬民共に樂む、和尚人の爲に心燈を剔起し來れ看ん。」師云く、「天晴れて日頭出づ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し、光明寂照徧河沙と。」師云く、「妨げず道著することを。」進んで云く、「僧、香林に問ふ、『如何なるか是れ室內一盞の燈。』林云く、『三人龜を證して鱉と作す』と、意、那裏にか在る。」師云く、「便宜に遇ふこと罕なり。」進んで云く、「與麼ならば則ち昔日の香林、今日の和尚」といつて、便ち禮拜す。師云く、「去ることを好くし、用ふることを好くす。」

乃ち云く、「燈燈相續いで燈燈已むこと無し。且く道へ、此の燈何れの處よりか來る。」卓拄杖一下して云く、「我見燈明佛、本光瑞如此。」

上堂、僧問ふ、「春山亂青を疊み、春水盧碧を漾はす。好箇の時節、願はくは法要を聞かん。」師云く、「雪竇の背後に向つて問訊すること莫れ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち日は自ら暖かに、風は自ら和す。」師云く、「老僧が背後に向つて問訊することを休めよ。」進んで云く、「趙州、一庵主を訪うて云く、『有りや有りや。』主、拳頭を竪起す。州云く、『水淺うして是れ舟を泊むる處にあらず』と、意旨作麼生。」師云く、「蠅、血を見る。」進んで云く、「州又一庵主を訪うて云く、『有りや有りや。』主、拳頭を竪起す。州便ち禮拜讃歎す、如何が委悉せん。」師云く、「鶻、鳩を提ぐ。」進んで云く、「問答已に一般、甚と爲てか一人を肯ひ一人を肯はざる。」師云く、「兩頭に落ちざることを看取せよ。」進んで云く、「若し人有つて、有りや有りやと問はゞ、未審し和尚如何が祇對せん。」師云く、「且去喫茶。」

乃ち擧す、三祖大師道く、「一卽ち一切、一切卽ち一。」忽ち拄杖を拈じて云く、「者箇は是れ寶山が拄杖子、阿那箇か是れ一。」拄杖を卓すること一下して云く、「只だ能く此の如くならば、何ぞ終らざることを慮らん。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「法身無爲諸數に墮せず、釋迦老子甚に因つてか涅槃の相を示す。」師云く、「涅槃の諸數に墮せざるが爲なり。」進んで云く、「古德道く、『十方㋐薄伽梵、一路涅槃門』と、且く道へ、如何なるか是れ涅槃門。」師云く、「日は東に出で夜西に落つ。」進んで云く、「五通仙人、世尊に問うて云く、『世尊に六通有り、我れに五通有り、如何なるか是れ那一通。』世尊、『五通仙人』と召す、意旨作麼生。」師云く、「平生の肝膽人に向つて傾く。」進んで云く、「仙人便ち麼嗟す、世尊云く、『那一通儞我れに問ふ』と、如何が理會せん。」師云く、「依稀として曲れるに似て纔に聽くに堪へたり。又風に別調の中に吹かる。」進んで云く、「後來雪竇、著語して云く、『老胡、元那一

㋐薄伽梵は、衆德を總攝し、重尊の義、佛の敬稱なり、これに四義又は六義を具す。四義とは一に有德に名づけ、二に巧に諸法を分別するに名づけ、三に名聲あるに名づけ、四に能く婬怒痴を破るに名づくと。六義とは一に自在、二に熾盛、三に端嚴、四に名稱、五に吉祥、六に尊貴。かく多義を含むが故に五種不翻の一なり。

通有ることを知らず、却つて邪に因つて正を打す』と、意、那裏にか在る。』師云く、「無影樹下の合同船。」進んで云く、「卽今和尙に如何なるか是れ那一通と問はゞ、未審し如何が祇對せん。』師云く、「三跳後。」

上堂、擧す、雲門云く、「我れ諸人を看るに、二三の機中尙ほ㊃構得すること能はず、空しく衲衣を披して何の益かある。」師云く、「山僧は然らず、我れ諸人を看るに、悉く是れ大機大用の人、剛ひて作佛を要して何の益かある。住みね住みね。一做さゞれば二休せず、風流ならざる處也た風流。」

上堂、「春山は青く春水は綠なり、春雲片片、春鳥喃喃。敢て諸人に問ふ、吾が宗門中是れ放開か是れ揑聚か。个个寮舍に歸つて摸索して看よ。」

四月旦上堂、驀に拂子を竪起して云く、「西天の二十八祖、東土の六祖、盡く拂子頭上に在つて、心と說き性と說き、玄と論じ妙と論ず。山僧忍俊不禁にして、怪を見て笑ふこと一聲、箇箇面熱し汗出づ。諸人還つて見るや、若し也た見ずんば、」拂子を擊つこと一下して云く、「滿地の落花春已に過ぐ、綠陰空しく鎖す舊莓苔。」

佛生日上堂、「天を指し地を指して㊄尊貴に墮す、滿目の青山笑つて點頭す。雲門令を行じてより後、風流ならざる處也た風流。諸人者裏に向つて會得せば、妨げず恩を報ずるに分有らん。其れ如し未だ然らずんば、靜處娑婆訶。」

結夏小參、僧問ふ、「看雲亭上月明明、古巖松下風拂拂。見成公案遮欄を絕す、言詮に涉らず、願はくは法要を聞かん。」師云く、「九九八十一。」進んで云く、「恁麼ならば則ち山は自ら靑く、水は自ら綠なり。」師云く、「隨後叟搜の漢。」進んで云く、「九句禁足、剋期取證は則ち問はず、七尺單前、三條椽下、學人一夏、如何が履踐せん。」師云く、「眼眸重きこと千斤。」進んで云く、「古德道く、『參は須らく實參なるべく、悟は須らく實悟なるべし』と、如何なるか是れ實參。」師云く、「金香爐下の鐵崑崙。」進んで云く、「實悟底又如何。」師云く、「何ぞ必せん。」進んで云く、「實參實悟、畢竟作麼生。」師云く、「心人に負かざれば、面に慙づる色無し。」

乃ち云く、「言前句後、舌根裏に身を藏し難し、向上向下、驀に㊆葫蘆子を撥挨す。背面終に好手に落ちず、首尾何れの處にか萬類を該ねん。遠く象外に超え迥に天眞を脫す。是の處雲山目に溢る、㊇鬧市の大蟲、誰か見ることを解せざらん。見ることは卽ち見る、甚に因つてか文殊の頭は黑く普賢の頭は白し。會得せば三月安居、九句禁足。規に

㊃字典に構は成なり、「しをふせる」義。こゝは手に入れると譯すべし。

㊄人天眼目曹山三種墮の章に曹山云く、凡情聖見は須らく三種墮を具すべし。一には披毛戴角、二には不斷聲色、三には不受食。糊布衲問ふ、披毛戴角は是れ甚麼の墮ぞ、曰く、是れ麤墮、問ふ、不斷聲色は是れ什麼の墮ぞ、曰く、是れ細墮、問ふ、不受食は是れ什麼の墮ぞ、曰く、是れ尊貴墮なり。六根門頭見聞智覺に就いて、只だ是れ他に汚染せられざるを將に墮と爲す云々。

㊆葫蘆は瓢簞なり。

㊇韓非子九に云く、「龐恭太子と邯鄲に質たり、魏王に謂つて曰く、今一人市に虎有りと言はゞ、王之れを信ぜんや、曰く信ぜず、二人市に虎有りと言はゞ、王之れを信ぜんや、曰く信ぜず、三人市に虎有りと言はゞ、王之れを信ぜんや。曰く寡人之れを信ず。龐恭曰く、夫れ市の虎無き明か也、然り而して三人言つて虎と成す、今邯鄲の魏を去るや、市に遠し、議臣三人に過ぐ、願はくは王之れを察せよ。」大蟲は虎なり。

彌ひ矩を守つて脚底五色の索を帶びす。其れ如し未だ然らずんば、靜處婆婆訶。」

復た臨濟、衆に示して云く、「一人は孤峰頂上に在つて出身の路無く」の公案を擧して、師拈じて云く、「古來作者、喩を弄して草に落つ、等しく是れ禁じ難し。只だ是れ人人背後に在つて、點頭せんことを要須す。大衆還つて會すや。㊀鬱頭藍已に全身を定す、何ぞ假らん周行して七歩に跨ることを。」

次の日上堂、僧問ふ、「如來の聖制、禁足護生、衲僧朝に西天に游び暮に東土に歸る。學人此間禁足卽ち是か、游歸卽ち是か。」師云く、「南番の㊁大舶主、本、此土の商人。」進んで云く、「已に道ふ禁足安居と、甚に因つてか文殊、三處に夏を度る。」師云く、「曲終つて人見えず、江上數峰青し。」進んで云く、「記得す、雲門、衆に示して云く、『十五日已前は儞に問はず、十五日已後一句を道ひ將ち來れ』と、意旨作麼生。」師云く、「什麼の處にか去る。」進んで云く、「自ら代つて云く、『日日是れ好日』と、又作麼生。」師云く、「倒退三千。」進んで云く、「和尙若し韶陽の垂示に逢はゞ、他に向つて如何が道はん。」師云く、「法堂上寸草生せず。」

乃ち云く、「今朝是れ結制、敢て諸人を謾却せず、只だ現量に因つて以て正法眼藏を擧揚せん。」驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「者箇は是れ龍寶が拄杖子、阿那箇か是れ正法眼藏。若し也た會せずんば、雨過ぎて遠山綠なり」といつて、拄杖を靠けて下座。

㊁大般涅槃經後分上遺敎品に曰く、佛復た阿難に告げ玉はく、吾れ未だ成佛せざるとき、鬱頭藍弗外道法中に入り、四禪八定を修學し、其の敎を受行す、吾れ成佛し來つて、其の法を毀訾し漸漸誘進す。

㊂宇衆に船は海中の大船と。

解夏小參、「三月安居、九旬禁足、山色夕陽の時、泉聲中夜の後、圓覺伽藍、平等性智。竹に上下の節有り、松に古今の青無し。个の裏取證無し、誰か慧身を成熟せん。正與麼の時節、衲僧活脫の處、行かんと要すれば便ち行き、坐せんと要すれば便ち坐す。東西南北遮障有ること無く、運奔執捉全く象外に超ゆ。諸人一夏、眉を結び肩を交ふ、今日何ぞ必ずしも苦口叮囑せん。然も此の如くなりと雖も、」拂子を擊つて云く、「君に勸む此の一盃の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人無からん。」

復た翠巖、夏末、衆に示す公案を擧して、師拈じて云く、「翠巖、衆の爲に力を竭すこと少からず、只だ个の三枚把不住の老凍膿を得たり。若し㊃中郎が鑑有らば、何ぞ野舍の薪に同じからん。」

上堂、「眞空は有を礙へず、眞空は色に異ならず。」忽ち拄杖を拈じて卓一下して云く、「且く道へ、是れ有か是れ不有か、是れ色か是れ色にあらざるか。若し是れ劍利の衲僧ならば、水に和して乳を喫せん。其れ或は躊躇せば、拄杖鼻孔を穿卻せん。」又卓一下す。

大王上將、山に入つて百味の佳齋を下し、合山の供養を伸ぶるを謝し奉る上堂、僧問ふ、「日月輪邊氣象高く、魚龍穴下蟠根固し。」師云く、「好し。」進んで云く、「上將忽ち山に入つて奇齋を下し來つて、大衆に供養す。未審し和尙什麼の法を說いてか此の恩を報ることを得ん。」師云く、「風行けば草

㊃後漢書五十蔡邕が傳に曰く、「吳人薪を燒き以て爨く者有り、邕火烈の聲を聞き、其の良木なるを知り、因つて請ふて我る琴を爲る、果して美音有り、而して其の尾猶ほ焦く、故に時人名づけて焦尾琴と曰ふ。」

偃す。」進んで云く、「恁麼ならば則ち蘋葉風涼しく、桂花露香し。」師云く、「好し也た與麼にし去れ。」進んで云く、「只だ達磨未だ來らざる已前の如きんば、還つて這箇の消息有りや也た無や。」師云く、「銀山鐵壁。」進んで云く、「來つて後又如何。」師云く、「鐵壁銀山。」進んで云く、「來と未來とは且く置く、如何なるか是れ這箇の消息。」師云く、「鐵壁鐵壁、銀山銀山。」進んで云く、「學人今日小出大遇」といつて、便ち禮拜す。師云く、「手を撒して那邊に去れ。」

乃ち拄杖を横へて云く、「㊂大士三十二應身、天大將軍最も是れ眞、諸障を摧蕩して慶快を與へ、百福を提持して窮貧を救ふ。大衆者箇の大機大用を會せんと要すや。」拄杖を卓して云く、「看よ看よ、㊆巍巍堂堂、㊇煒煒煌煌。四海九州、威風凜凜。」

材木採り用つて歸る普請並に㋑善源の雲和尚を謝する上堂、拄杖を拈じて云く、「萬仞峰前千磵の底、者邊那邊良材を撰ぶ。斧頭用ひ得たり諸人の力、集めて此に大成して相呼んで回る。正與麼の時作麼生。」拄杖を卓すること一下して云く、「行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時。」

上堂、驀に拄杖を横へて擧す、肇法師云く、「㊐近うして見る可からざる者は物の性のみ。」拄杖を卓して云く、「者箇は是れ寶山が拄杖子、阿那箇か是れ物の性。」又拄杖を卓して云く、「一槌兩當、蓋覆し將ち來る。」

宗持禪尼㋺逆修拈香、「當陽突出して迥に根塵を脱す、天を薫じ地を炙る。擧體全眞、乃佛乃祖、佗をや。等閑に一見便見せば、自然に一得永得、生生の正果を感じ、世世の正因を結ぶ。馥郁たる香風に由つて氣を出し、衲僧の巴鼻此れ從り方に親し。況んや是れ宗持大姉、山僧が手を借つて拈出する偏界に清く、靄然たる和氣恰も春の如し。」

除夜小參、「年窮り歳盡く、黑漆桶裏に墨汁を盛る。交頭結尾、半夜烏雞飛んで天に上る。所以に師僧家、空劫已前威音那畔より、一日、日未だ嘗て一日を逐はず、一時、時未だ嘗て一時に隨はず。墻壁瓦礫、露柱燈籠、背後面前、眞珠燦爛たり。然も是の如くなりと雖も、今夜諸人と分歳、其の中國の爲にする一句作麼生。」拂子を擊つて云く、「村裏盡く好く儺を驅る、來年定めて是れ熟年ならん。」

復た擧す、香林因に僧問ふ、「萬頃の荒田、是れ誰か主と爲る。」林云く、「看よ看よ、腸月盡く」と。師云く、「山僧は然らず、若し人有つて此の問を發せば、便ち佗に答へて道はん、昨日相見の人と。」忽ち是れ何人ぞと問はゞ、劈口に便ち摑せん。」

㊂首楞嚴六に云く、「爾の時觀世音菩薩卽ち座より起つて、佛足を頂き、而も佛に白して言く、云々、世尊我れ觀音如來を供養するに由つて、彼の如來、我れに如幻聞、熏聞、修金剛三昧を授けらる、佛如來と慈力を同じうする故に、我が身三十二應と成り、諸の國土に入らしむ。」

㊆巍巍は山の聳ゆる貌、堂堂は威儀の盛なる貌、容貌威儀の盛にして犯すべからざる形容詞なり。

㊇文選注に、「煒煒煌煌は、皆、光色亂動、目眩曜して定らざるなり。」

㋑善源の雲、未だ詳にせず。

㋐肇論物不遷論の文。

㋺逆は預なり、預め供養を修することを逆修と云ふ。灌頂國願往生一方淨土菩薩戒經に詳かに出づ。

正旦上堂、僧問ふ、「年年是れ好年、日日是れ好日。正與麽の時、請ふ師祝聖せよ。」師云く、「萬年松下に茯苓有り。」進んで云く、「恁麽ならば則ち萬民業を樂み謳歌を唱ふ。」師云く、「好音耳に在り、人皆聞く。」進んで云く、「記得す、僧、古德に問ふ、『新年頭、還つて佛法有りや也た無や』と、意、那裏にか在る。」師云く、「舌頭骨無し。」進んで云く、「德云く、『元正啓祚、萬物咸く新なり』と、的當なりや也た無や。」師云く、「藕絲孔裏に大鵬に騎る。」進んで云く、「只だ古人の祇對するが如きんば、如何が辨別し去らん。」師云く、「風暖にして鳥聲碎く。」進んで云く、「一句了然として百億を超ゆ。」師云く、「富んでは千口も少しと嫌ふ。」進んで云く、「但だ學人のみに非ず、四衆咸く恩に霑ふ」といつて、便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨げん。」

乃ち云く、「今朝大年朝、東廊下にも相賀し、西廊下にも相賀す。喚んで佛法底と作さば、拂子他の與に點頭せん、喚んで世法底と作さば、拄杖他の與に點頭せん。且く道へ、諸人阿那箇の點頭に孰與ぞ。若し此に於て會得せば、便ち山僧が適來个个道體、起居萬福と道ふことを解せん。」

二月旦、材木を出すが爲に大衆を勸下する上堂、「梅腮柳面香を吐き榮を競ふ、春山春水綠を湛へ藍を疊む。衲子清興、時なる哉時なる哉、儞に許す始めは芳草に隨ひ去り、又須らく後に落花を逐うて回るべし。忽ち回り來る時如何。箇箇萬福萬福。侍者、急手に个の好茶を點じ將ち來れ。」

佛生日上堂、僧問ふ、「㊀青春已に去り、朱夏初めて臨む。瞿曇今日降生、此れは是れ現成底、請ふ師別に擧揚せよ。」師云く、「鐵丸縫罅無し。」進んで云く、「二月十五曾て滅せず、甚に因つてか鶴林中に雙趺を示す。」師云く、「天上の星、地下の木。」僧云く、「四月八日曾て生ぜず、甚と爲てか九龍、水を吐いて金軀を灌沐す。」師云く、「九九八十一。」僧云く、「天を指し地を指して、天上天下唯我獨尊と道ふ。瞥。」師云く、「芍藥花開く菩薩の面。」僧云く、「雲門云く、『我れ當時若し見しかば、打殺して狗子に與へて喫卻せしめん』と、意旨作麽生。」師云く、「邪に因つて正を打す。」僧云く、「雪竇云く、『我れ若し見しかば、便ち與に禪牀を掀倒せん』と、意、那裏にか在る。」師云く、「手を把つて相共に高峯に上る。」僧云く、「二大老の用處、是れ同か是れ別か。」師云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す。」僧云く、「上來一一指示を蒙る、向上宗乘の事、又如何。」師便ち喝す。

乃ち拄杖を拈じて卓一下して云く、「淨法界身、天を撐へ地を拄ふ、本出沒無し、瓜を種ゑて瓜を得たり。便ち恁麽に領じ去らば、恩を報ずるに分有らん。其れ如し未だ然らずんば、二龍溫涼の水。」

結夏小參、僧問ふ、「綠暗く紅稀にして孟夏漸く熱す。應節の一句願はくは提唱を聞かん。」師云く、「薰風自南來、殿閣生微涼。」僧云く、「禁足安居、誰か我れに似たる、角を掛くる羚羊、蹤を露さず。」師云く、「路の上る可き有れば、高きも人更に行く。」僧云く、「朝に西天に到り、暮に東土に歸る。是れ什麽人の分上の事ぞ。」師云く、「是れ安居底の分上の事。」僧云く、「恁麽ならば則ち一聲の黃鳥青山の

㊀爾雅釋天に、「春を青陽と爲す、氣青くして溫陽、夏を朱明と爲す、氣赤くして光明。」

外、風光を占斷して主人と作る。那裏よりか與麼地なることを得たる。」僧云く、「松源に三句有り、者參を許さんや也た無や。」師云く、「何ぞ妨げん、問ひ將ち來ることを。」僧云く、「大力量の人、甚に因つてか脚を擡げ起さゞる。」師云く、「草鞋露に和して重し。」僧云く、「口を開くこと甚に因つてか舌頭上に在らざる。」師云く、「牙齒一具の骨を見ず。」僧云く、「明眼の衲僧、甚に因つてか脚跟下紅絲線斷えざる。」師云く、「脚頭也た脚底。」僧云く、「學人今夜小出大遇」といつて便ち禮拜す。師云く、「人に向つて作麼生か擧せん。」

乃ち云く、「西天の嚴規、東土の嚴令、齊しく箇の劍利の漢、大坐當軒底の事有ることを知らんことを要す。克く此の事を得れば、三月安居、九旬禁足、天も覆ふこと得ず、地も載すること能はず。日用四威儀の中、全く聲色堆上に坐して、專ら聲色堆の主宰と做る。箇の中領覽有れば、都べて魔界に墮す。所以に道ふ、大圓覺を以て我が伽藍と爲して、身心平等性智に安居すと。瞥喜瞥瞋、理會無し、新羅夜半日頭明かなり。然も是の如くなりと雖も、諸人切に忌む腦を刺して膠盆に入ることを。何が故ぞ。」良久して云く、「綠樹陰濃にして夏日長し、樓臺影を倒にして池塘に入る。」

復た德山小參答話せず、問話の者有らば三十棒といへる公案を擧して、師拈じて云く、「盡く謂ふ、口を開けば卽ち錯り、舌を動ずれば卽ち乖くと。殊に知らず九曲の黃河、底に混じて流る。」

次の日上堂、僧問ふ、「西天の舊令、東土共に遵ふ。諸方樣に依つて葫蘆を畫く。龍寶門下の標格、作麼生。」師云く、「山僧に孤負すること莫れ。」進んで云く、「綠水青山元來安居、露柱燈籠終日禁足、衲僧家甚に因つてか別に規矩を立す。」師云く、「嚴師、好弟子を出す。」進んで云く、「恁麼ならば則ち行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時。」師云く、「更に須らく子細にすべし。」進んで云く、「記得す、乾峰、衆に示して云く、『法身に三種の病、二種の光有り、須らく是れ一一透得して始めて穩坐地を解すべし、』意那裏にか在る。」師云く、「緬に想ふ、會裡に人有ることを。」進んで云く、「雲門便ち衆を出でて云く、『庵內の人、什麼と爲てか庵外の事を見ざる』と、意旨作麼生。」師云く、「果然。」進んで云く、「峰呵呵大笑すと、又如何。」師云く、「身を藏すに路無し。」進んで云く、「門云く、『猶ほ是れ學人が疑處在り、』如何が委悉せん。」師云く、「㊟爭臣有るときは則ち君不義に落ちず。」進んで云く、「古人底は且く置く、作麼生か是れ正當今日の法要。」師云く、「水到れば渠成る。」

乃ち拄杖を卓して云く、「二千年前此の制有り、四聖六凡都べて者箇を出でず。二千年後其の例を擧づ、五湖の漁子大家者裏に在り。」又拄杖を卓して云く、「出と不出と在と不在と、且喜すらくは靜處娑婆訶。」

五月旦上堂、僧問ふ、「松竹陰陰として夏日長し、好箇の時節、請ふ師提唱せよ。」師云く、「三十年後

㊟經に云く、「天子、諍臣七人有れば、無道と雖も其の天下を失はず、諸侯、諍臣五人有れば無道と雖も其の國を失はず大夫諍臣三人有れば、無道と雖も其の家を失はず、士、諍友有れば則ち名を離れず、父、諍子有れば則ち身不義に陷らず。」爭或は諍に作る。

錯つて商量すること莫れ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち黄鶴樓中玉管を吹く、江城五月落梅花。」師云く、「人遠き慮無きときは必ず近き憂有り。」進んで云く、「只だ大地を變じて黄金と作し、長河を攪いて酥酪と爲すことは則ち無きにはあらず。和尚且く道へ、如何なるか是れ向上宗乘の事。」師云く、「南斗は七、北斗は八。」進んで云く、「向下又作麼生。」師云く、「金香爐下の鐵崑崙。」進んで云く、「畢竟如何が領略し去らん。」師云く、「阿儞舌を全うし去らば亦可ならん。」

乃ち擧す、㋑鼓山、新羅の僧に問ふ、「山に上り來つて什麼をか作す。」對へて云く、「和尚を禮拜す。」鼓山云く、「盡世不標、什麼の處に向つてか禮拜せん。」對へて云く、「不標の處に向つて禮す。」鼓山云く、「儞は是れ新羅の人なることを念ふて、儞に二十棒を放す。」師云く、「者の僧、若し『盡世不標、什麼の處に向つてか禮せん』といふところに於て、左右を摸著するの勢を作さば、鼓山を拜し得ん。鼓山若し『不標の處に向つて禮せん』といふところに於て、㋺亞身合掌せば、者の僧を接得せん。二り俱に莽鹵。儞師僧家、什麼の救處か有る。」拂子を以て禪床を擊つこと一下して下座。

端午上堂、僧問ふ、「今朝正に是れ端午の節、昔日善財、藥を採り來る憑據、如何が領會せん。」師云く、「一著を放過す。」進んで云く、「將に佳辰に逢ふ底、盡大地是れ藥ならざること莫しや。」師云く、「何ぞ必せん。」進んで云く、「恁麼ならば薰風自南來、殿閣生微涼。」師云く、「謂つ可し、諸侯道を避くと。」進んで云く、「記得す、㋩文殊當年、女子の定を出すこと得ざる、意旨作麼生。」師云く、「雲は嶺頭に在つて閑不徹。」進んで云く、「下方の罔明甚と爲てか却つて出し得る。」師云く、「水は澗底に流れて太忙生。」進んで云く、「文殊神力無しと爲んか、罔明神力有りと爲んか。」師云く、「釣魚船上の謝三郎。」進んで云く、「尊貴の路を行かずんば、爭か上頭の關を踏まん」といつて便ち禮拜す。師喝して云く、「且く脚下を看よ。」

乃ち云く、「强ひて菖蒲を切ることを用ひず、剛ひて㋥靈符を掛くることを要せず。衲僧家別に長處在り、盡天下の妖怪を消殞し去る。」拄杖を卓して云く、「頭長きこと三尺、知んぬ是れ誰ぞ。相對して無語獨足にして立つ。」

上堂、僧問ふ、「綠樹陰濃を布き、薔薇晩香を吐く。正に好し看雲亭下暑を避くる處、佳景を賞するの句、請ふ師提唱せよ。」師云く、「㋭閣浮樹下笑呵呵。」進んで云く、「無寒暑の田地の如きんば、如何が踏著せん。」師云く、

㋑此の問答は禪林類集禮拜の部に見ゆ。

㋺韻會說文に、亞は醜なり、人の背を局するの形に象ると。又廣韻に就なりと。

㋩文殊尸利、佛集を見んと欲して到ることを得る能はず、諸佛各の本處に還る、文殊便ち諸佛の集る處に到れば一女人有り、佛に近いて定に入る。文殊、佛に白して言く、何ぞ此の女人佛に近いて坐することを得て而も我れ得ざると。佛言く、汝此の女を覺し、汝自ら之れに問へ。文殊即ち彈指之れを覺ぜども、而も覺めず、文殊、佛に白して言く、我れ覺さしむることを得ずと。是の時一菩薩有り、棄諸蓋と名く、即時に下方より來り、佛所に到り立つ、佛、棄諸蓋に告げ玉はく、汝此の女人を覺せと。蓋彈指すれば、此の女人三昧より起つ、文殊、佛に白す、何の因緣を以て、我れ此の女を起たしむる能はざるに、蓋、彈指すれば便ち三昧より起つ。佛言く、汝此の女に因つて菩提心を發し、是の女人、棄諸蓋に因つて菩提心を發す、故に汝能はざるのみ。諸佛要集經下文に詳かなり。

㋥事言要玄に抱朴子曰く、「五月

「坑に墮ち塹に落つ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち處處の綠楊、馬を繫ぐに堪へたり。」師云く、「蹉過するも也た少からず。」進んで云く、「記得す、古人云く、『大用現前、軌則を存せず』と、如何なるか是れ大用現前底の時節。」師云く、「勘破了也。」進んで云く、「與麼ならば則ち謂つ可し隨處に主と作れば、立處皆眞なりと。」師云く、「雪上に霜を加ふ。」進んで云く、「日親しく法要を聞く、如何が保任せん。」師云く、「疎田水を貯へず。」

乃ち擧す、趙州因に僧問ふ、「如何なるか是れ趙州。」州云く、「東門南門西門北門。」僧云く、「這箇を問はず。」州云く、「儞趙州を問ふ」と。師云く、「山僧は然らず、若し如何なるか是れ趙州と問ふこと有らば、只だ他に向つて道はん、石橋度り來るや也た未だしやと。這箇を問はずと道はゞ便ち道はん、山を下り去るを待つて、腋裏に汗出でんと。且く道へ、古人の道ふ底と、那箇か親、那箇か疎。請ふ各〻辨別して看よ。」

牛夏上堂、僧問ふ、「山嵩嶺に連り、地洛川に近し、一機一境勝槩ならずといふこと無し。唇吻に涉らず如何が津を通ぜん。」師云く、「心人に負かざれば面に慙づる色無し。」進んで云く、「九旬已に半を過ぐ、諸人自ら時を知る。當頭與麼の時節、學人如何が領略せん。」師云く、「且く者邊に過ぎよ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち杲日天に麗しく淸風地を匝る。」師云く、「放下著。」進んで云く、「僧、智門に問ふ、『蓮花未だ水を出でざる時如何。』門云く、『蓮花』と、此の意如何。」師云く、「風吹けども入らず。」進んで云く、「僧云く、『水を出でて後如何。』門云く、『荷葉』と、又作麼生。」師云く、「水洒げども著かず。」進んで云く、「蓮花、水を出づると未だ水を出でざると相去ること多少ぞ。」師云く、「秦甸幾人か蹈著す。」

乃ち云く、「半夏已前、我れ諸人の爲に隱す、隱せば彌〻露る。半夏已後、我れ諸人の爲に顯す、顯せば露れず。正當今日半夏隱さず顯さず、我れ諸人の爲に說破せん。」拄杖を卓すること一下して云く、「六月已に熱す、五穀好く熟せん。」

寺莊等公據を賜ふ上堂、拄杖を拈じて云く、「自家の田地觸處全く彰る、公驗一回手に入ることを得て、百劫千生曾て荒れず。正與麼の時作麼生。」拄杖を卓して云く、「皇風と祖風と鎭に扇ぎ、帝道と佛道と遐に昌なり。」又卓すること一下して便ち下座。

重九上堂、「茱萸露を帶び金菊花を發く、大用現前軌則を存せず。諸禪德若し箇の中の意を識らば、南山東籬一家家。」

二月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「雪霽れて千山綠正に濃なり、梅腮柳面轉た㊫縱容。君が爲に箇の中の意を報せんと擬すれば、幽鳥喃喃として亂峯に入る。」拄杖を卓すること一下す。

五日を以て、赤靈符を作り、心前に著く。」

㊫醒世錄一に云く、「大海の北に大樹王有り、名づけて閻浮樹と曰ふ、周圍七十由旬、根、地に入ること二十由旬、高さ百由旬、云々、枝葉四面に垂る、西復た五十由旬。」

㊫縱容、又從容に作る、禮記注に云く、「縱容は優游道らざるの貌。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「滿街の楊柳綠絲の煙、盡き出す長安二月の天。節に應ずる一句、請ふ師提唱せよ。」師云く、「寥寥たる天地の間、獨立して望何ぞ極らん。」僧云く、「瞿曇今日般涅槃に入る、未審し什麼の處に向つてか去る。」師云く、「人人の鼻孔裏に向つて去る、還つて覺ゆるや。」僧云く、「恁麼ならば則ち哭底便ち是か、笑底便ち是か。」師云く、「將に謂へり、儞是れ領話せずと。」僧云く、「若し我れ滅度すと謂はゞ、我が弟子に非ず、若し我れ滅度せずと謂はゞ、亦我が弟子に非ずと、意旨作麼生。」師云く、「黃河の點魚。」僧云く、「今日の節に因らずんば、餘日實に逢ひ難し」といつて、便ち禮拜す。師云く、「向後人に向つて錯つて舉することを莫れ。」

乃ち橫に拄杖を按じて云く、「雙趺槨を出す事親しみ難し、有も也た人を累し、無も人を累す。瞻部州中休すること得ず、年年二月㋐萍蘋を費す。」喝一喝、拄杖を擲下して下座。

龍翔正眼の二塔主至る上堂、「寶山に一句子有り、只だ人の聽くことを許して人の擧することを許さず。已に是れ人の聽くことを許す、甚に因つてか人の擧することを許さゞる。」拂子を擊つて云く、「龍蛇を辨ずる眼俱に正しく、虎兒を擒ふるの機也た全し。」

上堂、拄杖を卓して云く、「百億の須彌、百億の日月、恒沙の諸佛、恒沙の國土、盡く拄杖頭上に在り。諸人見得せば、妨げず一生參學の事了畢せん。其れ如し未だ然らずんば、眼を開いて瞌睡せん。」又卓一下して下座。

㋐左傳隱公三年に云く、「苟も明信有れば、澗溪沼沚の毛、蘋蘩薀藻の菜、筐筥錡釜の器、潢汙行潦の水、鬼神に薦むべし。」

四月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「此の事去來無し、甚に因つて昨日春去り今朝夏來る。㋑物の性一世に住すと道ふに迄つては、肇公也た是れ盲龜空谷に入る。衲僧家牙劒樹の如く、口血盆に似たり、者裏に到つて作麼生か道著せん。若し人の道著する無くんば、」拄杖を以て畫一畫して云く、「喜。」

結夏上堂、僧問ふ、「今日是れ結制、結する底是れ何物ぞ。」師云く、「猛虎路に當つて坐す。」僧云く、「恁麼ならば則ち官池水深く、看雲亭高し。」師云く、「吾れ常に此に於て切なり。」僧云く、「只だ老師の兩句子を將つて、七十員の禪佛に布施せん。」師云く、「只だ阿儞のみ有つて呑吐不下。」

乃ち云く、「是れ箇の水牯牛、山邊水邊賴に自ら無事。今日端無く欄裏に逗入して、鼻貫索頭全く別人の手裏に在り。行かんと要すれども也た能はず、臥せんと要すれども也た能はず。才に情を恣にせんと擬すれば、痛く鞭策を加へて道ふ、叱、者の畜生と。嗚呼嗚、只だ自知す可し。」拂子を擊つこと一下す。

㋑肇論物不遷論の說なり。

上堂、拄杖を卓して云く、「人情若し者箇に似たらば孔丘、顏回を打殺せん。道情若し者箇に似たらば、違磨、少林を失却せん。」便ち下座。

端午上堂、僧問ふ、「文殊小男、誰が爲にか藥を要す。」師云く、「古佛廟前自ら顚蹶す。」進んで云く、「善財童子採り來る、何の草ぞ。」師云く、「無根滿地、無葉普天。」進んで云く、「父子便を得る處、千古

檢點に遭ふ。」師云く、「儞老成の勢有り。」

乃ち云く、「端午天中の節、土を咒し壁に書することを用ひず、只だ一神咒を以て一切の妖怪を消殲し、佛病祖病を除却す。且く道へ、是れ那箇の神咒ぞ。」便ち威を振つて一喝す。

上堂、擧す、三祖云く、「一卽ち一切、一切卽ち一」と。驀に拄杖を拈じて云く、「三祖大師、非非想天に在つて、一箇の木撩子を擲下して、諸人の眼睛を換却す。忽爾として下り來つて旋轉舞蹈す、恰も獨り樂むが如し。而も諸人の見ず知らざるを見て、高聲に唱へて云く、龜毛長きこと七尺と。」拄杖を卓すること一下して云く、「參。」

上堂、橫に拄杖を按じて擧す、㉗芭蕉、衆に示して云く、「儞に拄杖子有らば、我れ儞に拄杖子を與へん、儞に拄杖子無くんば、我れ儞が拄杖子を奪はん」と。拈じて云く、「芭蕉與奪は無きにあらず、只だ是れ擒縱未在。山僧尋常皷皷鱗鱗地に向つて人を出さんと要す。猶ほ一半を救ひ得ざること在り、豈に況んや山形邊の事を吐出するをや。太だ遠くして遠し。」拄杖を卓すること一下す。

解夏上堂、僧問ふ、「三通鼓罷んで四衆筵に臨む、好箇の時節、請ふ擧揚を聞かん。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」進んで云く、「九旬期已に滿つ、衲僧脚頭闊し。正當恁麼の時、如何なるか是れ自恣の一句。」師云く、「柳栗橫に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。」進んで云く、「記得す、洞山云く、

㉗傳燈十二にいふ「郢州芭蕉山慧清禪師は新羅國の人なり、法を南塔涌に嗣ぐ。」

『秋初夏末、直に須らく萬里無寸草の處に向つて去るべし』と、意旨如何。」師云く、「步步清風起る。」進んで云く、「石霜云く、『門を出づれば便ち是れ草』と、又作麼生。」師云く、「草鞋露に和して重し。」進んで云く、「和尙恁麼の答話、是れ古人の與に氣を出すと爲んか、復た古人の與に屈を雪ぐと爲んか。」師云く、「平蕪盡くる處是れ青山。」進んで云く、「與麼ならば、則ち一言別路無し、萬世盡く歸を同じうす。」師云く、「傍觀分有り。」進んで云く、「只だ老師の四五轉話を將つて、甘つて九夏賞勞の功に當つ」といつて、便ち禮拜す。師云く、「謂つ可し南北東西皆可可と。」

乃ち擧す、翠巖夏末、徒に示す、「一夏已來兄弟の爲に東說西話す、看よ翠巖が眉毛在りや。」保福云く、「賊と作る人心虛る。」長慶云く、「生せり。」雲門云く、「關。」師云く、「三大老、俱に隻手を出して看よ眉毛箭簳の如く長きこと數寸、只だ是れ人翠巖の家風を扶樹す。龍寶今夏兄弟の爲に說話せず、の覷破することを缺く。然も是の如くなりと雖も、落霞と孤鶩と齊しく飛び、秋水長天と共に一色。」

八月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「向上の一路千聖不傳、八月初一龍寶山前。」拄杖を卓して下座。

中秋上堂、擧す、長沙、仰山と月を翫ぶ次で、仰山月を指して云く、「人人盡く這箇有り、只だ是れ用ひ得ず。」長沙云く、「恰も儞を倩ふて用ひんや。」山云く、「儞試みに用ひよ看ん。」長沙一蹈に蹈倒す。仰山起き來つて云く、「儞大いに箇の大蟲に似たり」と。師云く、「仰山起き來つて、果然として用不得と道はゞ、長沙脚を擡げ起さゞることを見盡さん。然も恁麼なりと雖も、月は中秋に到つて滿ち、

風は八月より涼し。」拂子を擊つこと一下す。

九月旦、太上法皇、種種の㊂剪采を惠むに因つて上堂、須菩提、巖中晏坐、帝釋花を雨らす話を擧して、師云く、「天帝釋花を雨らして地を動ずると、太上法皇此の花を惠みたまふと、是れ同か是れ別か。若し別と謂はゞ眼裏に筋無し、若し同と謂はゞ其の意作麼生。」良久して云く、「住みね住みね、秋色登平楓葉の序、西風轉た冷かなり草花の天。」拂子を擊つこと一下す。

重陽上堂、「菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る。㊃靖節阿轆轆の處、衲僧一重の關と作る。且く道へ、他は是れ俗漢の陋韻、甚と爲てか衲僧一重の關と作る。」喝一喝して云く、「參。」

上堂、「山僧卽今須彌頂上に在つて說法す、諸人也た是れ鐵輪峰頂に在つて聽法す。坐底立底、賓主歷然、還つて會すや。會得せば盡十方界乾坤大地、諸人の眼睫上に在つて大光明を放つ。其れ如し未だ然らずんば、樹頂老い山顏醉ふ。」拂子を擊つこと一下す。

開爐上堂、擧す、趙州、衆に示して云く、「三十年前、南方の火爐頭に箇の無賓主の話有り、直に而今に至るまで人の擧著する無し」と。師云く、「趙老面皮厚きこと三寸、手を炙つて熱を助けんことを要須す。其れ爐下春に似たるを如何せん。直饒ひ而今人の擧著する有るも、方に知る三箇の枯柴、品字に燒く。」

㊂剪采は造花なり。

㊃排韻氏族に、「陶元亮、晉に在つて淵明と名づけ、宋に在りて潛と名づく、世靖節先生と號す。」

上堂、「一句去り一句來つて、儞が一平生を慶快す。忽然として傾湫倒岳、那裏にか入り那裏にか出でん。昨夜三更牛を失却す、天曉起き來つて火を失却す。」拄杖を卓すること一下す。

上堂、擧す、㊄盤山云く、「向上の一路千聖不傳。」慈明云く、「向上の一路千聖不然。」師云く、「二大老、只だ鬼、漆桶を爭ふことを解す。山僧は便ち道はん、向上の一路千聖齊しく行くと。」

㊄潙州盤山寶積禪師は、馬祖道一禪師の法嗣なり、傳は聯燈四にあり。

大德寺語錄 終

㋑頌古

㋺淨居窓牖の中に於て叉手す

㋩玉函の鑑月秋を期せず、夜靜にして方に知る波浪の別なることを、此れより相逢うて路迷ふに似たり、崔嵬たる檀特硬きこと鐵の如し。

㋥爾の時迦葉諸の比丘に告ぐ、「佛已に荼毗、金剛の舍利は我れ等が事に非ず、我れ等宜しく當に正法を㋭結集して斷絶せしむること無かるべし。」

㋬列三析半信何ぞ通せん、㋮首を回せば白雲眼力空し、㋯鷄足峰前未だ歸り去らず、㋰多羅葉上悲風を動かす。

㋱行思禪師、㋲希遷に問うて云く、「汝

㋑頌古は古則を頌揚するの意にて、佛祖の問答商量せられたる古則に就いて、韻語の偈頌を以て宗意を發揮したるものを云ふ。宋の天禧年間に、汾陽昭覺禪師、頌古一百則を作る、是れ頌古の初めなり。

㋺釋迦太子たりし時、世間、老、病、死の慘狀を見て、畏怖の情に堪へず、獨り出家の法、生死を脫得すると聞き、即ち深く尊信すと說いて佛本行經に詳かなり。又經に據るに、老、病、死、出家、以上四等の事を見て、心に悲喜有り、是の夜一人の天人有り、名けて淨居と曰ふ、窓牖の中に於て叉手して言く、「出家時至れり云云。」

㋩函は古文、涵に同じ。第一句、佛の內鑑自ら冷然として盡十方を照破し、廣大圓明豁達虛凝、涅槃の求むべき無きが故に正覺を成ぜんことを期せずとの意なり。第二句、如來本覺の內證より無緣の大慈を發して、正位に證を取り玉はざるの玄旨を演ぶ。夜靜にして方に知るとは、所謂實際理地一塵を受けず、眞如法界自無く他無しと雖も、隨緣差別の幻境の上には生死有り涅槃有り、凡有り聖有り、大慈善巧の願輪に非ずんば、誰れか此の患難を救はん。波浪の別とは、生死千差の苦海を指す。

什麼の處よりか來る。」云く、「曹谿より來る。」思乃ち拂子を擧して云く、「曹谿に還つて這箇有りや。」云く、「但だ曹谿のみに非ず、西天にも亦無し。」思云く、「子曾て西天に到ること莫しや否や。」云く、「若し到らば卽ち有り。」思云く、「未在、更に道へ。」云く、「和尙也た須らく一半を道取すべし、全く學人に靠ること莫れ。」思云く、「汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後、人の承當すること無けん。」

㋻明暗雙雙對揚を絕す、㋼愁人未だ說かざるに愁腸斷ゆ、㋽金毛の獅子踞地を解す、㋾寃苦蒼天又一場。

僧、㋿大隨に問ふ、「劫火洞然として大

第三句、太子既に淨居の奬勸に隨つて下化衆生の願海に入り、曠劫不變の願輪に鞭ちて方便有餘の化行を行ず、恰も初發心地の行人迷倒昏愚なるに似たるを云ふ。第四句は太子既に檀特山に入りて苦修錬行し、次ぎに雪山に入りて端坐六年、千辛萬苦の體裁、難信難解の樣子なり。

㋮爾の時迦葉云々、會元釋迦章に見ゆ。

㋭結集とは佛の敎說を結合編集するの意。

㋬列三析半とは展演開敷縱橫羅列の義なり、言ろは、綴ひ貝葉金文大いに敷演し大いに展開すと雖も、猶ほ是れ能見所見を出でず、豈に眞の正法を結集すと云ふに足らんやと。

㋮此の經を得る者を佛祖聖賢と名づけ、此の經を失ふ者を六趣の衆生と言ふ。此の經機に出現する時、上下四維三世古今、全く纖毫有るこを見ず、空寂寥、虛豁豁、初めて信ず楞嚴に所謂、淨極り光通達して寂照虛空を含む、却り來りて世間の事を觀ずれば、猶ほ夢中の事に似たりとの意也。

㋯雞足は卽ち迦葉尊者を指す、迦葉既に衆に首たり、故に雞足を言ふときは、則ち畢波羅窟裏結集會上八百八萬の大衆同時に擧ぐ。

㋰貝多羅は樹の名、印度にては紙の代用として書寫に用ゐらる。言ふ意は、多少の大阿羅漢、眞に如來の祕經の義に入得せず、故に空しく八數の說相、五時の遺音を執して、以て如來の正法眼藏なりと爲して、不去來の處に去來の相を見、不生滅の地に生滅の悲を懷くをいふ。

㋱吉州青原山行思禪師は法を曹

千倶に壞す、未審し這箇壞か不壞か。」隨云く、「壞。」僧云く、「與麼ならば則ち他に隨ひ去る。」隨云く、「他に隨つて去る。」

ヒ劫火他に隨つて喚べども回らず、ノ遠く西蜀を離れて去つて還た來る、ハ大千總に者の僧の眼に等し、ネ古佛光中笑口開く。

ヘ百丈の懷海、一日衆に謂つて云く、「佛法は是れ小事にあらず、ラ老僧昔し馬大師に一喝せられて、直に得たり三日耳聾し眼暗きことを。」黄檗擧するを聞いて舌を吐く。丈云く、「子已後、馬祖に承嗣すること莫しや。」檗云く、「然らず、今日師の擧するに因つて、馬祖の大機大用を見ることを得たり。然

淺の六祖大師に嗣ぐ。傳燈五に詳に出づ。

ル石頭希遷禪師は法を青原行思禪師に嗣ぐ、師沙彌たりし時、曹溪の六祖大師に參す、祖の遺命に隨つて遂に青原に見ゆ、原其の來るを見て卽ち問ふ、「汝什麼の處よりか來る。」

ラ第一句、青原父子相見唱拍鼓舞の間、明頭に暗有り、暗頭に明有り、恰も兩鏡相照して中心影像無きに似たるを云ふ。

ワ第二句、父子情思相通じ、志氣相投ず、恰も慾人と慾人と狹路に相逢ふて、未だ片言を交へず、目擊の間、中腸先づ回轉するが如きを云ふ。

カ第三句、鵠林禪師云く、「作麼生か是れ聞地の獅子、青原底と謂はんか、石頭頭底と爲んか。」

ヨ第四句、鵠林禪師云く、「青原

曰ふ、未在更に道へと、此の時心腸を傾盡し、肝膽を吐出す、更に者の什麼を道つて、恁麼に逼拶し將ち來る、恰も枯骨を壓して汁を瀝らんと欲する者に似たり。」

タ大隨眞和尚は法を大安禪師に嗣ぐ。此の問答、傳燈十一に出づ。

レ第一句、鵠林云く、「大隨他に隨つて去るの一語、一代藏經も註註し及ぼさず、明眼の衲僧も擬案不著、擬議するときは、快鷹趁へども及ばず、千牛拽けども回らず、所以に道ふ。」

ソ其の僧、大隨の落處を知らず却つて此の問を持して、直に舒州の投子山に往いて前話を擧似す。投子晉を焚いて禮拜して云く、西蜀に古佛有り、出世す、爾且つ遠に回れと。其の僧復た回つて大隨に到る、隨既に遷化す、二句故に云ふ。

ツ第三句は、今時諸方の宗師、天下の禪流を指す。

ネ古佛光中は、投子の所謂四句に古佛有りの語より來る、笑口開くとは、面前者の僧及び今時の人の行履を見るに、寔に一場の笑具のみ。

ナ百丈懷海は馬祖の法嗣なり。

ラ此の因緣、碧巖十一則の評に詳に出づ。

ム此の句、百丈、馬祖の一喝を聞いて耳聾し眼瞎す、從來大地黑漫漫、從前多少の得力の處を打失して、覺えず佛祖の堂奧に入りし樣子を頌ず。

ウ此の句、黄檗大師如上の因緣を聞いて、忽ち魂飛び魄散じて覺えず舌を吐く、此れより大機大用を發し、佛祖藩レ入萬仞參レ天の荊棘を栽ゑしことを頌ず。

ヰ此の句、諸方相似の禪徒、末代小果の瞎流の得て論量すべからざることを云ふ。

ノ此の句、今時紙傳拂傳、虛を承け響を接ぐ底の賢編、此に兩兩、彼に三三、從上師資相承の熙寃を聞いて心神驚動することを云ふ。

オ此の因緣、碧巖二十三則に出づ。保福、長慶、鏡清、總に雪峰の法嗣なり。

ク華嚴に云く、「普善財童子妙峰頂上に行いて德雲比丘を見んと欲す、七日にして遂はず、一日別峰に在りて相見す。」蓋し善財童子は行人辨道、遂趣の一念子なり、妙峰とは第八頼耶無分別識なり。德雲比丘とは根本無作平等の大智なり、七日にして遂はずとは、七識摩耶傳送識なり。

ヤ孫公は長慶の俗姓なり。

マ鵠林云く、「國師今經義を取

㋔妙峰孤頂人到り難し、只だ看る白雲飛んで又歸ることを、松檜蒼蒼幾歳をか歴たる、莫敢あれ巖畔鳥聲の稀なることを。

㋐僧、巴陵に問ふ、「如何なるか是れ提婆宗。」巴陵云く、「銀椀裏に雪を盛る。」

提婆宗分節し難し、誰か道ふ銀椀裏に雪を盛ると、大地山河一等の風、人間天上蕭洒絶。

㋑盤山、垂語して云く、「三界無法、何れの處にか心を求めん。」

㋒千峰雨霽れて露光冷じ、月は落つ松根蘿屋の前、等閑に此の時の意を寫さんと擬すれば、一溪雲鎖して水潺潺。

㋓巖頭、僧に問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧云く、「西京より來る。」頭云く、「㋕黄巢過ぎて後、還た劍を收得すや。」僧云く、「收得す。」頭、頸を引いて近前して云く、「㋖囚。」僧云く、「師の頭落ちぬ。」頭、呵呵大笑す。僧後に雪峰に到る、峰問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧云く、「巖頭より來る。」峯云く、「何の言句か有りし。」僧、前話を舉す、雪峰打つこと三十して趂ひ出す。

㋗黄巢過ぎて後劍收め難し、㋘提げ去り提げ來つて手を傷つて憂ふ、㋙是れ山藤三十下せずんば、㋚梵天の餘血五湖に流れん。

㋛雲門、垂語して云く、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」自ら代つて云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す。」

らず、特に雪峰門下諸老の唱和諸方に超卓し、古今に獨歩するを嘆賞す、時人總に其の門圍を窺ふこと能はず、就中保福長慶遊山の因緣、天に露る赤土の流星飆、泉に欲する黑火の無底坑、鬼神も亦喪身失命し去らん、是れ所謂孤峰人到り難き者なり、其の千態萬狀譬へば孤雲の空に浮ぶに似て、乍ち獸の如く乍ち鳥の如く、或は奇峰の如く、或は拿蓋に齊うして全く定度無し、或は萬仞の遠巒に等うして、遙に松杉の鬱密深沈たるを望み、終に斧斤の聲を聞かず、百千歳を歴て蒼蒼蒼たるのみ、如上孤絶の峰巒鳥飛んで涉らず、獸走りて望を斷つ、此の話に到つて明眼の衲僧參の上士も亦手脚を挾むことを得ず、百鳥花を啣むに路無く、外道潛に覗ふも見えず、任他あれ巖畔鳥聲の稀なることを。」

㋐巴陵の鑑禪師は法を雲門大師に嗣ぐ。此の問答、碧巖十三則に出づ。

㋑十五祖迦那提婆尊者、法を龍樹大士に嗣ぐ、大に外道を摧伏して弟子と爲す、宗風大いに振ふ、時に稱して提婆宗と曰ふ。後來江西の馬大師、楞伽經に所謂佛語心を宗と爲し無門を法門と爲すと云ふを擧して、云く、「大凡そ言句有れば是れ提婆宗。」

㋒盤山寶積禪師は法を馬祖に嗣ぐ。聯燈四に傳あり。

㋓鵝林云く、「此の頌、全篇一團の大火聚の如く、一條の熱鐵柱に似たり、如何が手脚を著けん、誰れか知らん國師も亦頌じ得て喪身失命し、盤山も亦說き得て喪身失命し了ることを。」

㋔第二句、こゝに於て一枚巖頭の頭を荷負し來つて處處に行いて敗闕を納る、殊に知らず早く是れ蜂を犯して手を傷ることを。

㋕第三句、雪峰三十棒して趂ひ出すを云ふ。

㋖第四句、若し雪峰の棒無くんば、此の僧空しく巖頭の頭を荷擔して、四天下を遍つて處處の叢林血檢狼藉せんと。

㋗韶州雲門山文偃禪師は法を雪峰に嗣ぐ。此の垂語、碧巖八十三則にあり。

㋘鵝林評して云く、「此の語極めて離入離解、學者をして理窟き詞窮り、心死し意消する處に到りて、我が法二空の暗谷を超過し、生佛一如の金網を打脫せしむ、見地不脫の禪者曾て夢にだも見ると能はず、所以に言ふ、古佛光中人の知ること少れなりと。」

㋙鄂州の巖頭和尚、字は全奯、泉州柯氏の子なり、法を雪山に嗣ぐ。此の因緣、碧巖六十六則に出づ。

㋚黄巢は人の名なり、通鑑に「僖宗乾符二年、黄巢赤衆千餘人を率めて王仙芝に應ず、巢少かりし時、仙芝と皆私鹽を販るを以て事と爲す、巢騎射を善くし、任俠を喜び、粗々書傳を涉る、屢々進士に擧げられども第せず、遂に盜を爲す、仙芝と州縣を攻剽して山東に横行す云々。」

㋛囚は玉篇に船を牽く聲なり、唐音「おう」、重きものを牽くゆゑ、思はず「おう」と聲が出るなり。

㋜第一句、者の僧岩頭の意を會せず、大いに腰過し了る、而るを却つて自ら謂らく、黄巢の劍を收得して蓋だ痛快にし去れりと。

㋙古佛光中第幾機ぞ、南山雲外人の知ること少なり、千溪日は晩る樵歌の路、歸去來兮來去歸。

㋚仰山、三聖に問ふ、「汝名は什麼ぞ。」聖云く、「慧寂。」山云く、「慧寂は是れ我れ。」聖云く、「我が名は慧然。」仰山、呵呵大笑す。師、著語して云く、「什麼の處にか去る。」

㋛照日影の中雪の霽るゝ春、梅腮柳面芳を鬪して新なり、詩緣風興限り無き意、獨り許す苦吟野外の人。

㋜雲門、垂語して云く、「㋝乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在す。燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、三門を將つて燈籠上に來す。」

㋝袁州の仰山慧寂禪師は法を溈山に嗣ぐ、三聖慧然禪師は法を臨濟に嗣ぐ。此の因緣、廣燈十二、三聖の章に載す。

㋞此の頌、道人潛修功積り、密參力充つるときは八識頓耶の暗谷を蹈醒して、大圓鏡光の慧日乍ち展出して、有爲住相の積雪乍ち解く。これより四句の願輪に轉ち益々進んで退かざるときは、眞如平等の堅氷を摧碎し、法性一枚の層氷を消融し、眞如不二の聖境に遊戲し、明暗雙雙底の實處に逍遙して、百華叢裏に遊ぶが如し、佛祖も手を挾むことを得ず。然、寂二老の如き、總に是れ者般の人、其の唱拍鼓舞、恰も春花の春暖を得て紅紫を鬪はしむるに似たるを云ふ。

㋟此の話、碧巖六十二則にあり。

㋠以下祕在すまで、肇法師寶藏論の中一段の說話なり。

㋡鴻林云く、「此の頌極めて精密密地、此の頌極めて孤峻峻地、却つて寒毛卓豎することを覺ゆや。」一寶は則ち人人本具の性、形山は卽ち四大五蘊の空屋なり。

㋢此の話碧巖四十四則にあり、吉州禾山の無殷禪師、法を九峰虔禪師に嗣ぐ、習學云云の語は肇公寶藏論の中の一段の說話なり。議者の曰く、「生死卽涅槃と說くを聞いて之れを信ずるは聞位なり、習學して生死を恐れず、涅槃を求めずと信ずるは是れ絕學位なり、絕學は道に近き故に隣と言ふなり、生死涅槃平等にして、聞隣の二を離る、是れ眞の無上道なり、故に眞過と云ふ、過は所謂透過の義なり」と。禾山此の一段の教意を拈じ來りて以て探竿影草と爲す、僧有り、果然として一釣に上り來りて卽ち問ふ、「如何なるか是れ眞過、」山云く、「解打鼓」と、鐵鎚擊碎す黃金の骨。大凡そ四箇の解打鼓有り、此れを禾山の四打鼓と曰ふ。

㋣宇宙乾坤同一寶、燈籠佛殿形山の中、青松雪霽れて岩勢晩れ、寒月風清うして溪畔空し。

㋤禾山、垂語して云く、「習學之を聞と謂ひ、絕學之を隣と謂ふ。此の二を過ぐる者、是れを眞過と爲す。」僧出でゝ問ふ、「如何なるか是れ眞過。」山云く、「解打鼓。」問ふ、「如何なるか是れ眞諦。」山云く、「解打鼓。」問ふ、「卽心卽佛は卽ち問はず、如何なるか是れ非心非佛。」山云く、「解打鼓。」問ふ、「向上の人來らば如何が接せん。」山云く、「解打鼓。」

㋥仰山、僧に問ふ、「㋦近離甚れの處ぞ。」僧云く、「㋧廬山。」仰山云く、「曾て㋨五老峰に遊ぶや。」僧云く、「曾て遊ばず。」仰山云く、「閻梨曾て遊山せず。」雲門云く、「此の語皆慈悲の爲の故に落草の談有り。」

㋩看よ看よ落草遊山せず、的信何ぞ通せん千里の關、敲唱當鋒禪悅を見て以て探竿影草と爲す、僧有り、果然として一釣に上り來りて卽ち問ふ、「如何なるか是れ眞過、」山云く、「解打鼓」と、鐵鎚擊碎す黃金の骨。大凡そ四箇の解打鼓有り、此れを禾山の四打鼓と曰ふ。

㋪鴻林評して曰く、「此の頌亦是れ國師肝膽を傾け盡す底、縱使ひ舊參の上士も密密參取すべきの聖作なり。」

㋫離は離脫の意、微は隱るゝの意、離は一切の繫縛を離れ、前境の外に獨立すること、微は萬物に隱れて萬物と一體となること。

㋬此の因緣、碧巖三十四則にあり。

㋭近離は、近く甚れの處をか離ると訓讀す、「どこより來たか」の意。

㋮廬山は南康府の西北二十里に在り。

る、一圓空裏二三三。

㋓外道、佛に問ふ、「有言を問はず無言を問はず。」世尊良久、外道讚歎して云く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて我れをして得入せしむ。」外道去つて後、阿難佛に問うて云く、「外道何の所證有つてか而も得入と言ふ。」佛云く、「世の良馬の鞭影を見て行くが如し。」

㋔有言異道の事を問はず、㋕鐵山當面勢崔嵬、㋖孤峰雲散す千溪の月、㋗鞭影追風直下に來る。

㋘魯祖山の寶雲禪師、因に僧問ふ、「如何なるか是れ言不言。」雲云く、「汝の口什麼の處にか在る。」僧云く、「口無し。」雲云く、「什麼を將つてか飯を喫す。」僧對無し。㋙洞山代つて云く、「他飢ゑず、什麼の飯をか喫せん。」

㋚超然の一句錯つて流布す、㋛强ひて爪牙を弄ずるも未だ作家ならず、㋜箭後の路頭端的別なり、㋝誰か知らん高處に風波有ることを。

㋞潙山、因に仰山問ふ、「如何なるか是れ西來意。」潙云く、「大好燈籠。」仰云く、「只だ這箇便ち是なること莫しや。」潙云く、「這箇是れ什麼ぞ。」仰云く、「大好燈籠。」潙云く、「果然として不識。」

㋟機意交馳して何れの處にか去る、陣雲千里重關を鎖す、大家問著すれば相識らず、笑ふに堪へたり古風匝地寒きことを。

㋠江州龍雲の臺禪師、因に僧問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」臺云く、「老僧㋡昨夜欄裏に牛を失却す。」

昨夜欄裏牛を失却す、㋢風流ならざる處也た風流、㋣枯禪限り無く喚び得作す、祖意西來特地に酔ゆ。

㋤南泉、一日東西の兩堂猫兒を爭ふ、南泉見て遂に提起して云く、「道ひ得ば

㋥五老峰は廬山に在り、五峰五老相連るが如し、故に名づく。

㋦鵠林云く、「學者此の頌を解せんと欲せば、先づ須らく此の話を參決すべし、此の話を透過せずして此の頌を見んと要せば、空谷に入りて谷神を捉へんと欲するが如し。」

㋧此の因緣、碧巖六十五則にあり。外道とは、四竺の聰明利智の種族、常に好んで書を讀んで常に論議を好む、未だ眞正中道の諦理を明めず、故に外道なり。學んで非有非無非斷非常の處に到る、智明了ならず心休歇せず、兩肩に擔ひ來りて卽ち問ふ。

㋨第一句、異道は則ち外道を指す、有言を問はず無言を問はずの所問の全體を拈起する者なり。有言卽ち異道なりと道ふにはあらず。

㋩第二句は、世尊良久の當體、言詞道絶し、情量力及ばざる端的を頌す。

㋪第三句、我が迷雲を開いて我れをして得入せしむと云ふを述ぶ。

㋫結句は、世尊許可の一語を言ふ。

㋬池州魯祖山寶雲禪師、法を南岳懷讓禪師に嗣ぐ。傳燈七に傳あり。

㋭洞山良价禪師なり。

㋮鵠林云く、「儻ち看よ、何れの處か是れ超然の一句、寶雲云く、儻什麼を將つてか飯を喫せんと、是れ超然の一句なりや、洞山云く、佗飢ゑず、什麼の飯をか喫せんと、二大老の說話、萬仞の龍門、黑雲の鎖すに似たり。如何なるか是れ錯りて流布する底、今時往往に言ふ、他は是れ人人本具底本來の面目坊、他形相無く肚脾無し、飢うること無く飽くこと無し、更に什麼の飯を喫せんと。」

㋯第二句言ふこゝろは、二大老、面前縱ひ熱喝瞋拳、惡罵毒語、英雄を逞しうし、聲峻を恣にし去るも、者裏に到つて未だ作家と稱するに足らずと。

㋰第三句、二大老の用處恰も神箭の長空を過ぐるが如く、全く處所無く、全く蹤迹無し、沒蹤跡の處、蹤跡的的分明、只だ恨む、時の人親しく見得出する底無きことを。

㋱第四句、高處の風波とは、寶雲の什麼を將つてか飯を喫せん、洞山の他飢ゑず、什麼の飯をか喫せんの語を指す。

㋲潭州潙山靈祐禪師は法を百丈に嗣ぐ、袁州仰山の慧寂通禪師は法を潙山に嗣ぐ。此の話會元九、傳燈九に出づ。

㋳此の頌、鵠林評して曰く、「潙仰父子、各の龍蛇の陣勢を張

卽ち斬らず。」衆對無し、南泉猫兒を斬却して兩段と爲す。南泉復た前話を擧して趙州に問ふ、州便ち草鞋を脱して頭上に戴いて出づ。泉云く、「子若し在りしかば、恰も猫兒を救ひ得ん。」

㋚兩堂爭ふ處南泉斷つ、王老放つ時趙老收む、㋛頭上の草鞋多少か重き、白雲流水共に悠悠。

㋜僧伽難提、衆生の慢を知つて乃ち曰く、「世尊在日世界平正、丘陵有ること無し。江河溝㋝漁、水悉く甘美、草木滋茂、國土豐盈、㋞八苦無く㋟十善を行ず。㋠雙樹に滅を示してより八百餘年、世界丘墟樹木枯悴し、人至信無し。正念輕微、眞如を信ぜず。唯だ神力を愛す。」言ひ訖つて右手を以て漸く展べて地に入り、㋡金剛輪際に至る、甘露水を取り、琉璃器を以て持して會所に至る。大衆之を見て、卽時に欽慕悔過して作禮す。師、著語して云く、「拈得すや也た未だしや。」

㋢日暮雲晴れ眼界空し、清風況んや是れ草離離、㋣松根石上誰が與にか說かん、月中峰に到れども猶ほ未だ歸らず。

㋤迦耶舍多尊者、徒を領じて一舍に到る、舍主鳩摩羅多、問うて云く、「是れ何の徒衆ぞ。」尊者云く、「是れ佛弟子。」羅多、佛號を聞いて心神悚然として卽時に戶を閉づ。尊者良久、自ら其の門を扣く、羅多云く、「此の舍人無し。」尊か敢得す。」

㋥第三、四句鵠林評して云く、「言ふこと莫れ、淨穢不二平等一味の受用と、所以に言ふ、白雲流水共に悠悠と。」

㋦會元一に云く、「十七祖僧伽難提尊者は室羅筏城賓莊嚴王の子なり。」此の因緣、會元一、十六祖羅睺羅多尊者の章に出づ。慢は我慢なり。

㋧漁は「ほり」なり。

㋨八苦とは、生、老、病、死の四苦に、愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛の四苦を加へて云ふ。怨憎會苦とは、遠離せんと憎惡する人と共に會し居るを云ふ、求不得とは、愛樂を求むれども、之れを得ざるの苦を云ふ、五陰は新譯に五蘊、吾人の身は五蘊和合に依るが故に、生老病死等の苦を集集するを云ふ。

㋩十善とは、第一不殺生、第二不偸盜、第三不邪婬、第四不妄語、第五不綺語、第六不惡口、第七不兩舌、第八不貪欲、第九不瞋恚、第十不邪見を云ふ。

㋪釋尊、拘尸那城外に入滅し給ひし時、其の四方に雙本の娑羅樹有りたるを云ふ。

㋫金剛輪際とは無限に深きところを云ふ。是れはもと俱舍論に出づる說なり。

㋬此の頌、鵠林評して曰く、「須らく知るべし、悟るときは則ち常に靈驚に在ることを、如來眞法界の外纖塵有ることを見ず、壹に丘墟有らんや、逢ふときは則ち劫盡き火滅し、空しく蚌木瓦石、穢惡充滿の邊土のみを見る、所以に頌に曰く、日暮雲晴れ眼空しと。言ふこゝろは國師既に大徹透過、面前四維上下、十方法界、半點の形貌無く、纖毫の瑕翳無

りて、互に奇正の精兵を馳せ機を以て意を奪ひ、意を以て機を奪ふ、孫臏も股戰き信越も驚震ふ、宜なる哉、大家問著すれば、總に相知らず、笑ふに堪へたり古風匝地寒きことを。作麼生か是れ古風、四七二三の聖賢只だ者の些子を傳へ、世尊拈華以來、從上の諸聖密密潛修、軀命を顧みざる者は、此れ是の秘訣を傳へんと欲すればなり。」

㋭江州龍雲臺禪師、法を百丈の海禪師に嗣ぐ。聯燈七に之れを載す。

㋮古來生佛一如、淨穢不二、果竟無分曉の理體を演ぶるときは則ち盡く言ふ、昨夜三更牛を失却す、今朝天明火を失却す、半夜烏鷄を放つ、白馬盧花に入る、黑漆桶裏に靈汁を盛る等と。總に是れ平等不二底を說き將ち來る。

㋯鵠林云く、「僧麼麼に問ひ、龍雲麼麼に答ふ、那處か是れ風流ならざる處、既に是れ祖師西來意、若し平等不二底の泥團子を以て揑合して以て答へ得ると爲ば、他の經論家の老奴も亦西來意を攪ぎ得て乏しきこと無けん、豈に祖祖相傳底の秘訣と稱するに足らんや、什麼の風流の處か有らん、誰れか知る此の語、大いに節角誘訛の處有ることを。」

㋰三四の二句は、世間限り無き二空の暗谷裏にある枯禪者流、徒に龍雲の棚裡に牛を失却すと云ふを聞いて、邪解憶測を呈しうするを云ふ。

㋱南泉普願禪師は法を馬祖の道一禪師に嗣ぐ。此の話、碧巖六十三則にあり。

㋲第一、二句鵠林評して云く、「試みに道へ、王老薗の什麼をか放出し、趙州園の什麼を

者云く、「無しと答ふる者は誰ぞ。」羅多、語を聞き是れ異人なることを知つて、遽に關を開いて延接す。

㋑ 踏斷す春風千萬峰、蒼苔青蘚靈蹤を鎖す、落花啼鳥夕陽の裏、雲合し雲開く晩寺の鐘。

㋒ 梵摩淨德云く、「弟子衰老、師に事ふること能はず、願はくは次の子を捨てて以て出家せしめん。」

㋓ 己を退き人を進む比す可き無し、㋔百千年後誰有つてか知らん、室羅城畔金水の上、古佛放光動地の時。

㋕ 不如蜜多、偈を聞き再び祖に啓して云く、「法衣宜しく傳授す可し。」祖云く、「此の衣、難の爲の故に假つて以て證明す。汝が身、難無し、何ぞ其の衣を假らん。」蜜多、語を聞いて作禮して退く。

㋖ 月高うして松頂孤光冷じ、㋗風殘雲を弄して穉意寛し、四海涓涓として百川落つ、琉璃殿上夜遊閑なり。

㋘ 玄沙、衆に示して云く、「諸方の老宿盡く道ふ、接物利生と。忽ち三種病人に遇はゞ、作麼生か接せん。患盲の者は、拈槌竪拂、它又見えず、患聾の者は、語言三昧、它又聞えず、患瘂の者は、伊をして說かしむるも、又說くこと得ず、且く作麼生か接せん。若し此の人を接し得ずんば、佛法靈驗無し。」僧、雲門に請益す、門云く、「汝禮拜著せよ。」僧禮拜して起つ。門、拄杖し、只一片匝地の清風のみ。」

㋙ 鵲林曰く、「三四の句、甚だ難透難解、此の語を見徹することを掌果を見るが如きことを得ば、乍ち向に所謂拈得すや也た未だしやと云ふを見徹せん。此に於て始めて國師と相見することを得ん。」

㋚ 此の話、聯燈二、正宗記三に出づ。迦耶舍多尊者は十八祖、鳩摩羅尊者は十九祖なり。

㋛ 此の頌、鵲林評して曰く、「二尊者既に道業成熟、見地の山、知障の嶺、多少險難の道路を蹈斷して、意路不到、情解不及の處に向つて穩坐す、是の故に言ふ、蒼苔青蘚靈蹤を鎖すと、既に是れ二尊、向上の步驟明暗變變、無功用、涅槃鼻の處に於て、賓主、獻酬す、恰も浮雲の無心にして合し、無心にして開くに似たり、所以に言ふ、雲合し雲開く夕陽の嵩と。」

㋜ 梵摩淨德は即ち迦毘羅國の人なり、闍樹茸を生ず、味甚だ美也、唯だ長者と第二子羅睺羅多と取りて食ふ、取り了れば隨つて生ず、迦那提婆尊者、其の宿因を知りて即ち偈有り、曰く、「僧と爲りて理に通ぜずんば、身を復して信施を還す、長者八十一にして、其の樹茸を生ぜず。」長者偈を聞いて增々歎伏す、曰く、「衰老ぜり願はくは次の子を捨て、師に隨ひ出家せしめん、」祖曰く、「昔し如來此の子を記し玉ふ、第二の五百年に大敎主と爲るべし」と、今の相遇ふこと蓋し宿因に符へり、即ち與に剃髮す、尊者の偈に曰く、「道に入りて理に通ぜざれば、身を復して信施を還す」と。

㋝ 第一句、弟子衰老ぜり師に事ふること能はず、願はくは次

子を捨てゝ出家せしめんと云ふを頌す。

㋞ 以下二、三、四は、後來此の子果して羅睺羅多尊者と稱して大敎主と爲り、室羅筏城畔に於て、大法幟を立て大法施を行ず、是れ寔に放光動地にあらずや。金水は河の名なり。

㋟ 二十六祖不如蜜多尊者は南印度天德王の子なり、法を二十五祖婆舍斯多尊者に嗣ぐ、尊者偈有り、曰く、「聖人知見と說く、境に當つて是非無し、我れ今眞正を悟る、道無く亦理無し。」以下此の文に同じ。

㋠ 鵲林曰く、「此の頌全篇、秋光一片寥廓虛靜底を賦して、以て人人本具底の眞性、純淸絕點、圓明虛凝なるを演ぶ、豈に特り蜜多大士のみならんや、箇箇大丈夫、一點の障礙無く一點の瑕疵無し、所以に言ふ月高うして松頂孤光冷じと、是れ上下四維乘羅舁木、總に是れ一圓の秋光なるものに非すや。」

㋡ 縱ひ生死有り、涅槃有り、佛法有り、王法有り、付鉢有り、傳衣有るも、總に是れ秋風の殘雲を逐ふが如し、この中吉凶無く、榮辱無く、障礙無く、災害無し、所以に言ふ、四海涓涓として百川落つと、謂ふ可し無影樹下の合同船と。琉璃殿上は碧巖十八則無縫塔の話に耽源云く、「琉璃殿上に知識無し。」

㋢ 福州の玄沙師備宗一禪師は法を雪峰に嗣ぐ。此の話、碧巖八十八則にあり。

㋣ 此の頌、鵲林評して曰く、「此の三種病根甚だ深重なり、膏肓の聚、神魂を惱すと雖も、輒く診候すること能はず、豈に病根を拔くことを得んや、特り靈門大師のみ有り、退後進前の際に於て、三擔を加へ

を以て拄く。僧退後、門云く、「汝是れ患盲にあらず。」復た近前來と喚ぶ、僧近前す、門云く、「汝是れ患聾にあらず。」乃ち云く、「還つて會すや。」僧云く、「不會。」門云く、「汝是れ患啞にあらず。」僧此に於て省有り。

㋺盲聾瘖啞誰か能く接せん、退後近前指下明かなり、多くは珍候沉動の處に向つて、知らず三種一毛病。

㋑翠岩、夏末衆に示して云く、「一夏已來、兄弟の與に東說西話す、看よ翠岩が眉毛在りや。」保福云く、「賊と作る㋺人心虛る。」長慶云く、「生ぜり。」雲門云く、「關。」

㋩偸眼才に開いて先づ手を下す、眉毛生也月方に明かなり、雲門の關子萬重の鎖、直に而今に至つて夜行を絕す。

㋥鹽官、一日侍者を喚んで云く、「我が與に犀牛の扇子を將ち來れ。」侍者云く、「扇子破れ了れり。」官云く、「扇子既に破れば、我れに犀牛兒を還し來れ。」侍者對無し。㋭投子云く、「將ち出づることを辭せず、恐らくは頭角全からざらんことを。」雪竇拈じて云く、「我れ全からざる底の頭角を要す。」㋬石霜云く、「若し和尙に還さば卽ち無し。」雪竇拈じて云く、「犀牛兒猶ほ在り。」㋯資福一圓相を畫して中に於て、一の牛字を書す。雪竇拈じて云く、「適來什麼と爲てか將ち出さゞる。」㋮保福云く、「和尙年尊し、別に人を請せば好し。」雪竇拈じて云く、「惜む可し、勞して功無きことを。」

㋰犀牛の扇子淸風起る、㋱淸風を坐斷して氣を出すこと難し、㋲破了當年重ねて用ひ去る、㋳烟に和して搭在す玉欄干。

㋴雪峰住庵の時、兩僧有り、來つて禮拜す。峰來るを見て手を以て庵門に托して身を放つて出でて云く、「是れ什麼ぞ。」僧亦云く、「是れ什麼ぞ。」峰低頭歸庵。僧後に岩頭に到る、頭問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧云く、「㋵嶺南より來る。」頭云く、「曾て雪峰に到るや。」僧云く、「曾て到る。」頭云く、「何の言句か有る。」僧前話を擧す。頭云く、「佗什麼とか道ひし。」僧云く、「佗無語、低頭歸庵。」頭云く、「噫、我れ當初悔ゆらくは佗に向つて末後の句を道はざりしことを。若し伊に向つて末後の句を道はゞ、天下の人雪老を奈

す、九候を察して、診候未發の處に於て、深く三種の病根を見る、謂ふこと莫れ、既に是れ一毛病、元來皮膚疥癬の少病なりと。」

㋑明州翠巖の令參永明禪師、法を雪峰の義存禪師に嗣ぐ。此の話碧巖八則に出づ。

㋺人心虛なりは「びくびく、おぢつく」の意、虛怯なり。

㋩偸は盜、ぬすむなり。此の頌鴻林評して曰く、「四大老の用處、恰も軍中暗號密令の如し、一隊同火の上士は一見して便ち落處を知る、所以に言ふ、眉毛生也月方に明かなりと、試みに言へ、作麼生か是れ明處。雲門の關子萬重の鎖とは此の那一關、縮よりも輕に、鐵よりも堅し、天を照し地を照す、豈に夜行のみならんや。」

㋥杭州鹽官鎭國海昌院齊安禪師は法を馬祖に得たり。傳燈七に詳に出づ。此の話、碧巖四十九則にあり。

㋭傳燈十五に云く、「翠微無學禪師の法嗣、舒州投子山大同禪師は本州懷寧の人なり、姓は劉氏。」

㋬會元五に云く、「潭州石霜山慶諸禪師は法を道吾宗智に嗣ぐ。」

㋯會元九に云く、「吉州資福如實禪師は法を西塔光穆に嗣ぐ。」

㋮保福は法を雪峰に嗣ぐ。會元第七に傳あり。

㋰鴻林曰く、「作麼生か是れ淸風出起る。」

㋱又曰く、「作麼生か是れ淸風出す底の氣。」

㋲又曰く、「試みに言へ、當年何人か用ひ得て痛快なる、投子底是か、雪竇底是か、石霜底是か、資福底是か、如何が點檢し去らん。」

㋳又曰く、「此の語頌し得て最妙最玄、最關絕妙、一則の始末

何ともせじ。」僧夏末に至つて再び前話を擧して請益す、頭云く、「何ぞ早く問はざる。」僧云く、「未だ敢て容易ならず。」頭云く、「雪峯我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せず、末後の句を識らんと要せば、只だ這れ是れ。」

㋺同條に生ずる處不同死、明頭を拈却して暗頭を收む、此れより身を放つて歸庵し去る、今に至つて籠外鬼神愁ふ。

㋩溈山、五峯、雲岩同じく百丈に侍立す、百丈、溈山に問ふ、「咽喉唇吻を倂卻して、作麼生か道はん。」溈山云く、「却つて請ふ、和尚道へ。」丈云く、「我れ汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後我が兒孫を喪はんことを。」復た五峰に問ふ、峰云く、「和尚也た須らく倂却すべし。」丈云く、「人無き處斫額して汝を望まん。」又雲岩に問ふ、岩云く、「和尚有りや未だしや。」丈云く、「我が兒孫を喪はん。」

㋻東街の柳色烟に和して翠に、西巷の桃花相映じて紅なり、幾度か春風曉鐘の裏、遊人意を著けて寥空に到る。

表裏、摸寫し來て煥爛たり。」

㋷雪峯義存禪師は法を德山宣鑑禪師に嗣ぐ。此の話、碧巖五十一則にあり。

㋸嶺南は飛猿嶺の南を謂ふ。

㋽此の頌、鵠林評して曰く、「今時往往に解し得て道ふ、同條生死の一著の如き、黑漆桶裏に墨汁を盛るに似たり。何れの處にか觸が悟解了知を容れん、所以に言ふ、明頭を拈却して暗頭を收むと、畢竟看來れば巖頭も亦暗頭合、雪峯も亦暗頭合、是の故に身を放つて歸庵し去る、低頭歸庵の端的、縱使ひ佛祖も覷破することを得ず、所以に籠外鬼神愁ふと、錯錯。若し是れ果して此の如くならば、巖頭什麼に依つてか言ふ、我れ當初悔ゆらくは他に向つて末後の句を道はざりしことをと。唯だ透關正眼底の上士のみ有りて、

㋿南泉、百丈の涅槃和尚に參ず、丈問ふ、「從上の諸聖、還つて人の爲に說かざる底の法有りや。」泉云く、「有り。」丈云く、「作麼生か是れ人の爲に說かざる底の法。」泉云く、「不是心、不是佛、不是物。」丈云く、「說了也。」泉云く、「某甲は只だ與麼、和尚作麼生。」丈云く、「我れ又是れ大善知識にあらず、爭か說不說有ることを知らん。」泉云く、「某甲不會。」丈云く、「我れ太煞だ儞が爲に說き了れり。」

㋾從上爲人の事、㋿老胡の知を容さず、㋼寒雲幽石を抱き、霜月清池を照す。

㋿大隨、僧に問ふ、「什麼の處にか去る。」僧云く、「普賢を禮し去る。」隨、拂塵に一見して、卽ち落處を知る、若し然らずんば縱使ひ千般の義味有りて、百種の注脚を下し得るも、總に是れ閑妄想、死學解。」

㋸溈山、五峯と共に法を百丈に嗣ぐ、雲巖百丈に侍すること二十年、遂に契はず、後來法を藥山に嗣ぐ。

㋽此の頌、鵠林評して曰く、「溈山、五峯滑行功積り、密用力充ちて、恰も群陰剝盡して、百花爭ひ開く時に似たり、父子唱拍の時、謂つ可し柳色黃金嫩く、梨花白雪香しと、特に雲巖のみ有つて、天然の句子未だ得る能はず、夕陽に立ち盡して空しく眉を皺むる者に似たり。」

㋾此の話碧巖二十八則に出づ。會元を按ずるに南泉と問答する者は、卽ち馬祖の法嗣百丈惟政禪師なり、宜しく隨ふべし。

㋿第一句、二老の言論往來全篇擧揚し了れり。

㋼第二句、二大老の相見底、縱令ひ默照邪禪の瞎徒、庸常下劣の部類、恰も田夫の階下に立ちて、中書臺上の事を聞くが如し、所以に言ふ、縱ひ老胡も親しく了知することを容さずと。

㋼其の高蹈古雅、更に一事の比況に堪へたる無し、若し强ひて等匹を求めば、南泉は第三句の如く、百丈は第四句の如し。

㋾大隨法常禪師は法を長慶大安禪師に嗣ぐ。此の話、傳燈十一、師の章にあり。

㋿鵠林評して曰く、「大隨既に明頭差別の偏位に立ちて遠く聞く、僧も亦明頭差別の偏位に立ちて遠く答ふ、大隨俄に暗頭無差別の正位に入りて近く

子を擧して云く、「文殊普賢、總に這裏に在り。」僧圓相を作して背後に拋向す。乃ち兩手を展ぶ。隨云く、「侍者一帖の茶を取つて、這の僧に與へよ。」

㊏遠く聞き近く見る一賓主、半暗半明孰與か揚げん、若し是れ箇中全く用ひ去らば、普賢特地に㋚亡羊を逐ふ。

㊐三角の總印云く、「若し此の事を論せば、眉毛を眨上すれば早く已に蹉過せり。」麻谷便ち問ふ、「眉毛を眨上することは卽ち問はず、如何なるか是れ此の事。」角云く、「蹉過せり。」谷乃ち禪床を拂す、角之れを打つ、谷無語。

地獄天堂㋟阿刺刺、㋠機關直下に把るべき沒し、㋡姦生り變多くして卻つて得難し、㋢雙放

示す、僧も亦暗頭無差別の正位に入りて近く呈す、賓主喝和の間、誰か蹤由を辨ぜん、所以に言ふ、孰か揚げんと、然りと雖も國師の心、竊に謂らく、未だ盡さず、大隨若し者の僧兩手を展ぶる處に於て本分の草料を行じて、痛く一頓を與へば、縱令ひ六牙の象王も方に遂ひ度を失はん、惜い哉全く用ひ去らざることを。」

㋚亡羊は列子の說符篇に云く、「楊子が隣人羊を亡ふ、其の黨を率ゐて之れを追ふ、楊子が曰く、あゝ一羊を亡ふ何ぞ追ふ者の衆きやと云々。」玆は度を失ひうるたえる義なり。

㊐潭州三角山總印禪師は法を馬大師に嗣ぐ。會元三に此の話を載す。

㋟阿刺刺は、鷲駿の樣子を表はす語にて、俗に「おやおや」と云ふ意。此の句、總印と麻谷と相見し、法戰一場、一往一來、活達脫洒、抑揚褒貶、殺活自在、天上・佛界・魔宮・全く比倫無く、等匹無きを頌す。

㋠機關は宗師家が學人を接得する巧妙の手段作略を云ふ。此の句、言ふ意は、機關峯峻、豪放不羈、縱ひ佛祖も把著すること能はずと。

㋡貶摸千態萬狀、隱顯捲舒、明眼の衲僧未だ落處を見ず。

㋢心が擧して向はんと擬すれば兎角龜毛別山を過ぐ。

㋣維摩詰、秦には淨名と謂ふ、又無垢稱と譯す、釋尊と同時代にして、在家の身を以て、菩薩行を修したる人、故に維摩居士とも云ふ。文殊師利は妙吉祥、妙德、妙首等と譯す、智慧第一と稱せらる。此の綱、維摩經不二法門品に出づ。

㋤菩薩は梵語、具に菩提薩埵と

雙收新羅を過ぐ。

㋥維摩詰、文殊師利に問ふ、「何等か是れ㋦菩薩の㋧入不二法門。」文殊師利云く、「我が意の如きんば、一切の法に於て無言無說無示無識、諸〳〵の問答を離る、是れを入不二法門と爲す。」維摩に代つて打出す、是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、「我等各自に說き已る、仁者當に說くべし、何等か是れ菩薩の入不二法門。」維摩默然たり。文殊に代つて乃ち喝す。

㋩不二法門何ぞ再び說かん、㋫二千三萬一齊に來る、㋬當年妙吉親しく用ひ去る、㋭病翁を扶け得て口を開かしむ。

㋮僧、趙州に問ふ、「初生の孩子還つて

云ひ、覺有情と譯す、菩提とは覺智のこと、覺智を求むる有情の義にして、諸佛の覺智を得んとして修行する大士に名づく、卽ち上、菩提を求め、下、衆生を敎化する悲智の二願を具し、自利化他の行を全うする修行者を云ふ。

㋦入不二法門とは、一に墮せず、二に滯らざる法門を云ふ。

㋧鶴林評して曰く、「靈大地總に是れ不二法門、此の外更に箇の什麼をか說かん、一毫未發以前既に說き了る。」

㋨若し强ひて注脚を下さば、佛庵羅樹國に在り、諸の菩薩に命じて疾を問はしむ、是に不二淨名疾を丈方の室に示す、是に不二諸の菩薩辭して德を文殊に推す、是に不二妙吉命に隨つて三萬二千の大衆と與に丈方の室に赴く。

㋩者裡に到りて片言の演ぶ可き無く隻字の說く可き無し、只だ目を敎めて瘦坐するのみ、文殊大士、此の秘妙究玄の處を用ひ來りて維摩詰に分付す。

㋫果然維摩詰十成に說き了れり。

㋬此の綱、碧巖八十則にあり、評に說いて詳かなり。

㋭六識は、眼、耳、鼻、舌、身、意。

㋮古人云く、「譬へば驟流水の如し、水流れて定止無し、各各相知らず、諸法も亦是くの如し」と。

㋯此の頌、鶴林禪師評して曰く、「國師既に趙州を見徹し、投子を辨得して、親しく此の一偈を打す、甚だ諦當甚だ親切、老僧如何が睹註脚を下さん、若し人此の話を見る、掌上を見るが如きことを得ば、此の

㋓六識を具するや也た無や。」州云く、「急水上に毬子を打す。」僧復た投子に問ふ、「急水上に毬子を打す、意旨如何。」子云く、「㋔念念不停流。」

㋕六識問ひ來つて識破し難し、趙州老大只麼に酧ゆ、憐む可し同道實頭の漢、道へ道へ念念不停流。

㋖京兆米和尚、因に老宿有り、問ふ、「月中斷井索、時人喚んで蛇と作す。未審し七師佛を見て、喚んで什麼とか作す。」米云く、「若し佛見有らば卽ち衆生に同じ。」宿云く、「千年の桃核。」師、「米和尚に別して驀口に一拳せん。」

㋗斷井索子、月中蛇と爲る、衝氣毒を吐き、跳沫波を馳す、生や佛や齊しく話り難し、多劫潛微滅磨に歸す、滅磨せず、紫金光聚山河を照す。

㋘雲門云く、「古人道く、人人盡く光明の在る有り、看る時見えず暗昏昏。作麼生か是れ光明。」代つて云く、「厨庫三門。」又云く、「好事も無きには如かず。」

㋙九天雲淨うして衆星微なり、風興何ぞ一句の詩を餘さん、今夜君と無事にし去る、時人喚んで那斯祈と作す。

三門厨庫是れ光明、見不見の時辨別し難し、好事も元來無きには如かず、烏鷄半夜生鐵を啄む。

㋚馬大師不安、院主問ふ、「和尚近日尊候如何。」大師云く、「日面佛月面佛。」

㋛日面佛月面佛、三三兩兩太だ端無し、二

頌を見る、掌上を見るが如くならん云々。」

㋜京兆府の米和尚、また七師と謂ふ、法を潙山に嗣ぐ。此の話、傳燈十一師の章に出づ。

㋝鵲林禪師評して曰く、「國師此の頌、賓主唱和酬詛の處を見徹して餘蘊無し、寔に貴ぶ可し、所謂斷井索子の一問、塗毒鼓の如く大火聚に似たり、擬議するときは則ち喪身失命せん、所以に言ふ、衝氣毒を吐き、跳沫波を馳す、七師老宿の意會せず、生と說き佛と說くと。所以に齊しく日を同じうして話り難き重病なり。老宿曰く、千年の桃核と、金鎖影動き、寶劍光寒じ、七師瞋劫潛遷の窟宅、碎いて微塵と作る、知らず金光天地を照すや也た否や。」

㋞此の話、碧巖八十六則にあり。

㋟鵲林禪師評して曰く、「此の頌全體大師の示衆を述ぶ、情量の及ぶ可きに非ず、知解の挾む可き無し、譬へば十分の秋光の如し、物の比倫に堪へたる無し、我れをして如何が說かしめん、是れ雲淨く星微なるは仲秋滿輪の時に非ずや、此の時、言語道斷、只だ默然として擬坐するのみ。那斯祈は龐州の鄕談、無分曉の謂ひなり、三門厨庫光明の一語、爾が佛見法見、悟解了知、縱ひ千鍛の神通妙用を盡すとも終に辨得することを得ず、況んや好事も無きには如かざるの一語、明眼の衲僧も倒退三千、恰も烏雞夜半生鐵を咬むに似たり、縱ひ佛祖も識破すること能はず、再來扶桑の靈門大師に非ずんば、誰か能く頌し得て此に到らん。」

㋠此の話、碧巖第三則にあり。

㋡鵲林禪師評して曰く、「此の話寔に難信難入、此の水邊、彼の林下、三三頭を聚め、兩兩眉を結んで、千鍛の智解、百種の神通を運らし去るも其の邊表を窺測するに由し無し、宜なる哉、縱ひ參玄の上士、二三十年千辛萬苦する有るも轉た看れば轉た難し、爾世智辨聰の邪黨切に陀羅尼の會を作し去り、一喝の會を作し了ることを。」

㋢此の話碧巖七十七則にあり。

㋣鵲林禪師評して曰く、「雲門大師曰く、胡餅儞如何が齒牙を下し得ん、儞纔に擬議思量せば、獼猴の浩波に落つるが如し、乍ち喪身失命し去らん、者同黑雲霧を吐くことを休めよ、寥廓たる天邊白虹無しと、古人胡餅の話を頌し得る底、知んぬ幾許ぞ、就中、國師此の頌、古今に獨步して、最妙最玄最第一なり、儞若し此の頌を見得すること掌上を見るが如くならば、儞に許す胡餅の話を參究することを。更に參ぜよ三十年。」

㋤摩斯吒は名義集二に曰く、或は摩迦吒、或は未迦吒と云ひ、此には獼猴と云ふ。

㋥此の條、會元に百丈惟政禪師を涅槃和尚と作す。鵲林評して曰く、「古の禪門盛んなりし日、南岳、馬祖、百丈、黃檗、臨濟、興化、南院、風穴の諸老、每日鼓を鳴らして普請し、拽石、搬土、水薪、菜蔬、一日作さゞれば一日食はず、辛刻苦の上に於て、各の動中の得力を求む、千態萬狀、盡く是れ宗師爲人の手脚、學人著力の樞要なり、若し兩手を展開する處に向つて、大義を見んと要せば其だ遲了なり、遠うして遠うし云々。」

十年來苦辛の客、精微を照絶して見ること大いに難し。

㋺僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の談。」門云く、「胡餅。」

㋑覿面胡餅口を下し難し、㋺摩斯吒徒に瀾中に入る、者回黑雲霧を吐くことを休めよ、寥廓たる天邊白虹無し。

㋩百丈惟政禪師、一日衆に謂つて云く、「汝我が爲に田を開け、我れ汝が爲に大義を說かん。」僧衆、田を開く、竟に和尙の大義を說かんことを請ふ。百丈便ち兩手を展開す。

㋥閃電激し怒雷馳す、眼裏耳裏箇の覿機、昨夜㋭三山三跳の後、北辰鬼谷擬議を作す、擬議を作す、七佛の祖師曾て知らず。

㋬平田普岸禪師、因に僧有り、到參す、平田打つこと一拄杖す。其の僧近前して拄杖を把住す。平田云く、「老僧適來造次なり。」僧卻つて平田を打つこと一拄杖す。平田云く、「作家作家。」僧禮拜す。平田把住して云く、「是れ闊梨造次なり。」僧大笑す、平田云く、「這箇の師僧、今日大いに敗せり。」

㋥鴞林禪師評して曰く、「此の頌全篇、百丈兩手を展開する處を賦す、情量の窟宅を碎き、智解の窠臼を破る、怒雷の石壁を劈くが如く、金翅の鯨波を搏つに似たり、天關を廻し地軸を轉ず、天に南斗北辰有り、各の其の位に在り移動せざること車軸の如く、衆星運轉車輪の循環するが如し、夫れ天文を諳じ地理に通ずるとは鬼谷子に越えたるは無し、今夜百丈大用の示衆に依つて乾坤色を失ひ、日月光を呑む、南斗北辰悉く位を失し處を換ふ、大小大の鬼谷、星斗の所在に迷ふ、豈に鬼谷のみならんや、縱ひ文殊大士も他の落處を知らず。」

㋭三山は、一に蓬萊、二に方壺、三に瀛州。跳は「をどる」と訓す。

㋬平田普岸禪師は、法を百丈海

㋮一向一背親しみ易からず、互換の韜略鼓旗別なり、㋯千將の劒未だ甲鋏を斬らず、㋰夏服が箭何ぞ七札を穿たん、鬼哭し神悲しむ、崖崩れ石裂けて還た顚蹶、師僧今日大いに敗缺。

㋱大慈山寰中禪師住庵の時、南泉至り問ふ、「如何なるか是れ庵中の主。」寰云く、「㋲蒼天蒼天。」泉云く、「蒼天は且く置く、如何なるか是れ庵中の主。」寰云く、「會せば卽便ち會せよ、切切なること莫れ。」南泉拂袖して出づ。

㋳庵中の主見ること還つて難し、㋴句裏身を藏して太だ端無し、㋵偸眼暫時休すや也た未だしや、㋶夜深うして誰と共にか關山を過ぎん。

㋷僧、藥山に問ふ、「平田の淺草麞鹿群を成す、如何なるか塵中の塵を射得せ

㋮鴞林禪師評して曰く、「此の頌始終賓主相見の間、互換の機有ることを賦す、兩箇機鋒俊利、千將の劍よりも快く、夏服が箭よりも疾し、就中、國師甚だ平田末後、者箇の師僧今日敗缺と道ふを愛す、所以に道ふ、崖崩れ石裂けて還た顚蹶、師僧今日大に敗缺と。」

㋯千將は劍の名なり、甲は甲冑なり、鋏は首鎧なり。

㋰文選子虛賦に曰く、「夏服の勁箭を右にす」とあり、札は甲葉なり、一葉を一札と云ふ。

㋱大慈山寰中禪師は法を百丈海禪師に嗣ぐ。傳燈七に之れを載す。

㋲蒼天は悲み嘆く時に發する語にして「あーあー」と云ふ程の意なり。

㋳鴞林禪師、評して曰く、「庵中賓主相見の端的、鬼神も測ること能はず、魔外も辨ずること得ず。」

㋴又曰く、「句裏に身を藏す底の身、聲聞身なりや、菩薩身なりや、長者身なりや、居士身なりや、爾若し辨別して分明なることを得ば、闊に許す參學の眼を具することを。」

㋵偸眼は、ちらつと盜み見るなり。鴞林評に曰く、「此の句言ふこゝろは、寰中云く、蒼天蒼天、此の話、漢に透り泉に徹す、南泉豈に他の落處を知らざらんや、故らに此の不聽明を露はして卽ち言ふ、蒼天は且く置く、如何なるか是れ庵中の主と、此れ但だ寰中を見靈さんと欲するのみ、甚だ賊機有り。」

㋶又曰く、「路重疊終日行いて曾て人を見ず、猛虎朝に道內に伸び、魑魅甚虛谷に叫ぶ、南

ん。」山云く、「箭を看よ。」僧、身を放つて便ち倒る、山云く、「侍者這の死漢を拖き出せ。」僧便ち走る、山云く、「泥團を弄する漢、什麼の限りか有らん。」雪竇拈じて云く、「三歩には活すと雖も、五歩には須らく死すべし。」

ㄴ塵中の麈走り得ること三歩、五歩未だ虎兒を趁ふに堪へず、虎兒を趁ふ、獵人徒に坤維を覓むること莫れ。

ㄅ慧忠國師、紫璘供奉と論議し、既に座に升る。供奉云く、「請ふ、師立義せよ、某甲破らん。」忠云く、「立義し竟んぬ。」供奉云く「是れ什麼の義ぞ。」忠云く、「果然として見ず、公の境界に非ず」といつて便ち下座。

泉拂袖して出で去る、方寸の嶮峻關山の夜途に過ぎたり、塞に恐る可し。」

ㄉ澧州藥山の惟儼禪師は法を石頭希遷に嗣ぐ。此の緣碧巖八十一則にあり。

ㄊ麈は鹿の大なる者なり、群鹿之れに隨ひ、皆麈の往く所、麈尾の轉ずる所を視て準と爲す、是れ鹿中の王なり。鵲林禪師評して曰く、「是れ死蛇と雖も弄することを解すれば又活く、此の頌甚だ者の僧を扶起するものに似たり、麈中の麈走り得ること三歩、走り得るは塞に好し、五歩豈に虎兒を趁ふことを用ひんや、若し是れ唱和相應じ、全く勝敗無く、全く等差無き底、作麼生か虎兒を趁ふて、何れの處にか跟跡を留めん、心を擧して向はんと擬すれば、兎角龜毛別山を過ぐ、所以に言ふ、獵人徒に坤維に覓むること莫れと。」

ㄋ南陽慧忠國師、法を六祖大師に嗣ぐ。傳燈三師の章に之れを載す。

ㄌ鵲林禪師評して曰く、「忠國師既に大智無智の正位に向つて大義を立つ、供奉還つて情量意解の小智を廻して、以て大義を破らんと欲するに似たり、恰も蚊虻空裡の猛風を拄へんと欲す、自ら其の量を知らざる者に非ずや、胸海の學解、波浪天を浸して沸騰して、覺えず自ら頭出頭沒す、國師は大鵬九萬里の羽翮を展開して、長空を蓋ふが如く、供奉は燕雀の蘆邊に在りて空しく啾啾たるに似たり。」

ㄍ啾は小聲なり。

ㄎ洞山守初禪師、法を雲門の三頓棒下に嗣ぐ。此の話、碧巖十二則にあり。

ㄏ祖風迥に振つて機輪轉ず、學海瀾忙しうして自ら頭を沒す、大鵬一擧す九萬里、籬邊の燕雀空しく啾啾たり。

ㄐ僧、洞山に問ふ、「如何なるか是れ佛。」山云く、「麻三斤。」

木落ちて岩崗鋒骨冷じ、月斜にして禪石曉開け難し、寒雲伴ひ來つて閑不徹、飛瀑從他あれ忽雷を起すことを。

ㄑ六祖云く、「不思善不思惡、正當恁麼の時、明上座、本來の面目を還し來れ。」

ㄒ五歩は款行三歩は疾し、莫教あれ正眼頂門に開くことを、悠悠として見ず庾嶺の路、脚後脚前歸去來。

ㄓ霍山和尚、祕魔岩和尚凡そ僧有り、到つて

ㄏ此の緣、六祖壇經に見ゆ、盧行者既に黃梅の衣鉢を得、夜半江を涉り嶺を越えて、將に嶺南に往かんとす、是に於て黃梅七百の高僧、潮の如く湧き峰の如く起つて、追つて他の衣鉢を奪はんと欲す、中に明上座なる者有り、もと將軍にして甚だ勇壯なり、衆に先つて走り、上る者半日程、遂に盧行者を見る、行者既に事の急なるを見て、衣鉢を石上に拋つて曰く、「此の衣は信を表す、力を以て爭ふべけんや」と云つて草莽の中に隱る、明提げ搬るに動かず、乃ち喚んで曰く、「行者、我れ法の爲に來る、衣の爲に來るにあらず。」行者遂に出でて盤石の上に坐す、明卽ち作禮す、盧曰く、「不思善不思惡云々。」

ㄒ此の頌鵲林禪師評して曰く、「嘉能曰く、不思善不思惡、正與麼の時、如何なるか是れ明上座本來の面目と、是れ前箭は猶ほ輕く、五歩款行に似たる者なり、自己に返照して看よ、箭は還つて汝が邊に在らんと、是れ後箭は猶ほ深し、三歩疾に似たり、是に於て明上座、正眼頂門開く、開いて這の什麼をか看る、豈に庾嶺の路にあらずや、上、諸佛を見ず、下、衆生を見ず、生死涅槃を見ず、煩惱菩提を見ず、此に到りて前佛後佛、先聖後聖、全く一歩を進むことを得ず、總に是れ馮門點額の魚、所以に言ふ、歸去來と。」

ㄓ霍山景通禪師、法を潙山祐禪師に嗣ぐ、祕魔岩和尚、法を永泰禪師に嗣ぐ。傳燈十一に此の緣を載す。

ㄔ此の頌、鵲林禪師評して曰く、「霍山多年參究、得力の處を以て、一提に提起し來つて

禮拜すれば、木叉を以て叉著すといふことを聞いて、霍山一日遂に往いて之を訪ふ。才に見て禮拜せず、直に祕魔懷裏に入る。祕魔霍山の背を拊つこと三下す、霍山起つて手を拍つて云く、「此の老一千里の地、我れを賺し來る」といつて便ち回る。

㋕當機提げ觀面疾し、取次用ひ來る若爲の宗ぞ、箇箇一千應に走卻すべし、草鞋跟蹶えて清風起る。

㋖梁の武帝、達磨大師に問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義。」磨云く、「廓然無聖。」帝云く、「朕に對する者は誰ぞ。」磨云く、「不識。」

㋗廓然不識幾人か有る、古路橫行嶺烟を鎖す、

遍摩、秘魔從前、精錬透關の眼有りて、一見に見殺して排撥す、賓主各の擬議に涉らず、情量を添へず、檢なること伎女の竿を走るが如く、活なることは、市兒の丸を弄するに似たり、縱ひ明眼の衲僧も他の落處を辨ずること能はず、什麼に依つてか斯くの如く幽邃なる、古人撥草瞻風、嶮峻を數千里の外に跋涉し、風霜二十年の間に困苦す、許多の草鞋を蹈蹶して、始めて此の田地に到る云云。」

㋖此の緣、碧巖一則にあり、評に說いて詳かなり。

㋗此の頌、言ふこゝろは、廓然不識の話、四海を一掃して、落處を知らず、譬へば深山岩崖、寒煙古路を埋め、斜霧洞口を鎖す底の人跡不到の處に於て、一人有り、經行坐臥せんに、人更に知ること能はざるが如し、宜なるかな、神光大師、此の向上の秘訣を透過せんが爲に、密參苦吟、遂に少林深雪に立つに到りて、左臂を截斷して初めて親陳を別つ。

㋘風穴延昭禪師、法を南院顒禪師に嗣ぐ。此の垂語、廣燈十五に載す。

㋙鵲林禪師評して曰く、「儞看よ、此の頌甚だ天眞甚だ絕妙なることを、風穴の全身を摸寫し來りて、儞諸人の面前に推し出す、還つて相見の分有りや、試みに言へ、嚬蹙謳歌、甚麼に依つてか一塵に在る、誰れ人を指してか同生同死底の衲僧と爲ん、就中、轉結兩句甚だ絕妙甚だ窮玄なり、風穴の垂語と並立して最後兩重の關鑰と爲す、兩鏡並照して中心影像無きに似たり云云。」

㋚玉篇に、嚬蹙は憂患樂まざる

此れより少林深雪の裏、斷臂刀下に疎親を別つ。

㋛風穴、垂語して云く、「若し一塵を立せば家國興盛し、野老謳歌す。若し一塵を立せざれば家國喪亡し、野老謳歌す。雪竇拄杖を拈じて云く、「還つて同生同死底の衲僧有りや。」

㋜嚬蹙謳歌一塵に在り、同生同死何人にか憑る、紅霞碧靄高低を籠む、芳草野花一樣の春。

㋝南嶽懷讓、一僧をして㋞馬祖の處に到り去らしめて云く、「但だ作麼生と問へ、伊が道ふ底、言語を記し將ち來れ。」僧去つて一に懷讓の旨の如くし、回つて懷讓に謂つて云く、「馬祖云く、胡亂より後三十年、曾て鹽醬を闕かず。」讓之を然りとす。

㋟朝三千暮八百、箇箇㋠一著を放過す、生鐵土壤に和するが如し、大冶も拈却を解く可し。

頌古終

㋛これを頌するを歌と謂ひ、齊しく歌ふを謳と謂ふ。

㋝南嶽懷讓禪師は、法を曹溪六祖惠能大鑑禪師に嗣ぐ。

㋞馬祖は法を南嶽懷讓に嗣ぐ。

㋟此の頌、鵲林禪師評して曰く、「朝三千暮八百、此の兩句恰も馬祖大師一輻の掛凱を見るが如し、面目現在却つて寒毛卓豎することを覺ゆや、馬大師の一語と、又是れ白璧一雙、生鐵土壤に和するが如し、大冶も須らく拈却すべし云々。」

㋠一著を放過すは、「一と手をゆるす」と譯す。

㋑拈古

㋺舉す、臨濟上堂云く、「一人は孤峯頂上に在つて出身の路無く、一人は十字街頭に在つて亦向背無し。那箇か前に在り那箇か後に在る。維摩詰と作さゞれ、傅大士と作さゞれ。珍重。」㋩師云く、「將に謂へり、龍頭蛇尾と、元來只だ是れ蛇尾龍頭。然も是の如くなりと雖も、深く指示を領ず。」

㋥舉す、欽山、岩頭・雪峰と同じく德山に到る、乃ち問ふ、「㋭天皇も也た恁麼に道ふ、㋬龍潭も也た恁麼に道ふ、未審し德山作麼生か道はん。」德山云く、「汝試みに天皇、龍潭底を擧せよ看ん。」欽山擬議す、德山便ち打つ。欽山、㋻延壽堂に歸つて云く、「是なることは則ち是、我れを打つこと太煞だし。」岩頭云く、「儞與麼ならば、他後德山に見ゆと道ふこと莫れ。」㋼師云く、㋽「可惜許。」

㋾舉す、雲門上堂云く、「人に遇ふときは卽ち㋿鼻孔遼天。」㋿師云く、「笑ふに堪へたり這の老漢、㋿赤脚にして刀山に上り、毛を披して火聚に入る

㋑拈古は、古則則ち古德が大法を商量問答せられたる機緣を拈評するの義。

㋺此の上堂、臨齊錄並に傳燈十二、師の章に之れを載す。

㋩以下、國師拈古の語なり。

㋥此の錄、聯燈二十二に載す。

㋭會元七に云く、荊州天皇道悟禪師は、婺州張氏の子、法を石頭遷に嗣ぐ。

㋬龍潭崇信禪師は、其の家、餅を賣るを以て業とす、當時道悟天皇寺に住す、師の家寺の側にあるを以て、常に寺に行きて、道悟に餅を贈れり、遂に道悟に依つて出家し玄旨を悟る、後、澧陽龍潭に居つて庵を結んで居る。

ことを。其れ笑を解する底も也た少なることを爭奈せん。」

㋷舉す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ透法身の句。」門云く、「北斗裏に身を藏す。」㋸師云く、「衆生若し法身に非ずんば、卽ち衆生に非ず、法身若し衆生に非ずんば、亦法身に非ず、透の一字誰に因つてか致し得ん。直饒ひ是れ北斗裏に身を藏すも、謂つ可し首羅の三目、伊字に似たりと。」

㋹舉す、雪竇、衆に示して云く、「譬へば二龍珠を爭ふが若し、爪牙有るものは得ず。或は衲僧有り、既に是れ爪牙有るものは什麼としてか得ざると問はゞ、請ふ大衆、雪竇が爲に一轉語を下せ。」㋺師云く、「其れ貧しうして儉を學ばず、富んで奢を學ばず、此れは是れ俗漢の陋韻、卻つて言を知れりと謂つ可し。且く諸人に問ふ、二龍の爪牙、雪竇の爪牙と孰與れ。他既に珠を爭うて之を得ず、這の老、箇の什麼を爭うてか得ざる。請ふ各

㋻延壽堂は病僧寮なり。

㋼以下國師の拈古なり。

㋽可惜許の許字、語勦なり。

㋾此の上堂、會元師の傳に載せず、本錄にこれを出す。

㋿遼は掠なり、「かすめる」と訓す、氣宇王の如く、衝天の勢あるを云ふ、又自負高慢の意にも用ふ。

㋷以下は國師の拈語。

㋸赤脚は「すあし」なり。

㋹此の問答、傳燈十九に之れを載す。

㋺以下、國師の拈語。

㋻此の示衆、師の本錄に載す。

㋼以下、國師の拈語。

㋽此の話、傳燈十五投子章に載す。

㋾以下、國師の拈語。

㋓舉す、臨濟、侍者をして德山に傳語せしむ、侍者云く、「德山人を打することを要す。」濟云く、「汝但だ去れ、伊が棒を拈ずるを待つて接住して、一送を與へば、汝を打せざることを管取せん。」侍者敎ふる所に依る、果然として打せず。歸つて臨濟に舉似す、濟云く、「我れ從來、者の漢を疑著す。」㋔師云く、「蓋し是れ作者の動止、鬼神も測り難し。一人は海枯れて終に底を見る處に向つて、千聖の頂額に坐斷し、一人は人死して心を知らざる處に向つて、衲子の眼睛を瞎却す。咦、貴ぶ可し賤む可し。」

㋔此の條、臨濟錄勘辨に見ゆ。
㋕以下、國師の拈語。
㋖此の話、雪竇錄にあり。
㋗以下、國師の拈語。
㋘此の話、廣燈錄十五にあり。
㋙以下、國師の拈語。

㋚舉す、雪竇一日、僧に問ふ、「汝浴すや未だしや。」僧云く、「某甲此の生浴せず。」竇云く、「儞浴せず、箇の什麼をか圖る。」僧云く、「今日和尙に勘破せらる。」竇云く、「賊は貧兒の家を打せず。」㋛師拈じて云く、「雪竇老漢、才文武を兼ね、出でては將、入つては相、今日一口の鉛刀子を拈出せられて、高く降旗を竪つるに遭ふ。諸人雪竇を識らんと要すや。一種是の聲限り無き意、聽くに堪へたる有り、聽くに堪へざる有り。」

㋜舉す、風穴因に僧問ふ、「如何なるか是れ淸涼山中の主。」穴云く、「一句無著の問に遑あらず、今に迄るまで猶ほ野盤の僧と作る。」㋝師云く、「古人恁麼に答ふ、淸涼の主を褒するか淸涼の主を貶するか。若し是れ褒すと道はゞ、什麼に因つてか無著の問に遑あらざるの句有る、若し也た貶すと道はゞ、他箇の什麼の過か有る。褒せず貶せずと道はゞ、風穴何ぞ必ずしも恁麼の語話有る。端無く觸著すれば獅子哮吼す。」

㋞舉す、㋟臺山路上、一婆子有つて接待す。凡そ僧有つて、臺山の路甚麼より去ると問へば、婆云く、「驀直に去れ」と。僧才かに去れば、婆云く、「好箇の師僧、又與麼にし去る。」是の如くなること既に久し。游僧傳へて趙州に到る、州聞き得て云く、「待て、我れ去つて他を勘破せん。」遂に去つて臺山の路を問ふ、婆例に隨つて云く、「驀直に去れ。」州才かに行く、婆又云く、「好箇の師僧、又與麼にし去る」と。州回つて云く、「我れ婆子を勘破し了れり。」師云く、「盡く謂ふ、日下に孤燈を挑ぐと、殊に知らず失錢遭罪なることを。」

㋠舉す、臨濟上堂云く、「一人有り、劫を論じて途中に在つて家舍を離れず、一人有り、家舍を離れて途中に在らず、那箇か人天の供養を受くべき」といつて便ち下座。㋡師云く、「這の老漢、威容嚴肅、衲子到る者其の擧措を失はず。大家寢默俛仰、日を過ぎて道を見ず。衆人の唯唯は、一士の諤諤に如かず。若し是れ人天の供養ならば、一人を擇び取らんことを要す。」

㋝此の話、聯燈錄六、趙州章にあり。
㋞五臺山、世傳へて北方文殊師利所居の地と云ふ、淸涼山卽ち是れなり。
㋟此の話、臨濟錄にあり。
㋠以下、國師の拈語。

拈古終

㊀大燈國師行狀

㊁大應國師、臨濟の宗旨を㊂横嶽・萬壽・建長に唱ふること幾乎ど四十年、其の間、㊃揮衣者幾何といふことを知らず、師は其の一なり。師諱は妙超、宗峰は其の號なり。播州に生る、揖西縣紀氏の子なり。父母本州書寫山如意輪觀音に禱り、母夢みらく、一僧手に白花の五葉を開くを携へて之に與ふ、妊むこと有り。妊んで後寐ぬるが如くにして寤めず、其の誕の時に至つて熟睡して知らざるなり。保母俄に㊄呱地一聲を聞き、往いて之を見る。未だ㊅澡浴せずして肌體瑩潔、㊆克く岐に克く嶷に、頂骨聳立、㊇伏犀額を挿み、目光人を射る、面前の人に隨つて能く顏目を轉ず。五歲の時、人の刀を㊈硎に發するを見て云く、「何の爲にして作すや。」云く、「貴ぶらくは快利を圖る。」云く、「不快利の處、快利有り、儞還つて知るや。」其の人測ること罔し、師呵呵として大笑す。事に觸れ言を以て人を㊉折挫す、若し比親族諫めて之を住めしめんと欲する者有れば、棒を拈じて便ち打つ、鄉

㊀行狀は身の行ひ振りと云ふこと、國師一生の言行、履歷を記したる文書なり。

㊁大應國師の傳、最初大德開堂法語の下に註す。

㊂筑前橫嶽山萬年崇福禪寺、京都の九重山萬壽禪寺、鎌倉巨福山建長禪寺なり、大應錄にその法語あり。

㊃揮衣者は、侍衣侍者と云ふに同じ、揮は「かゝぐ」と訓ず。

㊄呱地は小兒の啼く聲。

㊅澡浴は產湯なり。

㊆嶷本嶷に作る、小兒の知有るを云ふ、詩の大雅に「克く岐に克く嶷に」とあり、箋に「岐は識なり、其の貌嶷々然とし

黨稱して神童と爲す。十有一歲、師書寫山戒信律師に事ふ、每に靜處に屏坐して、志俗塵を厭ふ、經書目を過ぐれば誦を成す。一日慨然として云く、「假使ひ㊇九流三藏、百家異道の書を究むるも、爭か若かん㊈不立文字直指單傳の宗に入らんには。」未だ剃染せずして、發足して㊉京城並に相州に至り、諸尊宿に參問す。尊宿氣佛祖を呑む底と雖も、敢て其の鋒に嬰らず。建長長老に謁し、問うて曰く、「路に死蛇に逢うて打殺すること莫れ、㊋無底の籃子に盛り將ち歸る、意旨如何。」老曰く、「㊌放下着、者般底直下に便ち看取せよ。」師云く、「只だ直下に便ち看取せよと道ふが如きんば如何。」老擬議す、師乃ち喝す。萬壽に造つて佛國禪師に問うて曰く、「佛法多子無し、着衣喫飯の處卽ち是れ。纔に㊍恁麼の理會を作さば、早く是れ不是にし了れり。」國云く、「未だ恁麼の事を知らず、以前と而今と如何が區別せん。」師云く、「區は則ち區、別は則ち別ならず。」國云く、「試みに區別せよ看ん。」師、㊎露柱を指して云く、「者箇を喚んで露柱と作さば、則ち昔時と迥に區なり、者箇を喚んで露柱と作さゞれば、則ち而今已に別なり。」國云く、「豈に是れ佛法にあらざらんや。」師云く、「和尙、好箇の時節。」國云く、

㊇九流百家は、諸子百家と云ふが如し。三藏は經、律、論なり、一切藏經と云ふに同じ。

㊈塗磨の宗旨なり。

㊉京城は京都、相州は鎌倉。

㊋底の無きかご。

㊌放下着の着は助字にして、手を放して下に置くの意なり。

㊍恁麼はかくの如きと云ふに同じ。

㊎露柱は大黑柱と云ふに同じ。

て能く知り能くうがつ所あるなり」と。

㊇圓機活法に、「犀は角、一は鼻にあり、一は額にあり、角に粟文有り」とあれば、蓋し、伏は伏在の義にして、額の眞中に「ほくろ」のありしを云ふならんか。

㊈砥石にて研ぐを云ふ。

㊉折挫は「やりこめる」こと。

「只だ與麼の受用、老僧と別なり。」師云く、「若し和尚、某甲有りと見ば、佗日悔い去らん。」國云く、「平生日用の處、直下に道ひ來れ看ん。」師云く、「步步踏着す ㋭ 毘盧頂、言言勘破す ㋮ 維摩詰。」次の日、又來り問うて云く、「昨日と今日と、請ふ師辨別せよ。」國師云く、「什麼の昨日とか說かん、直に今日の事を道へ。」師云く、「雲は龍に從ひ風は虎に從ふ。」國云く、「雲未だ起らず、風未だ來らざる時如何。」師云く、「天上天下唯我獨尊。」國云く、「雲門云く、『我れ當時若し見しかば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめて、貴ぶらくは天下太平を圖らん』と、如何。」師曰く、「㋯一口に呑却了也。」國、橫に點頭して曰く、「此の語敢て肯はず。」師乃ち喝す、國亦喝す、師又喝して出で去る。國送つて門を出でゝ曰く、「我れ多少の學者を見るに、未だ嘗て公の如き ㋰ 俊底に逢はず、宜しく ㋱ 祝髮披衣して吾が道に棟梁たるべし。」師、翌日重ねて佛國に參ず、國來るを見て曰く、「古人云く、大用現前、軌則を存せざる時如何。」師曰く、「和尙未問以前、已に現前すること久し。」國云く、「甚麼の處にか在る。」師曰く、「夜來狂風吹く、門前一枝の松を折る。」師、手中の扇子を搖かす、國休し去る。師云く、「狂風豈に是れ扇子にあらざらんや。」國、大笑して云く、「纔に相似を見て却つて也た ㋲ 蹉過す。」師此に於て ㋳ 服膺す。自ら歎じて曰く、「人身得難く、佛法遇ひ難し、賤に遇うては則ち貴し、豈に丈夫の志ならん」

光明徧照、或は徧一切處、大日徧照とも云ふ。
㋭ 維摩居士なり。
㋯ 一口に呑んでしまつたと云ふこと。
㋰ 俊底は俊發の漢と云ふこと。
㋱ 祝髮は剃髮するを云ふ。
㋲ 蹉過は踏みすべるなり。
㋳ 服は著くるなり、膺は胸なり、これを心胸の間に著けて能く守るなり。中庸に、「拳々服膺して、之れを失はず」とあり。

と。遂に ㋴ 落髮受具、旦夕心を此の事に留む。一夕、僧堂に坐す、僧の壁を隔てゝ百丈の語を誦するを聞くに、云く、「靈光獨り耀いて迥に根塵を絕す。體露眞常、文字に拘らず」と、驀然として省有り。夜半門を扣いて其の見解を呈す。國云く、「既に是れ眞正の見解なり、宜しく法幢を建て宗旨を立すべし。」厥の後、大應國師、詔に應じて橫岳より京師に來り、韜光庵に館す。師、相州に在つて其の手段辛辣なるを聞いて、京に趨つて徑に其の室に詣す。問うて云く、「學人遠遠、化下に來る、請ふ師一接せよ。」師云く、「老來力無し、㋵ 且坐喫茶。」師云く、「恁麼に用ひ去らば、只だ恐らくは背はじ。」國師云く、「儞は是れ ㋶ 新到、爭か這裏の事を知らん。」師云く、「㋷ 千里同風、豈に是れ君子ならずや。」國師云く、「室中の物色、儞試みに指出せよ看ん。」師云く、「七九六十三。」國師云く、「㋸ 無慚愧の漢、來處も也た知らず。」師云く、「謹んで老師の學人を以て、梵天に托上するを謝す。」國師云く、「今日 ㋹ 自領出去、明日の事、儞作麼生。」師云く、「天際日上り月下る、檻前山深ければ水寒し。」師云く、「一死再活せず。」師便ち休す。國師便ち問ふ、「五祖の濱、佛眼に示して云く、『牛、窓櫺を過ぐ、頭角四蹄全く出づ、尾巴甚に因つて出づるとを得ざる。』儞試みに一轉語を下して看よ。」師云く、「曲心已に露はる。」國師云く、「如何なるか是れ曲心。」師云く、「天を挂へ地を挂ふ。」國

㋴ 時年二十有三なり。
㋵ 且坐喫茶は、「まあまあ、すわつて、お茶でもあがれ」と云ふこと。
㋶ 新到は新參者と云ふに同じ。
㋷ 君子は千里同風の古語より來る。
㋸ 無慚愧の漢は、愧知らず奴と云ふこと。
㋹ 自領出去は、「自己の罪は自己が背負ふて出て去れ」と云ふこと。

師大笑して云く、「與麼に空しく過さば、他日悔有らん。」三日の後、師、下語して曰く、「㋐杓ト虛聲を聽く。」國師云く、「方に相似を得たり。」爾れより晝參暮請、敢て退轉せず。國師時に疾に臥し、旬を經たり、方丈の戸を閉ぢ、學者の參問を止む、唯だ師のみ參請を許さる。國師云く、「儞は是れ天然の㋖衲子なり、是れ一兩生、參學の士にあらず。」國師詔を承けて、京城の萬壽に住す、師之に從ひ、㋗巾瓶に侍す。國師示すに、「㋘翠岩眉毛在りや。」雲門云く、「關」の語を以てす。師、下語して云く、「錯を將つて錯に就く。」國師曰く、「是なることは則ち是なり、儞能く關の字に於て精彩を着けよ、他時、別に須らく生涯有るべし。」㋙德治丁未、國師、相州に赴き、建長に住す。師乃ち參隨彼に至り、未だ十日を經ざるに、案上鎖子を放在するに因つて、忽然として關字を打透す。圓融無際、眞實諦當、大法現前の處に到り了る、汗流背に浹る。急に方丈に趨り、下語して曰く、「幾乎ど同路。」國師大いに愕いて云く、「夜來夢に雲門、吾が室に入ると見る、儞今日關字を透る、儞は是れ雲門の再來なり。」師、耳を掩ふて出づ。翌日二偈を呈して云く、「一回雲關を透過し了つて、南北東西活路通ず、夕處朝遊賓主沒し、脚頭脚底清風を起す。雲關を透過して舊路無し、青天白日是れ家山、㋚機輪通變人到り難し、㋛金色の頭陀手を拱して還る。

㋐祖庭事苑に、「風俗に杓を拋つて吉凶を卜す、これを杓木と謂ふ」とあり。又鬼谷子には、「手鍋水を撥き、杓を水上に置けば、自ら旋つて杓の指す所に隨ふ、以て一歲の吉凶を卜す」とあり。

㋖衲子は禪僧と云ふに同じ。

㋗巾は手巾、瓶は水瓶なり、師の側に侍し、手巾、水瓶を捧げて事ふるを云ふ。

㋘翠岩夏末の因緣、碧岩錄八則にあり。

㋙德治は後二條天皇の年號、丁未は德治二年なり。

妙超が胸懷是の如し、若し師の意に㋚孤負せずんば、伏して望むらくは一言を賜へ、近ごろ故都に歸らんと擬す、尊意を惜むと莫くんば以て大幸と爲すのみ。」國師筆を掇つて自ら其の後に書して云く、「儞既に㋛明投暗合、吾れ儞に如かず、吾が宗儞に到つて大いに立し去らん。只だ是れ二十年長養して、人をして此の證明を知らしむ矣、妙超禪人の爲に書す。巨福山南浦紹明、㋜延慶戊申臘月。」國師滅を示す、㋝心喪既に畢る。京に歸つて居を㋞洛水の東に卜す、衲子纔に六七輩、刻苦自厲す、寒飢を忘るゝに至る。㋟一夕夢に六人の僧有り、狀羅漢の若し、第一位に居る僧の云く、「出世の時至れり、何ぞ出でざるや。」師云く、「仁義は盡く貧處より斷ゆ。」僧卽ち頷ひて竹針を以て腦後を㋠挑破して云く、「儞が爲に貧肉を抉り出す。」覺めて後、頭腦尙ほ痛む。幾ならずして雲居を去り、㋡城北の紫野に徙居す。佛殿を立てず、唯だ㋢法堂を樹つ。㋣洗心子玄惠法印、儒者九人と偕に朝に奏して、禪宗を破らんと欲す。「禪宗若し奇特の事有らば、吾が儕豈に敢てせんや、諸儒㋤徵詰。」諸方の禪將、意に當る者有ること無し。諸儒、師の名を聞いて特に來り問うて云く、「禪宗の手段如何。」師云く、「㋥虛僞を

㋚機は「からくり」、輪は廻轉の義、故に働きを云ふ。

㋛金色の頭陀は、摩訶迦葉を云ふ。拱は玉篇に「兩手大指相拄ふなり」とあれば、叉手するなり。

㋜巢禪に孤は負なりと。負は「そむくと」訓す。

㋝明暗雙雙底の境界に至るを云ふ。

㋞延慶戊申は花園天皇卽位の元年なり、臘月は十二月なり。

㋟心喪は喪期已に滿ちて喪服を脫するも、尙ほ心中に喪をなすを云ふ。

㋠東山雲居庵に栖止すること殆んど十年。

㋡此の時、文保二年の冬なり。

㋢挑は撥なり、發は「のぞく」と訓す。

㋣後醍醐天皇元應元年の春、本州赤松圓心、黃金若干を寄贈

以て眞實を示す。」儒云く、「聖人虛言有りや否や。」師云く、「有り。」云く、「既に是れ聖人、甚の虛言か有らん。」師云く、「見ずや、㋑孟子に之れ有り、象已に舜を殺すと謂ひ了つて宮に入る。舜の床に在つて琴ひくを見る、舜、象の來るを見て喜ぶ、豈に是れ虛僞にあらずや。」其の間、㋺激揚鏗鏘、問答罷んで、儒却つて師に問うて云く、「畢竟如何が此の義を決斷し去らん。」師云く、「舜却つて象を殺し了れり。」諸儒皆㋩稽顙して弟子の禮を執る。就中洗心子、入室參禪、造詣淺からず、崇信の至りに勝へず、第宅を施して大德方丈と作す、今の雲門庵是れなり。師、氣宇王の如し、人の㋥近傍すること少なり。數年檀越外護爲る者あること罕なり。一旦㋭萩原法皇、其の風を聞いて召して入內せしむ。上、中使を遣し、師に告げて道服を披して一重の坐席を除き、談話せんと欲す。師、再三袈裟を着けて對坐せんと乞ふ、一一之を許す。帝、勅して云く、「佛法不思議、王法と對坐。」師奏して云く、「王法不思議、佛法と對坐。」上、龍顏を動す。一日、上、勅問して云く、「萬法と侶爲らざる者、是れ什麼人ぞ。」師、手中の扇子を搖して云く、「皇風永く扇ぐ。」一日面り勅有り、云く、「朕、大德寺を以て朝廷第一の祈禱處とし、因つて一小院を紫野に遣る、師こゝに移居す。

㋐法堂は說法堂の義、大法を闡揚し、宗旨を演說する等、一切の法式を行ふ處を云ふ。

㋑洗心子は、一人一首に云く、「玄惠は儒家にして台宗に歸す、而後還俗、然も髮無うして身を終る、博識を以て世に聞ゆ、法印の位に叙す、作る所太平記、庭訓往來等今尙ほ存す、玄惠自ら洗心子と號し、又健叟と號す、軒號を獨淸と曰ふ。」

㋒徵詰は「なじり問ふ」なり。

㋓遺僞は方便なり。

㋔孟子卷の九、萬章上に出づ、象は舜の異腹の弟にして、父母と計り、舜を殺さんとす、或る時井を浚はしむ、舜之れを察し、井の中より拔け路を作る、父の瞽瞍と象とは之を知らず、上より土を拚ひ埋め、殺せしものと思へり。

㋕激揚鏗鏘は、問答の形容、鏗鏘は玉の鳴る聲。

㋖稽顙は、釋氏要覽に「顙は額なり、額を屈して地に至るをいふ」と。

㋗近傍は近かよるなり。

㋘萩原法皇は花園上皇なり。

㋙鞠は曲「かゞまる」なり、躬は身なり、鞠んで敬意を表する貌。

㋚這箇は「これ」、箇は物を指示する時の語、俗に、「それ見よ」、「それだ」と云ふが如し。

㋛論言とは天子の勅を云ふ、禮記緇衣篇に、「王言綸の如く、其の出づる綍の如し」と、是れ綸言の出處なり。

㋜三更は夜半、露柱は大黑柱。

㋝節角誦訛は「入りくんで、むづかしきこと」を云ふ。

㋞洞院は仙洞即ち花園上皇を指

爲し去らんと欲す。」師、命を受けて云く、「唯唯。」後醍醐天皇即位、前の勅する所の如く禮敬彌敦く、寵恩益渥し。帝、弟子僧を召して入內せしめ、帝、問うて云く、「萬法と侶爲らざる者、是れ什麼人ぞ。」僧起つて㋚鞠躬す。僧却つて奏して云く、「萬法と侶爲らざる者、什麼人ぞ。」上、手中の珪を以て劃一劃して云く、「㋛這箇。」師、法語を上つて云く、「億劫相離れて相離れず、盡日相對して相對せず。不審是れ什麼物ぞ、請ふ㋜綸言を聽かん。」帝、御筆紙尾に書して云く、「昨夜㋜三更露柱、和尙に向つて道ひ了れり。」上、投機の頌を書して師に賜うて云く、「二十年來辛苦の人、春を迎へて換へず舊風烟、着衣喫飯恁麼にし去る、大地那ぞ曾て一塵有らん。」又紙尾に書して云く、「弟子个の悟處有り、何を以て朕を驗せん。」師又書して云く、「老僧、恁麼に驗す。」上、「又御筆、古人の㋝節角誦訛の則の語を書して師に問ふ、師謹んで紙に書し、奏對す、勝げて計ふ可からず。㋞洞院都護に勅して師を請じて禁掖に入り、五節所に就かしむ。俄に法座を設け、師の㋟陞座を請ふ。面前に百丈禪師の頂相を懸く、帝亦法座の右側に於て御榻を設け、天聽を側つ。㋠月卿雲客、皆左右前後に在り、拈香祝聖罷ん

で、師、法座を下る、帝亦御榻を下る。師、奏して云く、「臣僧、適來許多の鄙俚言說、功何れの處にか歸す。」帝、百丈の眞を指して云く、「百丈禪師證明を爲す。」師云く、「此の外、更に人の證明を作す有る無しや。」帝便ち拳頭を竪起す、師云く、「與麽ならば則ち南山北闕に朝し、夜夜明星を見る。」帝、(ク)瞬目して祗揖す、師、鞠躬して出で去る、皇情大いに悅ぶ。

次の日(ケ)兼金繼帛等を賜ふ、兩朝特に興禪大燈高照正燈國師の號を賜ふ。賜ふ所の庄田、濃州長森、播州小宅三職方、幷に浦上、總州遠山方、御厨、信州伴野、紀州高家、仍つて官府宣を下さる。(コ)正中年中、南禪席を虛しうす、詔下つて師を請ずること再三す、竟に赴かず。(サ)建武の初め綸旨を下して云く、「大德禪寺は宜しく五山の一に處るべきなり。」師却つて之を受けず、又(シ)詔を下して云く、「宜しく南禪淨刹に相並ぶべし。」萩原法皇、後醍醐天皇親しく(ス)宸翰して、一流相承、他門の住を許さず、涇渭流を殊にし、言を龍華に貽すの御製有り、之を臨し之を刊して、塔額の左右に懸けらる。萩原法皇自ら御髮を剪り、小塔を造り、其の中に安じて靈光塔の左邊に置在せらる。蓋し大燈と當今來世香火の緣を結ばんが爲なり。筑州

(カ)陞座說法なり。
(ヨ)月輪雲客は公卿なり。
(タ)瞬目は目禮なり。
(レ)兼金は黃金、繼帛は絹なり。
(ソ)正中は後醍醐天皇の年號。
(ツ)建武は後醍醐天皇の年號、此の綸旨の下りしは、元弘三年十月一日なり。
(ネ)この綸旨のありしは正に元弘四年正月廿八日なり。
(ナ)蓋し按ずるに、去歲天皇京師を退いて、而も北朝舊政を用ひず、故に此の擧有りしならん。宸翰に云く、「大德寺は特に曹溪の正脈を稟け、專ら少林の遺風を煽ぐ、寔に斯れ叢林の規範なる者か、宜しく禪苑を劫石に比し、法席を龍華に傳ふべし、一流相承、它門を住せしむる勿れ、豈に是れ人我の情か緣にするものならんや、宗派涇渭を別つの故な

の太宰府都督司馬少卿、帖を師に上つて、橫岳山崇福禪寺に住せんことを請ふ。闕に詣して此の事を以て奏す、帝堅く之を留む。重ねて敷奏するに師翁行道の地と云ふを以てす、帝乃ち之を允す。纔に百日の主と作つて退を告げ、大德に(ラ)迁歸す。三轉語を垂れて衆に示して云く、「朝に眉を結び夕に肩を交ふ、我れ何ぞ似たる。露柱盡日往來、我れ甚に因つてか動かざる。若し箇の兩轉語を透得せば、一生參學の事、了畢せん。」(ム)建武丁丑冬一夕、(ウ)首座(德禪開山徹翁和尙なり、)を召して曰く、「我れ化緣已に盡く、衣法幷に本寺末寺住持職事、悉く爾に付與す、克く子孫をして接續せしめて斷絕せざらしめよ。」未だ幾ならずして疾を得たり、臘月二十一日夜書す、享首座、相從ふこと久し、悟徹既に人皆之を知る、語つて焉れを授く。又遺誡を諸弟子に示して云く、「我れ行いて後、骨を(ヰ)丈室に置いて別に塔を造る莫れ、其れ以有るなり、夫れ汝等宜しく委悉すべし。」二十二日午の時、胡床に端坐して滅を示さんと欲す、而して久しく足の疾有り、(ノ)結跏趺坐すること克はざるを思ふ。首座出でゝ此を以て憾と爲して語ぐ、師自ら兩手を以て左の足を右の股の上に加ふ、左の膝傷折し、血流れて衣を霑

(ム)建武は二年にて終る、三年改元して延元と云ふ、蓋し丁丑は延元二年なり。
(ラ)迁は遷なり。
(ウ)徹翁名は義亨、出雲の人、俗姓は頗氏、初め京都建仁寺鐵堂圓和尙に依り出家し、十九歲にして受具す、南禪寺にて大光和尙に謁し、後、雲居庵にて宗峰妙超に參じ、遂に印可を受く、晚年に德禪寺を興す。
(ヰ)丈室は方丈の室なり。
(ノ)結跏趺坐は、坐禪の正則にして、右の足を以て、左の股の上に安じ、左の足を以て、右の股の上に安ずるなり。
(オ)吹毛の名劍なり。
(ク)大鑑禪師は諱慧にして、號は清拙、名は正澄、支那福州の

り、嚴誡を將來に垂る、敢て違失する勿れ。建武四年八月二十六日。」

す、今に至つて血痕尙ほ存す。乃ち辭世の偈を書して云く、「佛祖を截斷して、㋐吹毛常に磨す、機輪轉ずる處、虛空牙を咬む。」筆を擲つて逝す。㋑大鑑禪師、時に南禪に住す、人有り、遺偈を傳誦す、鑑聞いて大いに驚いて云く、「意はざりき、日本明眼の宗師有らんとは。平生會面せんと欲して、人皆沮んで之を止む、遺恨少からず。」㋒茶毗に赴かんと欲すれども、而も朝廷祈禱の事有るに緣つて能はざるなり。且く僧人を遣し、茶毗の時を伺はしむ、至り馳せ歸つて之を告ぐ。乃ち大衆を率ゐて山門頭に出で諷經し、侍者二人を遣し、瓣香を贈らしむ。（溫中和尙、正翁和尙の二人なり、）瓣香今に至つて寺の什物爲り。世壽五十六、僧臘三十四、門人悉く遺誡に遵ふ。親しく印可を承け、其の法を嗣ぐ者、妙心の㋓關山和尙、興德の海岸、池寺の白翁、野州の了翁、長福の璧峰、金剛の日山、貞庵主、可監寺、和典座、各一方に據り、學者を接引す。師、平居物と春爲り、町畦無し。夫の陞堂して拂子を秉り、開室して竹篦を握るに迄つては、機を以て機を攻む、張良が足を躡んで韓信を封するが如し、是れ賊、賊を知る。孫子が竈を減じて龐涓を敗るが若し、㋔阿脩羅王㋕三有の大城に托動し、

一八四

人、我が朝の嘉曆元年六月、國請を受けて、我が國に來り、建長寺に住す、後、淨智、圓覺、建仁、南禪等の諸寺に移る。

㋒茶毗は梵語、譯して焚燒と云ふ。

㋓關山、名は慧玄、信濃の人、高梨氏の子、二十一歲にして、東傳啓和尙に建長寺に謁して、出家受具す。國師滅後、花園帝の勅に依り、正法山妙心寺を開く。

㋔阿修羅は梵語、非天、不端正と譯す、三面六臂にして、手に鬪諍の器を執り、忿怒の形相をなす、其の居所を修羅界、修羅道と云ふ。

㋕三有は欲界、色界、無色界なり。

㋖此れ雲門廣錄に載する遺誡中の語句なり。

㋗此の遺表は廣主劉王に遺せしものか、これ雲門廣錄にある

金翅鳥王、娑竭羅海を擘破す。談笑して臨濟を已に仆れたるに起し、叱咤して雲門の機關を破る。極處に到つて山を穿ち石壁に透る、鼻孔血淋淋。語錄三帙有り、一帙は雪竇の着語を錄す、自ら來る有り。按ずるに夫れ雲門の遺誡に云く、「㋘吾れ滅後、吾れを方丈の中に置け、上或は塔の額を賜はゞ、祇だ方丈に懸け別に營作すること勿れ。」又㋙遺表して云く、「聯りに鳳詔を叨りにして、累りに龍庭に對す、繼いて宣を頒つことを奉る。重疊の慶賜。」師、遺誡を示すに、雲門の故事に准じ、骨を方丈に置く、塔に靈光の額を賜ふ。㋚兩朝の寵光優渥に沐す。足の疾患に嬰る、大應、雲門の再誕の語、絲髮も爽はざる也。大應滅後十有九白、㋛嘉曆元年詔を奉じて大德の法堂を開く、一香大應に供す。二十年長養の㋜記蒭、㋝符節を合せたるが若し。入滅纔に九十年、夫れ何ぞ門庭冷落、子孫寂く微なる。所謂㋞强弩の末勢、魯㋟縞を穿つこと能はざる者か、寔に歎息するに足れり。

㋝應永三十三年龍丙午に集る九月日、㋠德禪遠孫小比丘禪興謹んで㋡梗槩を狀して、以て大方尊宿名公、塔に銘するの目に備ふと云ふ。

遺表中の一節なり。

㋚花園、後醍醐の兩朝。

㋛本錄、最初に開堂の法語を載す。

㋜備は將來、斯くあるべしと謂言するを記蒭と云ふ、大應國師、妙超禪人の爲に書する文中、「只だ二十年長養して人をして此の證明を知らしむ」の語あり。

㋝符節は割り符なり。

㋞强弩は强き石弓なり。

㋟縞は白絹なり。

㋠應永は稱光天皇の年號。

㋡德禪寺は大德寺塔頭に在り。

㋢梗も槩も「おほむね」と讀す、なほ大略と云ふが如し。

國譯大燈國師語錄終

大燈國師語錄

龍寶開山特賜興禪大燈高照正燈國師語錄

侍者　性智編

師於嘉暦元年十二月八日開堂、

拈衣云、千尺不過丈六、雞足不如大德、何故、擧衣云、頂戴披之、誰辨正色。

陞座、拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲祝延

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲。

陛下恭願、

龍圖永固、玉葉彌芳。

次拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲祝延

太上天皇聖壽億萬歲、恭願超上德於千載、樹風聲於後昆。

又拈香云、此一瓣香、奉爲金紫光祿大夫黄門侍郎增崇祿算、伏願松栢之壽、甫申之幹、柱石

國家撫育生民。

此一瓣香、奉爲光重法筵諸尊官、洎滿朝文武百僚、增崇祿算、伏願安國利民、齊伊周之古術、乃忠乃孝、稱思軻之正範。

此香在雲門關裏、久爲衲僧鎖口訣、曾拾得於鎌倉縣畔巨福山頭、和氣靄然、囊藏二十年來、香風隱而彌露、今日拈出爇向爐中、供養前住建長禪寺、勅諡圓通大應國師南浦大和尚用酬法乳之恩。

師就座顧視大衆云、便恁麼相見、早隔五須彌、若也待開口、三生六十劫、還有知个中事底麼、出來對衆決擇看、有麼有麼、僧問、雪山雪寒吾佛成道、法堂功成和尚開堂、建法幢立宗旨、正在此時、諸官臨筵、請師提唱、師云、國清才子貴、家富小兒嬌、僧云、直將一句無心法、仰祝萬國泰平瑞、師云、滿口道著、僧云、記得、慈明開堂、有僧問、攢錦簇花卽不問、如何是本來面目、明云、一言已出駟馬難追、此意如何、師云、石從空裏立、火向水中焚、進云、僧云、明明三際曉、皎皎一輪孤、明云、一輪底亦作麼生、意在那裏、師云、魚龍穴下盤根闊、日月輪邊氣象深、進云、僧云、洎合放過、明便喝、如何辨端的、師云、劫石易消、村話難改、進云、上來一一蒙指示、只如和尚今日開堂說法、當機覿面如何接人、師云、眉毛厮結、準上厮挂、僧云、作家宗師天然有在、便禮拜、師云、且緩緩、又云、更有問話者麼、又有僧問、記得龐居士辭藥山、居士指空中雪云、好雪片片不落別處、意旨如何、師云、難提掇處轉有、則僧云、時有全禪客、云、落在什麼處、士打一掌、又作麼生、師云、八角磨盤空裏走、僧云、全云、居士也不得草草、士云、汝恁麼稱禪客、有人不放汝在、如何委悉、師云、咬定牙關、僧云、全云、居士作麼生、士又打一掌、意在那裏、師云、多添少減、僧云、虛堂祖翁云、雖則是兩掌、其間有擡有搦、有收有放、如何辨別、師云、到此大行、僧云、上來已蒙慈悲、向上宗乘事、如何舉唱、師云、千峰雪白、萬壑風寒、僧云、老師果是人天大導師、便禮拜、師云、許儞歸衆去。

乃云、我本無心有所希求、氷鎖瀑泉聲細碎、今此寶藏自然而至、風搖寒木影攣拳、況我宗印禪者、焉海南檀越、冒穹谷攀幽林、親擇巨材、堆山積岳、控溪水焉海通、鯨波嶮處獨解透路、驅白牛於露地、結軌於百里、鴻成風於大野、響斧於一城、或費郊外丁夫、或勞山中普請、樹雲間之朱堂、布五彩之椽椽、安燈王之廣座、莊三道之寶階、區區役役、今日開堂、高答君臣、徧報過現未來、大覺海中一切聖賢、生生所參見諸善知識、衆中衣鉢、道友師僧、父母一切恩門、一切含靈、爲便是自然而至、爲復是從功而成、諸人於此會得去、山僧不必解說、若也不會、曲務遠說、擊拂子云、所以前釋迦不前、後彌勒不後、無邊刹境、自佗不隔、於毫端、十世古今、始終不離、於當念、一毛頭上現寶王刹、一彈指頃轉大法輪、雖然如是、猶是建化門中事也、向上宗乘事、又作麼生、又擊一拂子云、有意氣時添意氣、得風流處且風流、小比丘妙超、忝遇　君聖臣賢、不忘靈山付囑、太平得路成此梵刹、敷揚正法眼藏、祝延　聖壽無疆、山河大地、草木叢林、情焉無情、同蒙光輝、共力拜手、妙超下情、不勝感激屏營之至。

復云、昔日世尊六年、戴雪頭上安頭、明星忽現眼皮橫綻、從此無端、解道大地含識、具个如來智慧德相、大衆若是大地衆生、各各自有生涯、從旦至暮、從少至老、每日起坐經行、一是一非、瞥喜瞥瞋、並是佗家活脫生涯也、何必貴如來智慧德相、後代兒孫、得被者老漢惑亂、往往安

禪靜慮、刺腦入膠盆、以悟爲望、似緣木求魚、謂之望上心不足、大須辜負世尊出世本志、且問諸人、上來既道、後代兒孫、被佗惑亂、今也便道、大須孤負佗出世本志、是褒世尊、是貶世尊、若道讚嘆、因甚有惑亂之言、若道誹謗、亦何有孤負之詞、或道褒貶隨時、未免隨語生解、更道褒貶不施、失却古佛家風、直饒道總不恁麼、明知莽莽鹵鹵去、畢竟意在那裏、所以山僧曾有一頌、明星一見雪重白、眼裏瞳人毛骨寒、大地如無知此節、釋迦老子出頭難、只如道眼裏瞳人毛骨寒、是什麼時節、若能恁麼去、日用四威儀中、壁立萬仞、孤迥迥峭巍巍、如天普覆、如地普載、如虛空含容、如日月照耀、因甚如此、今日臘月八。

擧、太宗皇帝因僧朝見、帝賜坐問云、卿甚處來、僧奏云、廬山臥雲庵、帝云、臥雲深處不朝天、因甚到者裏、僧無對、師蓦拈拄杖云、太宗威容嚴肅、機晤宏遠、者僧寢默俛仰、不失其禮、只如後來雪竇明覺大師、代云、難逃至化、又作麼生、卓拄杖一下云、四海而今清似鏡、三邊誰敢犯封疆。

正旦、謝兩班上堂、僧問、日暖風和、萬物新相逢、便拜、又相賀、三乘五性不用問、應節一句如何擧揚、師云、分明記取擧似諸方、僧云、記得、僧問趙州、如何是趙州、州云、東門南門西門北門、此意如何、師云、黑漆桶裏洗墨汁、進云、僧云、不問這个、州云、儞問趙州、意在那裏、師云、烏龜鎖壁、進云、某甲不問趙州、又不問老師、只是有一問、請師答話、師云、莫向那僧背後問訊、進云、恁麼則大衆霑恩、擧人禮謝、師云、只要實到與麼地、進云、領重重相爲、師云、領底作麼生、進云、也是不空、師云、不因今日節。

乃橫拄杖云、寅朝乍臨正景新、至梅梢舒瑞氣、幽鳥報賀音、左右壯保愛之節、東西開納祐之門、嵩莎步入祥麟穩、海樹飛來白鳳閑、卓拄杖下座。

元宵上堂、僧問、昔日西天迦葉初傳燈、未審如何是初傳底燈、師云、夜半正明天曉不露、進云、迦葉已傳之、龍潭爲甚吹滅、師云、倒騎牛入佛殿、進云、後來有僧問香林、如何是室內一盞燈、林云、三人證龜作鼈、是答迦葉底、答龍潭底、師云、壺中天地、別有日月、進云、只如道三人證龜作鼈、作麼生辨端的、師云、石人相耳語、進云、忽有人問如何是室內一盞燈、師云、紫羅帳裏撒眞珠、進云、恁麼則動地放光、放光動地、便禮拜、師云、大家自知。

乃云、燈燈無盡燈、光明千萬里、揑聚也不即、放開也不離、一片虛凝宇宙寬、不知燃燈爲誰記、以拂子擊禪床一下、便下座。

二月旦上堂、僧問、春色無高下、花枝有短長、花枝短長人人知、如何是春色底、師云、山擎海浸、僧云、記得仰山問僧、近離甚處、僧云、廬山、此意如何、師云、解笑底也少、進云、仰山云、曾遊五老峰麼、僧云、不曾遊、又作麼生、師云、邯鄲學唐步、進云、仰山云、闍黎不曾遊山、如何辨端的、師云、黃金賤不如泥土貴、進云、雲門大師云、此語皆爲慈悲之故、有落草之談、意在那裏、師云、聽敎兩頭走、僧云、若不登樓望、焉知滄海深、便禮拜。

師乃云、春風浩浩、春鳥喃喃、春雲冉冉、春水漫漫、時哉時哉、時何孤負、一任諸人東看西看、忽有个漢出來、道老和尙只知其時不知其節、今朝天寒雪下如冬、山僧向佗道、我餘一件事引得儞一問。

佛涅槃上堂、僧問、春色依依花木芳菲、雙樹因甚一榮一枯、師云、古今與麼見、進云、恁麼則人天、悉莫見世尊所入三昧麼、師云、泥人眼赤、進云、記得德山一日齋晚、老子托鉢自方丈下來、此意如何、師云、步步生荊棘、進云、雪峰云、鐘未鳴鼓未響、老子托鉢向什麼處去、又作麼生、師云、相見易得好、進云、德山低頭歸方丈、如何辨端的、師云、闇室藏燈、進云、岩頭聞云、大小德山未會末後句、在還諦當否、師云、斷絃須是鸞膠續、進云、德山云、儞不肯老僧、那意旨作麼生、師云、誰知只是有受璧心、進云、岩頭密啓其意、禪師云、覽盡瀟湘景、和船入畫圖、進云、德山次日陞堂、果與尋常迥殊、如何理會、師云、法出姦生、進云、岩頭拊掌謂大衆云、且喜老漢會末後句、意在那裏、師云、事久多變、進云、學人今日小出大遇、便禮拜、師云、兩肩擔將歸去、

乃云、世尊臨入涅槃、以手摩胸、普告大衆云、汝等諦觀我紫磨金色身、驀豎起拄杖云、者个是大德拄杖子、阿那个是金色身、諸人一見便見、不妨一得永得、其或未然、山僧謾諸人去、百億須彌、百億日月、恒沙國土、恒沙諸佛、盡在拄杖頭上、增添金色身光、莊嚴涅槃妙相、諸人還見麼、若尚未見、卓拄杖云、年年二月花狼藉。

三月半上堂、僧問、不得春風、花不開、花開須藉春風力、不知春風有什麼力、師云、還覺腦門冷麼、僧云、馬大師與百丈行次、見野鴨子飛過、大師云、是什麼、意旨如何、師云、罕遇此門、僧云、丈云、野鴨子、大師云、什麼處去、又作麼生、師云、爭之不足、僧云、丈云、飛過去也、大師遂扭百丈鼻頭、如何識取、師云、打驢聽馬知、僧云、丈作忍痛聲、大師云、何曾飛去、禪師云、嚼飯餵嬰兒、僧云、大師次日陞堂、衆纔集、百丈出卷席、意在那裏、師云、金不博金、僧云、大師便歸方丈、問百丈、我適來上堂、未曾說法、儞爲什麼便卷卻席、如何商確、師云、樂則共樂、僧云、丈云、昨日被和尚扭得鼻孔痛、還端的也無、師云、風吹不入、僧云、大師云、儞昨日向甚麼處留心、此意如何、師云、遊子乍聞征袖濕、僧云、丈云、今日鼻頭又不痛、也如何理會、師云、水洒不着、僧云、大師云、儞深知今日事、是何道理、師云、貴買賤賣、僧云、丈乃作禮、卻歸侍者寮、哭、意又作麼生、師云、攢簇不得、僧云、同事侍者問云、儞哭作什麼、丈云、儞去問取和尚、如何辨別、師云、那吒撲帝鐘、僧云、侍者遂去問大師、大師云、儞去問取佗看、意在什麼處、師云、從來疑著个老、僧云、侍者卻歸寮問百丈、丈卻呵呵大笑、如何委悉、師云、瓦解冰消、僧云、侍者云、儞適來哭、而今爲什麼卻笑、丈云、我適來哭、如今卻笑、是什麼心行、師云、唱九作十、僧云、可謂親言出親口、師云、不如禮拜好、僧便禮拜。

師乃云、桃花紅李花白、靈雲玄沙立阡陌、相爭祖道不敢休、其勢不生多韜略、春雨自知斷和句、瀟瀟洒去空蕭索、兩兩三三解歸根、四維上下難尋覓、既難尋覓、因甚得大地載起、喝一喝云、放過一著。

謝龍藏主上堂、山僧拂子說三種禪、忽豎起拂子云、此是換卻佛祖眼睛底禪、亦打一圓相云、此是指出人天性命底禪、擊禪床一下云、此是發雲雨大用底禪、雖然如是、若是自非一氣轉得一藏底人、爭能消得多少風。

佛生日上堂、僧問、世尊今日降下、未至地、九龍吐水洗金軀、早是一場敗缺、和尚要雪屈、也是泥裏洗土塊、師云、狗啣赦書、進云、指天指地金蓮捧足、因甚腳下紅絲線不斷、師云、要知山上

路須問去來人進云韶陽老人正令方行諸方未免將錯就錯師云夜行莫踏白不水定是石進云不因老師點發容易難瞻慈顏師云月到中峰猶未歸進云三十年後此話大行師云馬無千里謾追風。

乃云本不曾上天何論下天本不曾託胎誰說出胎所以道淨法界身本無出沒既然如是因甚東家杓柄長西家杓柄短會得各各惡水驀頭潑不然齊之以禮。

結夏小參僧問德山小參不答話有問話者三十棒佗家親切處如何識得師云來者不來去者不去進云趙州小參要答話有問話者置將一問來又作麼生師云買價破大例進云風從虎雲從龍豈莫是用處一般麼師云且喜沒交涉僧云學人今夏依附和尚未審作麼生下手腳師云莫錯舉。

乃云西天鵝護之限聖制臘人之期衲子慧身之時吾家禁足之方明月軒畔清風匝地看雲亭邊竹影拂階於此圓覺伽藍聚集四聖六凡於此平等性智安居情與無情只如七佛祖師三處度夏還出得這裏也無諸人若點檢得出九十日內不敢孤負虫豸若也點檢不得卓拄杖云金剛眼睛十二兩。

復舉世尊一日陞座文殊白槌云諦觀法王法法王法如是世尊便下座師拈云大湖浸月長橋臥波若非高吟大嚼爭能賞此時情雖然風流可觀其奈得便宜處落便宜具眼禪流請辨緇素看。

次日上堂僧問衲僧箇箇氣宇如王今朝因甚坐在區宇師云畫餅充飢進云若也論此事如青天白日更向甚處剋期取證師云路入桃源深更深進云慈明問黃龍雲門三頓棒洞山可喫不可喫意在那裏師云兩鏃蒺藜進云黃龍云可喫還端的也無師云直饒山岳也難藏進云明云終日鵶鳴鵲噪喫幾棒意旨作麼生師云一種是聲無限意有堪聽有不堪聽僧便禮拜。

師乃舉五祖云今日結夏無可供養大衆作一家宴管待諸人遂舉手云囉囉招囉囉遙囉囉送莫怪空疎伏惟珍重師云五祖老人與麼家宴可謂管待千足百味無缺雖然如是只是有一時之慶快大德今日結夏也有箇家宴坐者立者俱成萬年歡見者聞者同唱太平歌且道其中節拍又作麼生以拂子擊禪床一下云薰風自南來殿閣生微涼。

謝首座書記藏主秉拂上堂西來呈師厚靈樹待遇腳底如驢踏慈明堂奧法絲於其時人焉廋乎後之視今如今之視古何也智藏發光資鞭影擊拂子下座。

謝良和典座上堂舉金牛每日齋時自將飯於僧堂前作舞呵呵大笑云菩薩子喫飯來師云金牛和尚務在細嚼難飢只是衆口難調大德今夏屋裏得有人一衆自然不聞吾臂酸諸人要知此人麼卓拄杖云發而當節言之和。

端午上堂僧問文殊令善財採藥善財云盡大地無有不是藥者此意如何師云穿靴水上立僧云文殊云是藥採將來意在那裏師云六六雙骰子一時赤僧云善財於地上拈一莖草度與文殊意旨作麼生師云吐舌至頂相僧云文殊云此藥亦能殺人亦能活人如何識得師云貓兒打筋斗僧云應病與藥是古來家風和尚作麼生醫無病人師云黑蛇入漆甕僧云與麼則

大法緊要之處、誰敢假盧耽藥、師云、波斯不過江。

乃云、端午天中節、諸方盡咒土書壁、以消妖怪、認採藥模樣、百草頭上做伎倆、我者裏箇箇石人之機、箇箇鐵漢之用、水洒不著、風吹不入、驀拈挂杖卓一下云、森森夏木杜鵑啼。

上堂、僧問、記得良禪客問欽山、一鏃破三關時如何、山云、放出關中主看、意旨作麼生、師云、水底弄傀儡、進云、良云、恁麼則知過必改、山云、更待何時、如何領略、師云、一字不著點、進云、良云、好箭放不著所在、便出去、未審還有出身處也無、師云、楚山入漢水、進云、山云、且來闍黎、良回首、山把住云、一鏃破三關即且止、試與欽山發箭看、意在那裏、師云、天不保惡、進云、良擬議、山打七棒云、且聽、這漢疑三十年、誦訛在什麼處、師云、古殿坐者少、進云、學人若不逢箇節、爭敢知箇事、便禮拜、師云、實須到與麼地。

乃云、法法本來法、心心無別心、日午三更後、相喚賞樹陰、話盡甘泉之景、聯成羅含之吟、品藻鷹鳩之變、嘉唱耳德之音、拍手笑呵呵、眞鍮不博金、喝一喝云、侍者與我點茶來。

半夏上堂、半夏已前事、諸人知而山僧不知、半夏已後事、山僧知而諸人不知、正當今日半夏、知則共知、不知則共不知、還會麼、良久云、三段不同、收歸上科。

上堂、僧問、世界恁麼熱、宇宙炎炎、不知向什麼處得回避、師云、清機歷掌、僧云、王常侍一日訪臨濟、同濟在僧堂前、乃問、這一堂僧、還看經麼、濟云、不看經、意在那裏、師云、石壓笋斜出、僧云、侍云、還學禪麼、濟云、不學禪、意旨作麼生、師云、崖懸花倒生、僧云、侍云、經又不看、禪又不學、畢竟作箇什麼、濟云、總教伊成佛作祖去、到者裏如何領略、師云、調達不得背、僧云、侍云、金屑雖貴、落眼成翳、濟云、將爲、儞是箇俗漢、還端的也無、師云、疎田不貯水、僧云、若恁麼不來、爭得恁麼去、師云、且看脚下。

乃云、一法若有、毘盧墮在凡夫、萬法若無、普賢失其境界、拈挂杖云、者箇是大德挂杖子、阿那箇是有無、道得與不道得、朝打三千、暮打八百、擲下挂杖下座。

七月旦上堂、僧問、暑退凉生、樹凋葉落、時節因緣不相謾、如何是箇中事、師云、大家多生機、進云、記得、僧問雲門、不起一念還有過也無、門云、須彌山、作麼生領會、師云、莫教平出、進云、有僧問虛堂老師此意如何、虛堂云、買鐵得金、意在那裏、師云、也是可惜許、進云、今日問和尙不起一念還有過也無、未審如何祇對、師云、三生六十劫、進云、與麼則昔日雲門、今日和尙、便禮拜、師云、禮拜得始得。

乃云、昨見垂楊綠、今看落葉黃、祖門攀搦事、物物不隱藏、者箇葛藤、即且致、向針筒鼻孔裏倒道、將一句來、若無人道得、聽取山僧爲儞說破。

解夏小參、僧問、和尙一夏以來、爲衆勞手脚、未審成得什麼邊事、師云、崑崙嚼生鐵、進云、恁麼則誰敢辜負和尙、師云、放儞保殘生、進云、記得、臨濟示衆云、赤肉團上有一無位眞人、常從汝等諸人面門出入、未證據者看看、意旨如何、師云、不較多、進云、時有僧出問、如何是無位眞人、濟下禪床把住云、道道、又作麼生、師云、若不道、瑕爭得珠轉、進云、其僧擬議、濟托開云、無位眞人是什麼乾屎橛、便歸方丈、還端的也無、師云、半開又半合、又有僧問、記得、僧問雪峰、乞師指示、峰云、是什麼、如何承當、師云、劈腹剜心、進云、其僧於言下大悟、也是見什麼道理、師云、捨長

就短、進云、雲門云、雪峰向伊道什麼、未審節文在甚麼處、師云、錮鑼著生鐵、進云、古德底且置、和尚直下作麼生指示、師云、速退速退、妨他別人請問、進云、不因今日節、誰敢恁麼去、師云、更有露柱在。

乃云、法歲周圓、聖制已滿、我者裏荒涼、爽氣最容與、不論取證淺深、不分賞勞輕重、攀白雲而高捲、追秋風而長嘯、爾汝東西任情逍遙、草鞋跟寬、無不活路、若逗到崑崙山頭、佗喬尸迦忽相逢、問過慕割一句、只將隔手底祇對、不然五門猛獸欺、爾在。

復舉、翠巖夏末示衆云、一夏已來、與兄弟東說西話、看翠巖眉毛在麼、保福云、作賊人心虛、長慶云、生也、雲門云、關、師云、諸方盡謂、俱出隻手扶竪宗風、殊不知、巨鼇莫戴三山去、吾欲蓬萊頂上行。

次日上堂、僧問、今朝正是解制自恣之辰、不知何處是衲僧遊戲之場、師云、來鋒有路、進云、恁麼則十洲三島草鞋底、鷹蕩天台拄杖邊、師云、也何妨、進云、僧問雲門、初秋夏末、前程忽有人問、如何祇對、門云、大衆退後、作麼生領會、師云、因邪打正、進云、僧云、過在什麼處、門云、還我九十日飯錢來、意在那裏、師云、大慈妨小慈、進云、今日忽有人問著、作麼生祇對、師云、三句前兩句後。

乃舉、臨濟道、有一人、論劫在途中、不離家舍、有一人、離家舍、不在途中、那箇合受人天供養、師云、諸人要向者裏道取、須向那裏透過、若是人天供養、秋風吹渭水、落葉滿長安。

謝進退兩班、上堂、衲僧家尋常用底、豈止乎虎視龍望、爲世所推、進一步則突出威音王已前、退一步則爍迦羅眼裏藏身、因甚如是、擊拂子云、天際日上月下、檻前山深水寒。

八月旦上堂、僧問、槿花凝露、梧葉鳴秋、此中現成事、如何提唱、師云、答猶未了、進云、幾人得與麼去、師云、只許阿儞一箇、進云、肅宗皇帝問忠國師、如何是十身調御、國師云、檀越蹈毘盧頂上行、意在那裏、師云、不妨脚下紅絲線不斷、進云、帝云、寡人不會、國師云、莫認自己清淨法身、又作麼生、師云、主山騎案山、進云、忽有人問如何是十身調御、未審和尚如何祇對、師云、背短冑長、進云、恁麼則西風一陣來、落葉兩三片、師云、三十年後。

乃云、秋雲弄秋風、秋色蕭秋水、氣清如時清、道泰似情泰、禪者之雅興、道人之嘉景、頭頭上顯露、物物上現成、卓拄杖云、是則是、三十年後、有人加勸沮去。

中秋上堂、僧問、靈山話月、曹溪指月、到者裏如何辨端的、師云、三山帽大袖衫、僧云、馬大師甄月次、問西堂百丈南泉云、正當與麼時如何、西堂云、正好供養、意旨作麼生、師云、波斯讀尚書、僧云、百丈云、正好修行、又作麼生、師云、拂地添錮瓶、僧云、南泉拂袖便行、意在那裏、師云、起席不謝坐、僧云、大師云、經歸藏、禪歸海、只有普願獨超物外、如何委悉、師云、神箭三匝白猿號、僧云、古人誦訛處、和尚已呈露、和尚誦訛處、未審何人點檢、師云、天高蓋不盡、僧云、不因恁麼問、爭識恁麼事、師云、更須買草鞋、僧云、深沈滄海恩波濶、皎潔秋空氣象高、師云、如道著須用蓑、乃云、秋中秋、月中月、四萬二千清光、五十由句靈闕、明明重明明、皎潔又皎潔、指與話俱納敗缺、納敗缺、還照絕無物堪比倫、教我如何說。

上堂、僧問、雲門因僧問、如何是法說、門云、大衆久立、迭禮三拜、意旨作麼生、師云、還我話頭來、

進云、如何是隨意說、門云、晨時有粥、齋時有飯、又作麼生、師云、一任亂咬、進云、如何是隨宜說、門云、三德六味、施佛及僧、如何理會、師云、薤園裏賣葱草、進云、如何是方便說、門云、是汝鼻孔重三斤半、意在那裏、師云、露柱退後、進云、如何是大悲說、門云、歸依佛法僧、如何辨端的、師云、放爾三十棒、進云、雲門一一答話、畢竟明得箇什麼邊事、師云、南地竹、北地木、進云、不因夜來鴈爭見海門秋、便禮拜、師云、莫錯舉。

乃云、功高二儀而不仁、明踰日月而彌昏、肇公只知從事中得、不知從事上得、且道從事上得底作麼生、良久云、殘葉賦題紅片片、遠山供望碧層層。

重陽上堂、僧問、九九佳節謂之重陽、只向者裏領去、是第幾機、師云、什麼處收拾得、進云、與麼則逢人須說三分話、未可全拋一片心、師云、六脚蜘蛛上飯床、進云、豈不是老和尚出人妙手、師云、爾因什麼得到與麼地、進云、東西南北歸去來、師云、猢猻摘仙菓、乃云、只愛菊花發紫蘂、不喜聞彭祖之術、只愛秋露凝赤萸、不憂忘稚川之說、不憂不喜、善哉箇重九節、擊拂子下座。

上堂、雲門云、許多大栗子、喫却幾箇、有人喫得三箇、韶陽吐却五箇、有人喫得五箇、韶陽吐却十箇、者箇些子、緇素辨得出、山僧分半院與爾。

閏月旦上堂、拈拄杖云、一切諸佛、及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法、皆從此經出、卓拄杖一下云、看看、大德拄杖子、爲爾諸人、此經科分細大義理、一一指注、而見諸人、猶不知不了、高聲唱云、四時禁土節、三年有一閏、又卓一下。

上堂、黃葉滿地塞鴈橫空、彼此出家、彼此行脚、佛手遮不得、人心似等閑、更擬問如何、當頭霜夜月、任運落前溪。

開爐上堂、僧問、辭柯黃葉已成堆、整頓園爐就地開、時節一句如何體會、師云、莫教擁山帔、進云、有人、刹那去亦如何、師云、前言不副後語、進云、趙州示衆云、三十年前、南方火爐頭有箇無賓主話、直至而今、無人舉著、意在那裏、師云、三箇柴頭品字燒、進云、未審有甚麼難舉著麼、師云、近之燎却面門、進云、學人進前退後、自由自在、是舉著不舉著、師云、且過者邊著、進云、便是兩彩一賽底、師云、大有人點頭、進云、不入虎穴爭得虎子、便禮拜、師云、相識滿天下。

乃云、法昌十六高人、怕寒懶剃鑿鬆髮、趙州無賓主話、愛煖頻添梠槌柴、大德門下終不向針頭削鐵何也、今日十月一、開爐免暗子。

謝監收維那上堂、齊之則泥土舒天顏、約之則水滴難以通、恁麼並務、致令各各投其方圓之器、安其上下之居、是謂之紀綱清嚴、收放有則、及乎究其端由、豈止還丹一粒、點鐵成金。

上堂、卓拄杖云、拄杖子若不相當、是什麼物得不相當、便下座。

冬至小參、僧問、一氣潛通、萬彙發生、不涉時節、願聽提唱、師云、鼻孔占却三畝之地、進云、溈山問仰山、仲冬嚴寒、年年事、晷運推移、事若何、仰山近前叉手而立、意旨如何、師云、一字入公門、九牛車不出、進云、溈云、誠知子答者話不得、又作麼生、師云、見人富貴常歡喜、進云、時香嚴至、溈山舉前話、嚴云、某甲偏答得者話、溈復問、嚴亦近前叉手而立、如何領略、師云、借婆裙子拜婆年、進云、溈云、賴遇寂子不會、畢竟如何、師云、鷄鳴不著時、隣人半夜行、進云、今日有人問仲

冬嚴寒年年事、曷運推移事若何、未審和尚如何祇對、師云、夜聞祭鬼鼓、朝聽樂神歌、進云、與麼則來日一陽生、便禮拜、師云、一任記取。

乃云、陰魔消盡陽氣發時無硬地、律管先知、壠頭梅綻不萠枝、直得皓老布裩、麻線易通、鏡清臥單、絣拇難開、縱饒迄于道、所以陰陽不測者、空洞無象、所以造化不宰者、潛微幽隱也、未是出書雲令節、是故山僧只望、以五日爲一候、以半月爲一氣之流、漏泄箇仲冬嚴寒事、物物對偶機、其或似阿房曳衣底、東山水上行。

復舉慈明冬至牓、師拈云、東弗千代日下東、西瞿耶尼月氏西、解笑者多、解哂者少、若也今晚放參、一冬二冬、叉手當胸。

因雪謝寺齋秉拂上堂、演出普賢信口偈、擎來香積無盡飯、要知雨彩一賽虎、麼卓拄杖一下云、吽吽、有什麼餺飥餛飩子、快下將來。

謝兩班上堂、諸佛放光明、助發實相義、釋迦老子非但當年之益、且要使吾沙門於五濁惡世中、鬪諍堅固時、拋卻人我擔子、除卻高下情謂、互作主伴、箇實相無相、微妙解脫法門、久住於世間、全億劫利濟、實相義且致、如何是諸佛放光明、良久云、東山拍手西山舞。

因雪上堂、危木風寒、空山雪白、麗蘊枝頭藏身、象骨巒塢氣索、往往佗人住處我不住、佗人行處我不行、不是與人難共聚、大都緇素要分明、喝一喝。

臘八上堂、僧問、釋迦老子半夜逾城、雪山六年一麻一麥、是什麼心行、師云、針鋒頭上翻筋斗、僧云、正當明星現時、忽然悟去、還端的也無、師云、似地擎山不知山之孤峻、僧云、只如一人發眞歸源、大地衆生在什麼處、師云、金剛腦後三斤鐵、僧云、釋迦老子顚言倒語云、奇哉一切衆生、悉具如來智慧德相、既是無風起浪、如何得太平去、師云、寒雨洒空、寒風匝地、僧云、學人今日小出大遇、便禮拜、師云、撒手那邊去。

乃云、半夜逾城直上雪山、既是道士擔漏巵、更說於明星現處、忽然悟去、大似揑目見空花、大德未嘗不解、烏頭養雀兒、卓拄杖云、南斗七、北斗八。

歲旦雪下上堂、除夜大風吹、昨夜舊年風、今朝新歲雪、雪帶舊年寒、風和新歲節、阿呵呵我家好驅儺、向後絕災禍、絕災禍、東西南北皆可可、龍寶從茲爐竈大。

上堂、意到句不到、一二三四五六七、句到意不到、七六五四三二一、忽然意句俱到時、又作麼生、良久云、花開不假栽培力、自有春風管待伊。

三月旦上堂、煙霞影裏、春風聲中、山桃紅綻、岸柳翠濃、無限幽情巨、遮掩、莫教舞蝶一簇簇、三月半上堂、僧問、祖令當行、十方坐斷則不問、只於春風拂拂時節、願聞親切一句、師云、處處綠楊堪繫馬、進云、長沙一日遊山歸、門首、首座問云、和尚什麼處去來、沙云、遊山來、意旨如何、師云、家家門路透長安、進云、首座云、到什麼處來、沙云、始隨芳草去、又逐落花回、如何領略、師云、落霞與孤鶩齊飛、首座云、大似春意、沙云、也勝秋露滴芙蕖、端的在那裏、師云、春水共長天一色、進云、雪竇著語云、謝答話、如何委悉、師云、一畝之地三蛇九鼠、進云、古人恁麼酧唱、如麟如電、只恐通變未全、和尚今日莫別有提唱麼、師云、崑崙嚼生鐵、進云、不因楊得意、爭識馬相如、便禮拜、師云、咦。

乃舉、僧問風穴、語默涉離微、如何通不犯、穴云、常憶江南三月裏、鷓鴣啼處百花香、諸人要見、風穴麼、只識取常憶兩字、其如未然、離微體淨品。

四月旦上堂、僧問、鵲噪柳絲亂、龜遊荷蓋傾、此中現成事、未審如何提唱、師云、青青不入時人意、僧云、溈山示衆云、有句無句如藤倚樹、意旨作麼生、師云、八十翁翁牙根堅、僧云、疎山云、忽遭樹倒藤枯、句歸何處、又作麼生、師云、見之不取、思之千里、僧云、溈山放下泥盤呵呵大笑、意在那裏、師云、黃連未是苦、僧云、獨眼龍云、敎溈山笑轉新、如何委悉、師云、屋裏鬻楊州、僧云、疎山言下知歸乃云、溈山笑中元來有刀、還端的也無、師云、誰知席帽下、元是昔愁人、僧云、上來一一蒙指示、向上宗乘又如何、師云、拄杖頭上挑日月、僧云、不行尊貴路、爭踏上頭關、便禮拜、師云、好看腳下。

乃拈拄杖卓一下云、有人似者箇、觸處築著磕著、有人不似者箇、隨物七穿八穴、且道、誵訛在甚處、良久云、滿地落花春已過、綠陰空鎖舊莓苔、又卓一下。

佛誕生上堂、僧問、世尊初降生、指天指地、周行七步云、天上天下唯我獨尊、意旨如何、師云、日出乾坤輝、僧云、雲門云、我當初若見、一棒打殺與狗子喫、貴國天下太平、端的在那裏、師云、知恩方解報恩、僧云、雪竇云、我當初若見、便與掀倒禪床、又作麼生、師云、鬼爭漆桶、僧云、只如今朝諸方出手、灌沐金軀、與二大老用處、是同是別、師云、千年田八百主、僧云、千峰勢到岳邊止、萬派聲歸海上消、便禮拜、師云、也何妨。

乃云、將三界二十八天作箇佛頭、將金輪水際作箇佛腳、將四大州作箇佛身、將一切情與無情、作箇佛脾胃肝膽、如是則諸人盡在箇佛肚裏、起坐經行、若也在肚裏、爭能灌沐淨智莊嚴功德身、若道灌沐無妨、向甚處安身立命、擊拂子下座。

結夏小參、僧問、烏兎如馳、聖制已臨、正當恁麼時、請師提唱、師云、好只與麼去、僧云、如何是圓覺伽藍、師云、逼塞虛空、僧云、如何是平等性智、師云、月白風清、僧云、畢竟如何安居、師云、直饒恁麼也未眞、僧云、者箇則且置、和尚莫別有結制底一句麼、師云、前三三後三三、僧云、可謂石長無根樹、山藏不動雲、便禮拜、師云、道得始得。

乃云、古來有一段事、常時明明如日、向之隔千里、背之在目前、得而難收、迫而難親、所以西天於三月九旬中、聚集四聖六凡、以大圓覺爲我伽藍、身心安居平等性智、寶山今夏也隨例、結箇聖制、不見粥飯精麤、不分茶湯清濁、隨根機忍耐、任肚皮大小、整頓手腳、護惜黑柱、只是許堆堆地、不許成就慧身、何故、卓拄杖云、鼻孔元來掛上脣。

復舉、古德道、若是全舉揚宗乘、儞等諸人向甚處領會、所以古今獨露、隱顯無方、師拈云、古德大似王母獻七枚神桃、乘彩雲之聳、和明月而去也。

次日上堂、僧問、一峰雲片片、雙澗水潺潺、莫是二千年前消息麼、師云、認著卻不是、進云、古者道、護生須是殺、殺盡始安居、會得箇中意、鐵船水上浮、意旨如何、師云、能有幾箇、進云、如何是護生須是殺、師云、何必恁麼、進云、如何是殺盡始安居、師云、一向無孔鐵鎚、進云、如何是箇中意、師云、豈獨孤負、進云、鐵船水上浮、又作麼生、師云、下載清風付與誰、進云、只如朝行西天、暮歸東土、還有禁足底道理也無、師云、路途雖好、不如在家、進云、恁麼則十洲三島鶴乾坤、四海

五湖龍世界、師云、分身兩處看。

乃云、經行及坐臥、常在於其中、既而如是、今朝因甚別立規矩、禁足護生、還會麼、良久云、以大圓覺爲我伽藍、身心安居平等性智。

謝首座書記藏主秉拂上堂、拈拄杖卓一下云、風穴云、若立一塵家國興盛、野老頤蹙雪竇頌云、野老從教不展眉、且圖家國立雄基、山僧要與拂子知、其人不如雲門兒孫、有三句體調、又卓拄杖下座。

五月旦雨下上堂、霏霏梅雨洒危層、五月山房冷似冰、雪竇老老大大、向諸人面前翻筋斗、若人見得、拖泥帶水。

端午上堂、僧問、和尚從來應箇節、箇時作麼生與人看、師云、不肯爲儞、進云、既能恁麼會去、一生參學事了畢也無、師云、合取骨髓著、進云、記得、文殊令善財採藥、善財云、盡大地無有不是藥者、此意如何、師云、相去多少、進云、文殊云、是藥採將來、善財拈一莖草度與文殊、意在那裏、師云、少一時不生、剩一時不死、進云、大家鐵團圞、無有一箇病、未審文殊爲誰要藥、師云、專爲七佛、進云、善財因甚將錯就錯、師云、家無小使不成君子、進云、和尚與麼答話、爲是與文殊善財雪屈、爲復是古今一路行、師云、岸谷無風徒勞展掌、進云、若不因今日節、爭知作家體裁、便禮拜、師云、吽。

乃云、今朝是五月五、不用桃符白澤、只諷誦佛祖至靈大神咒、消滅一切障難、成熟一切吉事、且道、那箇神咒、振威喝一喝。

上堂、僧問、今朝爲法大衆雲集、未審和尚說箇什麼法、師云、家家觀世音、進云、正與麼時、學人如何得領略去、師云、拈起簸箕別處舂、進云、記得、僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、此意如何、師云、穿過髑髏裏、進云、一切蠢動含靈皆有佛性、爲甚狗子還無佛性、州云、爲他有業識性故、作麼生辨端的、師云、藏身露影、進云、上來分明蒙指示、今日有問狗子還有佛性也無、和尚如何祇對、師云、去非儞境界、進云、恁麼則昔日趙州、今日和尚、便禮拜、師云、能知始得。

乃云、久雨已晴、處處曬眼皮草、曬眼皮草、卽且致、明見天日一句、試道來看、若無人道得、山僧今日失利、擊拂子下座。

半夏上堂、僧問、結制已過半、九夏炎炎日、木人汗不輟、如何生清涼、師云、脫却鶴臭布衫、進云、與麼則六月賣松風、人間恐無價、師云、箇箇秘在形山、進云、記得龐居士參問江西馬祖云、不與萬法爲侶者、是什麼人、意旨作麼生、師云、咽喉出氣得也未、進云、祖云、待汝一口吸盡西江水、卽向汝道、意在那裏、師云、騎聲入耳、進云、居士於言下頓領旨、還端的也無、師云、早知落第二機、進云、可謂親言出親口、師云、且退且退。

乃云、約日月知晝夜、約晝夜知時節、箇箇常情也、只如天地未剖、文彩未彰已前、還喚今日作半夏、卽是不作半夏、卽是、卓拄杖云、六月不熱五穀不結。

上堂、僧問、南山起雲、北山下雨、此中親切處、願聽舉揚、師云、千里萬里轉霧霈、進云、恁麼則把斷要津去也、師云、打水魚頭痛、進云、仰山謂香嚴云、如來禪許師兄會、祖師禪未夢見在、未審意在那裏、師云、蠅何見血、進云、如何是如來禪、師云、靜處娑婆訶、進云、如何是祖師禪、師云、鐵

輪碎石、進云、如來禪與祖師禪相去多少、師云、湘之南潭之北、進云、者箇則且置、作麼生是和尚禪、師云、大坐須彌頂上、進云、不因樵子徑、爭到葛洪家、便禮拜、師便喝。

乃橫拄杖云、若從者裏便去、山河大地齊稽顙、卓拄杖一下云、若從者裏便去、森羅萬象盡放光、又畫一畫云、從者裏去底亦作麼生、請各各歸寮舍、自摸索看。

七月旦上堂、僧問、落梧一葉天下報秋、箇中端的若爲相酬、師云、釋迦彌勒退後三千、進云、今日方知、眉毛橫眼上、口稜在鼻下、師云、認驢鞍橋作阿爺下頷、進云、記得、雲門上堂云、一言纔舉千差同轍、該括微塵、猶是化門之說、若是衲僧合作麼生、意在那裏、師云、擔水河頭賣、進云、若將祖意佛意、這裏商量、曹溪一路平沉、還有人道得麼、道得底出來、意旨作麼生、師云、河裏失錢、河裏撈、進云、時有僧問、如何是超佛越祖之談、門云、餬餅、如何辨端的、師云、胡孫繫露柱、進云、僧云、這箇有什麼交涉、門云、酌然有什麼交涉、此意如何、師云、和贓納欵、進云、古人底且置、不容祖意佛意、乞師指出、曹溪一路、師云、壁立萬仞、進云、既放下佛祖、猶是爭奈用六祖何、師云、且去、圓前語、進云、不因天目近、爭識斗牛寒、師云、噫。

乃云、暑氣未去、嫩涼初生、秋意未深、白雲清淡、德山臨際爲甚平地喫咬、會麼、良久云、蘇武持漢節而歸。

解夏小參、僧問、聖制已圓、秋風滿面、正與麼時、如何履踐、師云、何不別問、僧云、恁麼則有意氣時添意氣、不風流處也風流、師云、南海波斯鼻孔麤、僧云、記得、三聖問雪峰、透網金鱗以何爲食、意旨如何、師云、到即不點、僧云、峰云、待汝出網來向汝道、又作麼生、師云、點即不到、僧云、聖云、一千五百人善知識、話頭也不識、意在那裏、師云、無限村僧、模之爲則、僧云、峰云、老僧住持事繁、如何委悉、師云、鴆羽落水、魚皆死、僧云、若有人問透網金鱗以何爲食、未審和尚作麼生祗對、師云、呂望權任公犧、僧云、恁麼則學人今日小出大遇、便禮拜、師云、誣人即得。

乃云、四月十五、一衆無端投入牛角、東西不辨南北不分、七月十五、諸人快活、解開布袋、脚頭脚底、通霄有路、萬里無寸草、抖擻多年穿破衲、出門便是草、襤褸一半逐雲飛、有佛處不得住、舞無卓錐地、無佛處急走過、禹無十戶聚、直得把住放行、觸處現前、擡搦褒貶、隨物作主、正與麼時、龍寶別有賞勞、在擊拂子云、西風一陣來、落葉兩三片。

復舉五祖演和尚云、牛過窓櫺、頭角四蹄全出、尾巴爲甚出不得、師拈云、五祖老子、只見其出底、不見其不出底、何故、何官無私、何水無魚。

次日上堂、僧問、三月安居、羚羊掛角、九夏自恣、猛虎出林、正與麼時如何得不欺去、師云、付與甚人、僧云、洞山云、兄弟初秋夏末、直須向萬里無寸草處去、意旨作麼生、師云、餓狗嚙枯骸、僧云、石霜云、何不道出門便是草、又作麼生、師云、把髻投衙、僧云、洞山聞云、大唐國裏能有幾人、意在那裏、師云、也須遣人點檢、僧云、古德垂示且置、和尚如何教人去、師云、下坡不走、快便難逢、僧云、青山綠水草鞋底、明月清風拄杖頭、師云、錯。

乃云、會則途中受用、移身不移步、不會則世諦流布、移步不移身、即便恁麼去、未到山僧行履處、何也、雨來層翠消殘暑、風過林頭滿院涼。

謝兩班侍者上堂、登山須倚杖、渡海須上船、若要扶竪法門、必須得有班序之襟、溫柔一手擡

剛硬兩拳搦始得既得其人後亦作麼生良久云獻佛不在香多。

上堂橫拄杖云山僧昨夜三更入睡睡三昧者箇拄杖子趂前言曰某甲會些子禪要且來日初一說一句子布施諸人去伏望和尚慈悲莫奪此願以爲幸山僧云也何妨儞作麼生說拄杖子云八月一日天中節赤口白舌隨時滅山僧云阿儞實好知言只以此一句子食輪法輪並轉佛道祖道共昌佗便禮拜去諸人且道喚作山僧說卽是喚作拄杖子說卽是若作拄杖子說山僧今朝說若作山僧說拄杖子昨夜說若能定當雲歸碧洞露滴蘭蕊其如未然卓拄杖一下。

中秋上堂尋常驚怪禪和家及乎到中秋節卜浮雲於陰晴强貪觀天上月問著其中吟眸句十箇有五雙便道月皎夜星稀是惟才陞龍寶堂也未得入龍寶室何故滿船明月一竿竹家在五湖歸去來。

上堂去聖時遙人多懈怠逆則生瞋順則生愛且道作麼生是無懈怠無瞋愛處嶺上白雲巖前綠水。

重九上堂一句新一句新汾陽一句又重新靖節相逢不相識重陽九日菊花新。

開爐上堂僧問法昌今日開爐行脚僧無一箇聚泥像而說法山川改觀還莫怪力亂神麼師云一點水墨兩處作龍進云丹霞燒木佛有什麼憑據師云趙州東院西進云龍寶今朝開爐不聚泥像不燒木佛行脚僧有幾箇師云普天普地進云轉凡夫爲賢聖抑賢聖爲凡夫則不無和尚離者二途請師端的師云將知不圓前話進云潙山向火次問仰山終日向火因甚無暖氣仰作向火勢潙云子只得物體能所未在意旨作麼生師云要家醜揚外進云仰云某甲只如此和尚作麼生潙亦作向火勢仰云和尚只得物體能所未在潙云如是如是如何甄別去也師云錯墮此機進云擧世盡言父子唱和兩口無一舌師云龍象蹴蹈非驢所堪進云若有人問終日向火因甚無暖氣和尚對佗作麼生道師云炙手助熱進云和尚與古人莫止一般也無師云大海若知足百川應倒流進云與麼則三冬古木花九夏寒嵓雪師云生薑終不改辣進云覓火和煙得擔泉帶月歸便禮拜師云叱。

乃云人人有箇火種只是深埋冷灰用之不得今朝風頭稍硬且爲諸人撥起以拄杖畫一畫云會與不會各各歸煖處商量。

上堂昨日有人面前打筋斗今日有人背後作問訊似親非親似疎非疎儞等諸人作麼生辨別。

冬至小參僧問覿面相見不在多端龍蛇易辨祇子難瞞如何是祇子端的眼師云禾山鼓雪峰毬進云機輪轉處作者猶迷師云切忌上頭上面進云記得慈明今日出牓書三圓九卦云若人會得不離四威儀中意在那裏師云頂上無骨頷下有鬚進云首座一見云和尚今晚放參又作麼生師云阿誰知此節進云千峰勢到嶽邊止萬派聲歸海上消便禮拜師云好領取著。

乃云徧界不曾藏處方是時人難躲避時節恰似半夜放烏鷄左之右之向甚處辨明直得陰去陽來雪寒氷冷吾家大用觸處繁興豈敢逐洞山圖熱鬧底之狂解雖然如是諸人且道貴

其耳、孰與貴其眼、卓拄杖一下。

次日上堂、否極泰來、坎去離到底事、彼彼一齊用得最妙、只有無陰陽之地、少人踏著、忽然踏著、不妨和雪踏泥。

謝秉拂上堂、了臨濟賓主句子、續香嚴瀑布重吟、看來佗是曠漢、也有巴鼻也有來由、且一代藏教之中、還有者箇時節麼、卓拄杖云、我現寶塔當爲證明。

上堂、僧問、學人見山不言山、見水不言水時如何、師云、三步可易、五步應難、進云、和尚只恁麼、何異諸方、師云、頑石瓦礫問之必汗、進云、一句不進、兩句不退、有誰等閑籠罩我來、師云、汨梁下尾生、奚言抱道士、進云、若不是遇老師、幾乎賺過一生、便禮拜、師云、直饒實與麼、放過卽不可。

乃云、一滴水一滴凍、曹溪路上少相逢、寒山拍掌拾得笑、南山燒炭北山紅、擊拂子下座。

佛成道上堂、僧問、菩薩今夜成道、號之名如來、只如見明星、未審明什麼邊事、師云、青寥寥白的的、進云、莫是佗一翳在眼、空花亂墜麼、師云、娘生幾箇舌頭、進云、學人若向此去、和尚還許也無、師云、山僧不如拄杖、進云、因甚肯昔日不肯今日、師云、只爲兩頭走、進云、若無此語、爭辨老子端的、師云、我被儞辨倒、進云、心不負人、面無慙色、便禮拜、師云、古今惟多。

乃云、澄月映徹、衆星燦朗、箇中無釋迦、阿誰當成道、卓拄杖云、屎上更加尖。

上堂、臘雪連天白、寒風逼戶寒、失却口不問儞、拈得鼻孔來看、如無人拈得、擊拂子云、忽然撞著來時路、始覺從前被眼瞞。

除夜小參、僧問、舊年送不去、新歲迎不來、新舊本無情、去來豈可擬、師云、我且愛儞向下閣頭上行、進云、記得僧問香林、萬頃荒田、是誰爲主、林云、看看臘月盡意旨作麼生、師云、鐵券難分付、進云、來日定是大年朝、有何祥瑞、師云、家家爆竹、處處燒錢。

乃云、日日東出、日日西入、一出一入自循環、逗到臘月三十日、村裏打祭鬼鼓、山塢唱樂神歌、人人帶淳素之風、箇箇稱太平之時、況衲僧家半夜見日頭、阿誰辨新舊、只管大坐當軒、眼眼相照分歲、雖然荒涼不烹鳳髓、其中清味勝佗金鑾、何故擊拂子云、雪寒北嶺梅香南枝。

復舉、雪竇拈拄杖云、頭上是天、脚下是地、眼前綠水、背靠青山、衲僧道我會也、忽騎驢入爾鼻孔裏、牽牛入爾眼睛中、又作麼生商量、師云、當年若有人出衆喚老和尚、待雪竇才擡頭、道更詣函丈、便歸衆去、直饒以方投規、自然函蓋相應。

正旦上堂、僧問、元正啓祚、萬物咸新、好箇時節、願聞法要、師云、相逢共賀萬年慶、進云、喚作新年頭事耶、亦是自己消息、師云、一有多種、二無兩般、進云、與麼則大德播四海、龍寶滿一天、便禮拜、師云、闔國咸知。

乃云、日暖風和、鳥啼花笑、大機與大用繁興、於家家、何也、卓拄杖云、月建首寅、斗柄指戌。

元宵雪下上堂、拈拄杖、卓一下云、一燈百千燈、明暗雙雙底時節、又卓一下云、百千燈一燈、夜深共看千巖雪、所以道、有時前照後用、有時後用前照、有時照用同時、又卓一下云、且道、是照是用、各各自辨別。

上堂、龍寶無伎倆、只是不喪目前機、忽得氷消雪霽、自然見梅腮柳面奇、喚之以作禪道佛法、

處處春山應聽子規參。

佛涅槃上堂、僧問、世尊云、我若謂滅度、非我弟子、我若謂不滅度、亦非弟子、畢竟如何領略去也、師云、醉後郎當愁殺人、僧云、與麼則莫今日卽有、明日卽無麼、師云、知恩者少、負恩者多、僧提起坐具云、學人只喚者箇作世尊、和尚喚者箇爲是有爲復是無、師云、狗啣赦書。

乃云、釋迦老子、於奇花茂葉之中、藏得唯一堅密身、名之爲涅槃眞常樂、若人向一榮一枯處相見、何如波旬舞袖長、雖然迦葉、豈不是偸羅國人乎。

佛誕生上堂、毗嵐園中無憂樹下、金蓮生地丘墟平坦、因甚天台山高華頂峰低、會得我今灌沐諸如來、不會淨智莊嚴功德聚、擊拂子下座。

結夏小參、二千年前、靈山百萬大衆、見地只爲解打野榧、世尊拈出一箇膠盆子、箇箇刺嚬打入、澄瀘身心、成熟慧身、謂之禁足護生、剋期取證、二千年後、中華扶桑、類例攀來、彌繁彌昌、而觀時之所卜、嫌杓頭窄、擇炊巾廣、自古自今、遐邇自別、龍寶英傑之徒、九夏道聚之義、恰雖似勺水參龍、自是有一件透不過事、不同小小、纔進前退後、墮坑落塹、且道、是那一件事、卓拄杖一下。

復擧、洞山因僧問、寒暑到來、如何回避、山云、何不向無寒暑處去、僧云、如何是無寒暑處、山云、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨、師云、洞山老漢小慈妨大慈、若是德山臨濟門下、終不可認驢鞍橋作阿爺下頷。

次日上堂、僧問、猿抱子歸青嶂後、鳥啣花落碧巖前、伊有結制安居底道理也無、師云、豈不見道、以大圓覺爲我伽藍、進云、恁麼則頭頭是圓覺伽藍、物物卽平等性智、師云、直饒與麼去、作蛤蟆之子、進云、記得、雲門垂語云、十五日已前不問儞、十五日已後道將一句來、意旨作麼生、師云、半幅全封、進云、正當十五日、請師垂指示、師云、月白風淸、進云、只如道日日是好日、莫有坐斷千差底麼、師云、韶陽得儞不墮風規、進云、此是古人爲人處、不涉古今、如何商量、師云、八十翁翁拄杖行、進云、千峰勢到嶽邊止、萬派聲歸海上消、便禮拜、師云、親會始得。

乃云、龍寶有百味珍羞、尋常不敢拈出之、今日方是結制、須布施諸人去、以之爲休糧方、以願九句空疎、喝一喝云、切忌崑崙呑。

謝兼拂夏齋上堂、天有三光、其明高遠、以被群機、地有五味、其德廣大、以保萬有、諸人要知其功所歸麼、良久云、禾山打鼓、雪峰輥毬。

上堂、僧問、目前無法、門外車馬闐浩浩、意在目前、屋頭松竹冷青青、師云、時節難逢、進云、記得雲門示衆云、拄杖子化爲龍、呑却乾坤了也、山河大地、何處得來、意在那裏、師云、莫教皺皺鱗鱗、進云、已呑却乾坤了也、拄杖子爲甚落在和尚手裏、師云、物歸有主、進云、昔日雲門與今日和尚相去多少、師云、出頭天外看、誰是我般人、進云、始知一條拄杖兩人扶、師云、誣人之罪。

乃拈拄杖卓一下云、恁麼恁麼、如空裏打橛、又卓一下云、不恁麼不恁麼、似水中捉月、要兩處收功、天晴日頭出、又卓一下。

重午上堂、僧問、文殊令善財採藥、財云、盡大地無不是藥者、此意如何、師云、崑崙嚼生鐵、僧云善財拈一莖草度與文殊、殊云、此藥亦能殺人、亦能活人、拈驗在那裏、師云、黃蘗樹上生木蜜、

僧云、學人通身是病、作麼生醫、師云、病得須愈、僧云、直饒與麼猶墮在圓覺四病、作麼生得獨脫無依去、師云、早知、儞不能病得、僧云、快哉快哉、今朝天中節、時清道泰、門安戶靜、師云、許儞一句相當去。

乃云、今日端午節、諸人直須明得明德、消殞天行百怪、除却佛病祖病、蓋只是所以妖不勝德、且道、如何是明德、擊拂子云、歸依佛法僧。

半夏上堂、僧問、九旬已過半、雲山翠色深、現成公案、無處回避、此景此時、願聞法要、師云、放儞三十棒、進云、古人有一則因緣、許學人咨參也無、師云、佛不奪衆生願、進云、臨濟因半夏上黃檗見和尚看經、濟云、我將謂是箇人、元來是掊黑豆老和尚、意旨作麼生、師云、水上推胡蘆子、進云、濟住數日、乃辭去、檗云、汝破夏來、不終夏去、未審如何辨端的、師云、殷勤送別瀟湘岸、進云、濟云、某甲暫來禮拜和尚、檗遂打趂令去、是什麼心行、師云、令不虛行、進云、濟行數里、疑此事、却回終夏、意在那裏、師云、古今能有幾人、進云、一人在途中、不離家舍、一人在家舍、不離途中、是甚麼道理、師云、鐵牛擎出黃金角、進云、與麼則達磨不來東土、二祖不行西天、師云、能知者須能用。

乃云、結制已過半、水牯牛鼻孔數寸長、諸人只與麼去、便知二六時中了不走作、儻或離跂攘臂、無桁楊可用、參。

上堂、僧問、六月十五、天下毒熱、一機一境、盡落今時、不涉唇吻、如何通津、師云、退後退後、進云、浮瓜沉李、積雪爲山、見成公案、迥絕多端、豈不是清涼世界、師云、心不負人、面無慙色、速道速道、進云、黃龍有三關語、還許咨參也無、師云、劈開華嶽連天色、進云、我手何似佛手、意旨如何、師云、開拳作掌、進云、我脚何似驢脚、又作麼生、師云、屐齒印蒼苔、進云、如何是學人生緣處、師云、崎嶇峰頭神禹碑、進云、和尚一一祇對的的分明、只箇三關爲一爲三、師云、謝儞答話、進云、與麼則會三成一易、會一成三難、師云、將謂問事漢、進云、恩大難酬、便禮拜、師云、錯。

乃橫拄杖云、炎炎六月紛紛雪、下只箇好時節、覿著生眼花、雖然如是、卓拄杖云、不因射鴨手、誰識李將軍。

七月旦上堂、僧問、暑雲散空、涼氣滴秋、好箇時節、願聞提唱、師云、劈腹剜心、進云、便恁麼去時如何、師云、車不橫推、進云、向上全提鐵壁銀山、放開線路墮坑落塹、奪、師云、直須踏上頭關、進云、乾峰示衆云、法身有三種病二種光、一一透得始是穩坐、意在那裏、師云、不喜舊路逢人、進云、雲門出衆云、庵內人因甚不見庵外事、又作麼生、師云、爲己鎖者多、爲佗鎖者少、進云、不因夜來鴈、爭見海門秋、便禮拜、師云、好看好看。

乃云、雨洗炎威、秋意清、滴風到梧桐、擊蒙最的的人焉度哉、閃電之機轟霹靂、擊禪床一拂子。

解夏小參、僧問、秋風颯颯、遍界清涼、時節已至、其理自彰、此節此景如何是其理、師云、三十年後此話大行、進云、與麼則現成公案、迥絕商量、師云、依稀似曲纔堪聽、進云、記得、僧問雲門、初秋夏末、前程忽有人問、如何祇對、門云、大衆退後、意旨作麼生、師云、眼裏無筋一世貧、進云、僧云、過在什麼處、門云、還我九十日飯錢來、意在那裏、師云、對午彈琴、進云、恁麼時節、若有人問、

前程事、和尙作麼生指示佗、師云、一雙草鞋兩文錢、進云、不行尊貴路、爭踏上頭關、便禮拜、師云且看脚下。

乃云、立制期滿殿最功齊、取證有則賞勞時至、何妨人人上朗風烏騰、箇箇跨虛無神遊、踏著不瞋、築著不碍、好箇道伴誰不交肩、雖然如是、出門三步、撞著箇十字街頭無向背底、不知將那箇一句子辨得佗端的、若辨不得、卓拄杖云、勸君盡此一杯酒、西出陽關無故人。

復舉、大隋因僧問、金鴈附書、爲什麼不露翼、隋云、不通虛信、師拈云、大隋古佛雖善其機、及乎打鐶扣枷、恐無此作、若有人問、山僧金鴈附書爲什麼不露翼、只對佗道、勘破了也、且道、與古人是同是別、具眼禪流、請辨緇素看。

次日上堂、僧問、祐僧家牙如劍樹、眼似銅鈴、四月十五、結佗不得、七月十五、解他不得、畢竟如何指南一路、師云、謝答話、進云、恁麼則西天此土草鞋底、日月星辰拄杖頭、師云、人心似等閑、進云、記得翠巖示衆云、一夏爲兄弟、東語西話、看翠巖眉毛在麼、此意如何、師云、迥想化下有人、進云、保福云、作賊人心虛、還端的也無、師云、豈不信道、進云、長慶云、生也、試委悉看、師云、淨手裝香、進云、雲門云、關、如何透得、師云、洎乎鐶斷、進云、此三大老各出隻手、扶樹翠巖、用處莫止一般麼、師云、官差不自由、進云、虛堂老子道、只解同心不能同志、又作麼生、師云、吉凶不上卦、進云、寶山今夏與兄弟東語西話、眉毛拄梵天、與翠巖相去多少、師云、嶽秀靈芝異、進云、一句迥超千聖外、松蘿不與月輪齊、便禮拜、師云、咦。

乃橫拄杖云、有佛處不得住、無佛處急走過、卓拄杖一下云、莫孤負趙州老漢、不然靜處婆婆訶。

上堂、卓拄杖云、若識得者箇、三世諸佛呵之、若不識得者箇、歷代祖師叱之、何也、風從八月涼、靠拄杖下座。

中秋上堂、拈拄杖卓一下云、昨夜十四有此月、今宵十五有此月、昨夜世人嫌此月、此月猶以有所缺、今宵世人賞此月、此月圓以無所缺、此月無有圓缺心、世人將圓缺分別、分別取相不能泯、隨造隨作自生滅、若要得遠離生滅、無相光中須休歇、且道、無相光中作麼生休歇、擲下拄杖下座。

上堂、塞鴈度翠微、巖葉落庭際、幾回老瞿曇、爲償脚頭債、雖然沒交涉、更有人、眼裏著須彌去在。

重陽謝海崖義上堂、九日東籬下、菊花賞酒仙、汨羅獨醒者、過在求英賢、何故、豈止麒麟登海嶼、須知義出自豐年、擊拂子一下。

開爐上堂、衆、爲山問仰山、終日向火、爲甚無暖氣、仰山作向火勢、師云、爲仰父子、不妨冷處著、把火、寶山門下只要箇箇暖氣相洽、何故、拈起死柴頭、且向無烟火。

上堂、拈拄杖云、彌勒眞彌勒、分身千百億、卓拄杖云、時時示時人、時人自不識、靠拄杖下座。

十一月旦、謝英都寺上堂、寒風匝地、寒鴈橫空、辨玉正按磨、塼旁提、頭頭都顯露、物物總現成、何故、蓋是英靈衲子、只爲向事上見。

因雪上堂、少林立鷲山坐、爲相逢不相知、趙老臥龐公指、只要知而故犯、若是我這裏、直饒銀

椀裏盛將來、也是老鼠引生薑、參。

冬至小參、僧問、冬至前後、砂飛石走、頭頭合轍、處處逢原、學人上來、請師指的、師云、覿機無改路、進云、與麼則石笋抽枝、鐵樹生花、師云、大家好看、進云、只如諸方今夜堆盤滿飣、是同是別、師云、黃金自有黃金價、進云、德山小參不答話、有問話者三十棒、此意如何、師云、儞若來得、棒頭有眼、進云、趙州小參要答話、有問話者致將一問來、又作麼生、師云、不是寃家不聚頭、進云、和尚小參、要答話不要答話、師云、不是與人難共聚、進云、畢竟二大老用處與和尚用處、莫止一般麼、師云、莫粘作一堆、進云、學人今夜小出大遇、便禮拜、師云、好去好去。

乃云、六爻既窮、陰魔自殄、一陽來復、吾道大亨、直得釋迦老子鼻孔遼天、樓至如來脚跟踏地、驀忽相逢合掌擎拳、互相慶賀道、亞歲令節、萬物重新、未徹者徹、未到者到、伏惟人人起居萬福、大衆若聽得者箇說話、青色光明雲、若擧得者箇說話、白色光明雲、且道、兩處俱通底亦作麼生、擊拂子云、來日定是書雲節。

復擧、僧問雲門、如何是法身、門云、六不收、拈云、諸人一向與麼領、相逢不出手、其或未然、前頭更有雪在。

次日上堂、拈拄杖云、只箇片田地、四時不消長、古今爲如此、今古一陽生、卓拄杖一下。

因雪上堂、諸人未來者裏、記得山僧爲人句子、及乎到來者裏、問著箇箇忘却、因甚如此、良久云、只因雪上加霜。

上堂、巖寶宵寒擁山皷、月高枯木霜禽睡、明覺雖是爲一代之龍門、爭奈坐在無事甲裏、何也、良久云、臘月苦寒風雪吹、急急抽身已是遲、

除夜小參、僧問、新底不知舊底已往、舊底不知新底已來、新舊不相知、物物正對偶、還端的也無、師云、三十三天、二十八宿、進云、如向爆竹未鳴已前、更開一條活路、又作麼生、師云、山門頭合掌、進云、如何是轉身處、師云、佛殿裏燒香、進云、昔日北禪烹露地白牛、分歲、和尚今夜將什麼與諸人分歲、師云、細嚼似蜜甘、進云、恁麼則大衆飽德去也、便禮拜、師云、也好金毛獅子、乃云、舊年今夜去、去去都是舊曆日、新年今宵來、來來齊是新鮮年、交頭結尾、家家生涯是別、因緣時節、處處大用現前、便見龍寶山頂、仰之無際、大德門下、瞻之無垠、豈曾乎時清道泰、自然得和氣靄然、正當恁麼時、與諸人保愛底一句、作麼生道、擊拂子云、臘雪連天白、春風逼戶寒。

復擧、香林因僧問、萬頃荒田、是誰爲主、林云、看看臘月盡、山僧不然、若有人、致此問來、只對佗道、大坐當軒、且道、與古人是同是別、具眼禪流、請分緇素。

歲旦上堂、僧問、鏡清因僧問、新年頭還有佛法也無、清云、有、此意如何、師云、天高萬象正、進云、明敎又答無、有優劣也無、師云、海闊百川朝、進云、僧云、如何是新年頭佛法、清云、元正啓祚、萬物咸新、如何委悉、師云、南地竹、北地木、進云、鏡清道有、明敎道無、和尚又作麼生、師云、有意氣時添意氣、得風流處也風流。

乃拈拄杖云、鳳曆開元日、王春肇始時、祥雲翻空、瑞雪滿地、發揮佛祖大機、成熟人天性命、諸人盡是此中人、不妨隨物作主、隨處納祐、卓拄杖一下。

上元上堂、僧問、人間燈天上月、有明有暗、有圓有缺、請師端的、師云、萬里一條鐵、進云、龍潭吹滅紙燭、德山大悟、未審見處在明中在暗中、師云、狗啣赦書、進云、與麼則發光輝去也、師云、阿誰不承恩。

乃云、朶朶放金蓮、重重懸珠網、紙撚無油底、莫擊壁偷光、擊拂子下座。

佛涅槃上堂、僧問、謂滅非弟子、謂不滅非弟子、如何見得爲佛弟子、師云、杜鵑啼處花猥藉、進云、今日則有、明日則無、今日既道有、向何處見世尊、師云、一任問山僧、進云、與麼則明日何無、師云、不妨答阿儞、進云、四衆各啼泣、雲門爲甚麼道打殺、師云、爲狗守其主、進云、愛之欲其生、惡之欲其死、和尚又作麼生、師云、常用其機、進云、恩大難酬、便禮拜、師云、吽。

乃云、槨出雙趺、如日明、人間天上詎藏韜、時流若具波旬眼、舞袖猶須在柳梢、喝一喝下座。

三月半、遊山回、謝首座、維那、幷龍翔塔主上堂、擧長沙一日遊山歸門首、首座問、和尚什麼處去來、沙云、遊山來、座云、到什麼處來、沙云、始隨芳草去、又逐落花回、座云、大似春意、沙云、也勝秋露滴芙蕖、師云、奇哉怪哉、兩口一舌、山僧數日來遊山回來、首座不必要問、山僧不必誣佗、不是無其卜意、只愼綱令有人、何故、爲祥爲瑞、龍驟鳳翔。

上堂、竪起拂子云、西天四七、東土二三、盡向龍寶拂子頭上打筋斗、諸人還見麼、若也見得、不妨雨中見杲日、其若未然、擊拂子云、德山羅漢。

佛誕生上堂、僧問、老胡今日出母胎、未審本來面目、如何、師云、東山西嶺青、僧云、恁麼則雨洗風磨自鮮新、一盆香水爲誰潑、師云、將此深心奉塵刹、是則名爲報佛恩、僧云、世尊下生、牽枝引蔓、如何是直截根源一句、師云、薰風自南來、殿閣生微凉、僧提起坐具云、爭奈有者箇、師云、有則有、到儞無、僧放下坐具云、還端的也無、師云、三十年後、面熱汗出。

乃云、黃金讓采、琉璃凝翠、龍寶手裏有杓柄、不同當日溫凉水、擊拂子一下。

結夏小參、僧問、聲前一句不墮常機、禁足護生、當圖何事、師云、鳳非竹實而不食、非醴泉而不飲、進云、西天蠟人冰、東土鐵彈子、束之高閣、和尚今夏一百二十日、以何爲驗、師云、僧堂裏佛殿前、進云、望見資福刹竿便回、脚跟下好與三十、此意如何、師云、車不橫推、進云、望見雪峰便參主事、又作麼生、師云、庭禽養勇終待驚人、進云、畢竟還有結制安居底時節麼、師云、鐵丸無縫罅、進云、和尚今日小參、爲守舊規、別有新條耶、師云、崑崙劈不開。

乃云、怛薩阿竭、有廣大規範、二千年前爲百萬鳳毛、後代兒孫不忘基本、力之以呈箇漆器、苟得其人、則不踞圓覺伽藍、不恭平等性智、手碎鐵山、足跨巨海、盡格外玄機、用衲僧作略、未爲分外、若也有箇孜孜兢兢底、漢長期一百二十日內、眼眸不謾開、脚板不謾踏、以阡陌爲井塹、以聚落爲茅坑、函蓋相應、方圓相投、乃是列刹攸撰、吾門優曹也、敢問諸人、此兩種禪和、那箇親那箇疎、擊拂子云、道著道不著、且於三條椽下摸索。

復擧、雲門因僧問、如何是清淨法身、門云、花藥欄、僧云、便恁麼去時如何、門云、金毛獅子、師云、者僧若是作禮而去、須見雲門出人全機、雖然如是、黃金自有黃金價、終不和沙賣與人。

次日上堂、僧問、竺土老子恐他害命、爲渠結制、謂之禁足、豈非箇一著弄巧成拙、師云、鳳林吒之、進云、須彌那畔大洋海底、一時走徧、當有此漢出來、和尚如何敎他制禁、師云、且坐喫茶、進

云、記得、雪峰領衆到浮江、問云、欲寄二百僧過夏、得否、浮江以拄杖畫一畫云、著不得、還端的也無、師云、寃家結得、進云、一畫底、尊師云、舌頭拖地、進云、著不得、又作麽生、師云、勞力不少、進云、有人道、寄二百衆過夏、未審和尚容他也無、師云、莫向淨地上屙、進云、如何是和尚一句子、師云、退後退後。

乃云、衲僧家氣宇如王、祖佛俱不容、今朝因甚坐在二千年前影子裏、卓拄杖云、鑿池不待月、池成月自來。

端午上堂、拈拄杖云、文殊要藥、財善採藥、雖通其機、爭似我這裏箇箇大安樂、卓拄杖云、切忌、求無病藥、靠拄杖下座。

上堂、得之而蹉過、不得之而不及、雖然如是、三十年後、此語大行始得、以拂子擊禪床下座。

半夏上堂、今朝相逢等閑問過、人人解道、今日半夏、阿呵呵阿呵呵、山僧與麽道、是褒諸人、是貶諸人、卓拄杖、一下云、六月賣松風、人間恐無價。

上堂、舉、菩薩於樹下而坐、天龍八部、梵釋四王、悉以歡喜於空中踊躍讚嘆、時第六天魔王、宮殿自然動搖、心大懊惱、乃念言、沙門瞿曇、今在樹下、端坐思惟、不久廣度一切、超越我境界、今往壞亂之、乃俱無量眷屬圍繞菩薩、發大惡聲、震動天地、菩薩心定顏無異相、怡然不動、不驚猶如獅子處鹿群、於是諸魔自然散壞、師云、大衆、世尊降魔不無、只是用如來禪故、其力不全、吾衲僧家、用祖師禪降伏衆魔、亦作麽生、以拂子擊禪床一下云、看看、諸魔盡膽裂、道光忽超昇。

上堂、至道無難、唯嫌揀擇、忽拈拄杖卓一下云、者箇是龍寶拄杖子、至道與揀擇在什麽處、又卓一下云、但莫憎愛、洞然明白。

上堂、世界恁麽熱、爲什麽看雲亭上、炎威到不得、若人識得者箇道理、三十年後、免得一日頭白。

七月旦上堂、一葉落天下秋、一塵起大地收、時節難遇、難提掇處轉風流、擊拂子下座。

解夏小參、僧問、昨見垂楊綠、今逢落葉黃、聖制周圓事、願更聞舉揚、師云、有意氣時添意氣、進云、兄弟一夏不犯法令、來日期滿、東去西行、賞勞言薦、又作麽生、師云、家家門路通長安、進云、潙山問仰山、子一夏不上來、在下面作得箇什麽、仰云、銀得一片禽、種得一籮粟、意在那裏、師云、父子取火夜遊、進云、潙云、子不虛過一夏意旨作麽生、師云、末後爲初、進云、仰云、和尚作得箇什麽、潙云、日間一食、夜後一寢、如何辨端的、師云、兩口一舌、進云、仰云、和尚亦不虛過一夏、道了吐舌、尊師云、知跪乳之禮、進云、潙云、子何得自復己命、如何領略、師云、得而不戮、進云、忽有人問著和尚今夏事、又如何祗對、師云、徐行蹋斷流水聲、縱觀寫出飛禽跡、進云、不因夜來鴈、爭見海門秋、便禮拜。

師乃云、秋風吹玉管、知音不住青霄之外、秋月碾冰輪、光輝盡塵刹而照絕、全放全收、古路有誰踏著、一擒一縱、動容聲色威儀、矧亦諸人一百二十日、終不虛拈匙放筯、來日期滿、聖制周圓、各各得從脚跟下去、不妨踢倒須彌、立乾滄溟、雖然如是、忽若見娑竭出海龍宮震、切莫誦多地夜他何故、抖擻多年穿破衲、襤褸一半逐雲飛。

復舉翠巖夏末示衆云一夏已來與兄弟東說西話看翠巖眉毛在麼保福云作賊人心虛乞師却紫茸氈長慶云生也車不橫推雲門云關父羊子證三大老各雖出雙手奈何未出翠巖關榾子只如不落他圈續一句又作麼生一峰雲片片雙磵水潺潺。

次日上堂僧問長期已滿布袋頭開月白風高無非秋色師云洞房深處說私情進云學人便恁麼去時如何師云雨過夜塘秋水深進云與麼則直須向萬里無寸草處去師云貪程太速進云可謂一夏不虛度光陰師云赤土畫簸箕進云一聲雷震清飈起天上人間知幾幾便禮拜師云何處不清涼。

乃云一夏禁足安居與諸人取證山僧多是昏沈今朝解開布袋與諸人遨遊山僧渾是走作所以道佛手遮不得人心似等閑到村草步頭莫錯舉。

中秋上堂僧問靈山話月曹溪指月意旨如何師云牛頭沒馬頭回進云寒山子底又作麼生師云崑崙喝生鐵進云玄沙爲什麼道生死岸頭事試甄別看師云和盤推出夜光珠進云恁麼則天上人間未出此光影中師云莫把商音作羽音僧提起坐具云者箇是爲出光影中未出光影中耶師云扁舟已過洞庭湖。

乃云藥嶠披雲笑王老拂袖行寒山不愁無口稜長沙無由私路行檢點將來盡是在光影裏作活計何也中秋三五今宵月爽氣遠浮銀漢清。

上堂拈拄杖云當於色中不失色體於無相中不碍有故達磨師祖無端走到東勝昇州却還向山僧手裏藏身諸人若見得上大人丘乙巳若見不得化三千七十士卓拄杖一下。

重陽上堂今朝重九節東籬菊已花對景思陶令登高憶孟嘉且道其中意又作麼生擊拂子云相逢共賞紫萸茶。

上堂空手把鉏頭步行騎水牛傳大士用盡平生伎倆只道得胡兒無鬚底句山僧不會要按牛頭喫草莫教巖葉霜飛秋意深。

開爐上堂舉趙州示衆云三十年前南方火爐頭有箇無賓主話直至而今無人舉著師云咄倆只要炙手助熱誰家竈裏火無煙卓拄杖一下。

上堂是法住法位世間相常住驀拈拄杖卓一下云者箇是龍寶拄杖子喚作是法入地獄如箭喚不作是法亦入地獄如箭是故世尊苦口便道得住法位三字雖然如是又卓拄杖一下云寒風凋敗葉且喜故人歸。

冬至小參僧問群陰剝盡一陽復生正與麼時祇僧如何轉身師云鐵輪碎石進云陰陽代謝四序變遷且致只如卦文未分風塵未動時又如何師云萬里一條鐵進云恁麼則一氣不言含有象萬靈何處謝無私便禮拜師云逢人莫錯舉。

乃云有物先天地鐵鎚擊不碎無象本寂寥夜合而晝開能爲萬象主擁之而不聚不逐四時凋撥之而不散恁麼恁麼雪嶺泥牛吼不恁麼不恁麼雲門木馬嘶金不博金水不洗水且置書雲令節箇箇保愛順時納祐底一句又作麼生擊拂子云律管知處繡紋線長。

復舉僧問古德如何是冬來事德云京師出大黃師拈云巖寶宵寒擁山帔月高枯木霜禽睡寶山著此兩句爲賓竭力爲主竭力具眼禪和請辨端的。

次日上堂、時臨亞歲、節屆書雲、一氣不言鐵樹開花、初爻無象萬彙盡彰、正與麼時、活脫脫僧如何受用去、卓拄杖一下云、一冬與二冬相逢不出手。

祐德禪寺佛堂供養陞座、師拈香云、此香非從天所生、非從地所生、非從虛空所生、從檀主信心生、根苗蟠大明之表、條幹茂至陽之清、爇向爐中仰祝　帝道遐昌、俯祈香花敷榮。

師就座云、聲前領旨已犯祖令、句後承當法不相饒、不涉二途、莫有解問底麼、僧問、甘蔗流苗應剎塵、覺場高發利生因、師云、誰不承恩、進云、卓犖雄機、隨處無阻、古今肯重事、請師不悭一句、師云、騎一問來、進云、直下構得更不回頭、亦作麼生、師云、寶杖夜鳴寒嶠月、進云、昔日須達建獨園精舍、屈世尊爲群生說法、今日檀越造祐德禪寺、請和尚爲四衆演法、其益還有優劣也無、師云、無有優劣、進云、今日檀越造此禪苑、與昔日須達建彼梵剎、其功又有多少也無、師云、無有多少、進云、正法末法時異、佛法僧法名殊、爲甚其功得等同麼、師云、洞中山色四時好、雲外溪聲一樣寒、進云、與麼則生生頂奉輝心鏡、廓照塵勞、信有餘、便禮拜、師云、也何妨。

乃云、千聖靈機、列祖命脈、嶺上白雲、巖前綠水、亘古亘今、透色騎聲、青寥寥白的的、難提掇處轉是風流、迄于德山行棒、臨際行喝、雪峰輥毬、禾山打鼓、齊是恁麼時節、只露目前些子、所以山僧歷山渡水、得得而來開堂演法、爲大檀信開運添德、增壽增福、亦不出者箇、且道、畢竟其功歸何處、聲拂子云、國清才子貴家富小兒嬌。(敍謝不錄。)

又云、至道曠遠、幽致虛凝、佛佛以之匡持、祖祖以之保護、其要只在利度群有、隨處作主、脫體現成、隨物能轉、苟得其人、則匪啻自得靈然、爲慈悲動、於中隨順菩薩行願、豁開本有光明藏、

賑濟五趣之貧兒、高低普應、前後無虧、遇緣卽宗、無滯一隅、所以大檀越具廣大知見、有堅固信力、運出自己家珍、建立奇麗禪苑、安置佛僧紹隆法寶、于五濁惡世中、人無至信時、發無比之大願、成見聞之巨益、能爲峻嶺之依託、最作漂沈之要津、以所集功課酧二親之幽靈、薦蓮開於上品、遠請山僧來、贊揚其功德、若論其功德、山僧未開口已前、其功廣施、其德偉被、矧亦雪裹巒山、以儼淨剎之勝境、風拂寒木、而唱念法之妙音、正當與麼時、箇箇無蘊、剎剎塵塵、悉是展無量壽佛之慈顏、不可說不可說、頭頭物物、現信心不二之全體、一心多心、一劫多劫、圓三身四智、徧八解六通、五眼融通、無處而不鑑、十力滿足、無邪而不攝、具足一切、攝受菩提、智智清淨、無別無斷、深入大陀羅尼妙門、住大不可思議境界、有如是作用、如是奇特、如是威光、如是吉祥、山河大地、草木叢林、情與無情、因中與果上、無高無下、發大機大用、得大安大樂、諸人要見此事麼、竹有上下節、松無古今青。

舉、世尊初成道、於普光寶殿、不離道樹、上須彌山頂帝釋宮、帝釋化作一寶坊、爲說十住法門、師拈云、世尊半夜日頭出、帝釋日午打三更、若是山僧開堂底、天平地平、卓拄杖一下便下座。

上堂、拈拄杖云、拄杖子有三件長處、第一疾程、朝到西天、暮歸東土、第二妙言、一句截流、萬機寢削、第三巧通、變作龍上天、作蛇入草、若人善識得、還我話頭來。

佛成道、上堂、僧問、我佛弃萬乘尊榮、受六年饑凍、忽覩明星、豁然成道、未審成何道、師云、鼻孔掛上唇、僧云、世尊說法、大梵天王、以金色波羅花獻、此意如何、師云、報恩須是還知恩人、僧云、世尊拈起顯示大衆、惟有迦葉尊者破顏微笑、意旨作麼生、師云、二虎爭時、其勢不生、僧云、世

尊云、吾有正法眼藏、分付摩訶大迦葉、又作麼生、師云、說向愁人愁殺人、僧云、今日和尙說法、有人獻花、未審如何顯示、師云、也爭奈不得破顏人。

乃云、坐吉祥之座、切要覓木槵子換眼睛、及乎見明星、果然將錯就錯、從此起定賣弄大地、山僧直得暗地裏點頭、諸禪德儞如解點頭底、取次不敢肯牛畔之供。

因雪上堂、譬如大地一片雪、見底謂之白、踏底謂之冷、只如不見不踏底、又作麼生道、以拂子擊禪床一下。

除夜小參、僧問、一年三百六十日、交頭結尾、別有生涯、如何得大用現前、師云、頂上無骨、頷下有鬚、進云、北禪今夜烹露地白牛分歲、檢點將來、正是殘盃冷肉、和尙將什麼施設大衆、師云、大家在這裏、進云、三陽交泰萬彙亨、定是來年蠶麥熟、便禮拜、師云、不妨道著。

乃云、年窮歲盡、結角羅紋、木馬飛上天、泥牛走入海、誰管陰陽變化、氣候遷謝、大底鼻孔向下垂、多年曆日不相干、所以道、日日是好日、時時是好時、交頭結尾、別有生涯、擊拂子云、天淨不知雲去處、地寒留得雪多時。

正旦上堂、僧問、元正啓祚、萬物咸新、衲僧門下有何祥瑞、師云、方袍圓頂、進云、與麼則年年是好年、日日是好日、爲什麼還得有新有舊、師云、一回拈出一回新、進云、可謂堯風舜日、和氣藹然、樵唱漁歌共樂豐年、便禮拜、師云、方知儞是識其言。

乃云、日暖風和、百花競發、人傑地靈、色足可觀、且道、其中慶賀事作麼生、卓拄杖、伏惟箇箇道體、起居萬福。

元宵上堂、我見燈明佛、本光瑞如此、眼中瞳子面前人、寶山未嘗說會與不會、箇箇莫向燈影裏轉身、擊拂子下座。

佛涅槃上堂、不許無邊身之供、喫工巧之和羅飯、胡亂賣峭非知其時、嗚伊嗚伊、年年二月是仲春。

三月旦上堂、甘草先生、苦草後生、好蠶麥熟、天平地平、忽有此漢出來、道和尙與麼說話、爲是佛法是世法耶、山僧向佗揶揄道、三月無三卯、田家必飽。

上堂、春山青春水綠、不是目前機、亦非目前事、且道、畢竟是什麼、擊拂子云、常憶江南三月裏、鷓鴣啼處百花香。

大德寺語錄 終

筑州太宰府萬年崇福禪寺語錄

侍者　宗貞編

山門門頭實地、箇箇踏著、因甚諸人、隨我入得、喝一喝。

佛殿前佛後佛、隱顯非一、咄、不因新長老證明、知佗一對無孔鐵。

土地堂護法先須識得主人公、扣齒三下云、東西南北、一等家風。

祖師堂者一隊老漢、惜乎坐在者裏、提起坐具云、若不行此令、誰敢得扶起。

方丈橫拄杖云、關中主、能解與本分草料、鳥觜薄舌、莫胡亂供欵去、靠拄杖。

拈帖、溫潤之文、格調之氣、直饒衲被蒙頭、奚以讓爲之義。

山門疏、成言於語、成語於言、如何若何、官不容針。

法座、諸人喚作高廣座子、山僧喚作者箇座子、何故、一步云、只爲到與麽地。

師陞座、拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲祝延

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、

陛下恭願、

龍圖永固、玉葉彌芳。

次拈香云、此一瓣香、爇向爐中、奉爲征夷大將軍、增崇祿算、伏願、高贊城中之德、長提塞外之

命。

又拈香云、此一瓣香、爇向爐中、奉爲大檀主筑州大空門泊都督司馬、增崇祿算、伏願、扇威風

於千歲、輝佛日於萬世。

拈香云、此香爇向爐中、供養前住巨福名山建長禪寺、先師　敕諡圓通大應國師南浦和尚

大禪師、用酌法乳之恩。

師斂衣就座云、明鏡當臺、明珠歷掌、要分妍醜者、直下來相見、有麽有麽、時有僧問、綠樹陰濃

夏日長、樓臺倒影入池塘、師云、時節難逢、僧云、和尚辭帝里、　皇帝留之、更向甚處通、一路來、

師云、鐵船水上浮、僧云、寰中天子敕、師云、誰不承恩、僧云、與麽則杲日麗天、清風匝地、師云、

大方無外、僧云、記得、保壽開堂、三聖推出一僧、意旨如何、師云、白雲深處金龍躍、僧云、壽便打、

又作麽生、師云、碧波心裏玉兎驚、僧云、若忽有人、推出一僧、如何祗對、師云、風光可愛、僧云、者

箇且置、今日還有禁足安居底道理麽、師云、大家在者裏、僧云、十五日結制則不問、卽今一時

結去看、師云、處處綠楊堪繫馬、僧云、恩大難酬、師云、能有幾人、僧禮拜。

師乃云、世尊拈花、迦葉微笑、君子愛財、取之有道、正法眼藏從此流通、遞代傳持受、虛接響、激

揚鏗鏘坐斷古今、珠回玉轉、八面玲瓏、迄于其大機圓應、大道無方、一賓一主、擒縱擡搦、收放

明暗、電轉星飛、窮則變、變則通、青於藍、寒於水、聽敕挺拔威音那畔、蕭然空劫已前、況亦清風

明月多雅興、白雲流水寬詩緣、四海九州雷動風行、漁歌樵唱共賀太平、正當與麽時、人人禁

足護生、人人剋期取證、　皇恩佛恩一時報了底事、又作麽生、擊拂子云、版圖遠奏堯天潤、萬

物呈祥樂。聖情。

復舉、三聖道、我逢人卽出、出則不爲人、興化道、我逢人則不出、出卽便爲人、師云、二大老、可謂漆隱處黑、朱隱處赤、若是山僧底、天平地平、卓拄杖下座。

當晚小參、僧問、三月安居、九句禁足則不問、遠離花洛、親到岳峰、一句如何、師云、八角磨盤空裏走、僧云、和尙住此山、以何安衆、師云、山色夕陽時、泉聲中夜後、僧云、與麽則大衆飽德去也、師云、無限清風來未休、僧云、德山小參不答話、有問話者、三十棒、意旨如何、師云、去得來不得、僧云、趙州小參要答話、有問話者、置將一問來、又作麽生、師云、來得去不得、僧云、今夜小參要答話、不要答話耶、師云、出頭天外看、誰是我般人、僧云、三大老用處、莫止一般麽、師云、教伱休也不肯休、僧云、若如此則一卽三、三卽一、師云、吽吽、僧云、學人今夜小出大遇、便禮拜、師云、撒手那邊去。

乃云、今夜要與大衆有箇識面之話、各各切宜、起倒分明、陵王溪畔此君亭邊、諸人知有未得做主、崇福區宇件件數目、山僧做主未辨大毫、既一其居、爲甚受用不同、還會麽、所以道、欲識佛性義、當觀時節因緣、明朝賴是結制安居之辰、箇箇成熟慧身、坐底立底、築著磕著、自然不得孤負者箇、便卓拄杖一下。

復舉雲門因有官問、佛法如水中月、是也無、門云、清波無透路、師拈云、以答見問、問最可、以問見答、答未奇、且道、誦訛在甚處、具眼禪流、請辨緇素看。

次日上堂、我箇一衆與尋常不同、跳出金剛圈、呑透栗棘蓬、激電神機雲飛颺、到旣而如此、今朝因甚要行不行、要住不住、還會麽、擊拂子云、塌薩阿竭二千年。

五月旦上堂、僧問、聲前薦得未是作家、喝下承當猶是鈍漢、爲什麽如此、師云、石壓笋斜出岸懸花倒生、進云、猶是學人疑處、師云、鳳林吒之、進云、記得、僧問投子、如何是十身調御、投子下禪床立、意旨如何、師云、頂上無骨、進云、又問、凡聖相去多少、投子亦下禪床立、意在那裏、師云、頷下有鬚、進云、若有人問如何是十身調御、如何祇對、師云、眼中童子面前人、進云、上來一一指示分明、爲人底一句又作麽生、師云、三十年後、自悔去亦不定。

乃云、崇福有三訣、若參得第一訣、許伱拄杖頭上挑日月、若參得第二訣、不妨拂子頭上打筋斗、若參得第三訣、我且問伱、山前麥熟也未。

端午謝檀家補寺齋、上堂、僧問、今朝五月端午、不用書符咒土、請師現量法門一句、直下至論師云、一峰雲片片、雙礀水潺潺、進云、家無白澤之圖、又作麽生、師云、來得去不得、僧云、今夜小參要撞著文殊底時節且置、天澤三轉語、還許學人咨參也無、師云、鑽之是仰之是、進云、己眼未明底、因甚將虛空作布袴著、師云、脛無毛股無肉、進云、劃地爲牢底、因甚透者箇不過、師云、脚下荊棘深數丈、進云、入海算沙底、因甚針鋒頭上翹足、師云、覺築著伱鼻孔麽、進云、恁麽則金殿譚禪、大悅。皇情嶽峰聲道、奔走祇子、也未爲分外、在師喝云、非阿伱境界、進云、錦上鋪花又一重、師云、咦。

乃云、端午天中節、諸方盡咒土、書壁以消妖怪、認採藥模樣、落草以作伎倆、爭如我者裏、有不忌靈山付囑之人、忽展妙術之手、拔貧做富、一衆箇箇石人之機、鐵漢之用、風吹不入、水洒不

著、諸人要見此人麼、卓拄杖云、切忌當面諱却。

和泉和尚至上堂、僧問、長松嶺頭風颯颯、飛瀑岸前水潺潺、現成公案、大難大難、如何履踐、師云、好向大難處履踐、進云、恁麼則薰風自南來、殿閣生微凉、師云、認驢鞍橋作阿爺下頷、進云、和尚有三訣、一一許咨參也無、師云、何妨、問將來、進云、若參得第一訣、許儞拄杖頭上挑日月、意旨作麼生、師云、虛空迸裂、進云、若參得第二訣、不妨拂子頭上打筋斗、又如何、師云、山嶽起舞、進云、若參得第三訣、我且問儞、山前麥熟也未、意在那裏、師云、眼睛烏律律、進云、者箇三訣、畢竟明得什麼邊事、師云、金香爐下鐵崑崙。

乃舉興化見同參來喝底公案、師云、古人只要就價高處、缺篤其管賞之義、崇福今日、得和泉和尚光訪、事事自然、函蓋相應、何故、擊拂子云、覓火和煙得、擔泉帶月歸。

退院上堂、衲子從來無定迹、天涯海角任情遊、一毫頭上辭華洛、三鼓聲中出九州。

崇福寺語錄 終

洛陽龍寶山大德禪寺語錄 退横岳歸本寺

侍者　惠眼編

七月旦上堂、秋雲清淡、秋水清冷、東西與南北、觸處嫩凉生、且道、其中事作麼生、卓拄杖云、四海隆平煙浪靜、斗南長見老人星。

解夏小參、隨處作主、結聖制於横嶽山頭、立處皆眞、解賞勞於龍寶峰頂、此事不相謾、時不孤負人、破衲逐雲飛、草鞋隨路轉、左足先應處、脚頭是通宵、何必落臺山暮直之途轍、慕流棠不肯之道伴、雖然如是、山僧有親切一句子、各各分明善爲、處處不得忘却、便卓拄杖一下。

復舉文殊三處度夏公案、師云、文殊當年於列聖眉毛裏、雖藏得渾身、二千年後、未免遭人點檢、何故、擊拂子云、雲在嶺頭閑不徹、水流澗底太忙生。

次日上堂、風到梧葉、露凝槿花、無寸草地、不較其多、莫敎語默逢人對、回首忽然是月華。

八月旦上堂、八月初一日、天下太平節、人人樂無爲、箇箇災難絕、且道、因箇什麼、如是、卓拄杖一下云、分一節。

中秋上堂、拈拄杖卓一下云、靈山指者箇、曹溪話者箇、我者裏不指不話、還有親疎也無、又卓一下云、無人知此意、令我憶南泉。

臘八上堂、澄月映徹、衆星粲朗、箇中無悟處、世尊何悟道、卓拄杖一下云、二千年前、二千年後。

除夜小參、日一上月一上、晝一上夜一上、窮到一十二箇月、數到三百六十日、謂之新舊交頭除夜結尾、諸人若使身在舊年、不發新定機、也使心在新年、失却本來用、所以北禪烹露地白牛、祖翁挑半宵之燈、雖然如是、山僧終不入與麼窠窟、何故臘雪連天白、春風逼戶寒。復舉、僧問香林、萬頃荒田、是誰爲主、林云、看看臘月盡、師拈云、此箇時節、最是可愛、來日定大年、一衆須保愛。

正旦上堂、鳳曆開元日、王春肇始時、雪寒北嶺梅香、南枝好箇好時節、龍天須匡持、且道、以何爲驗、卓拄杖一下便下座。

元宵上堂、僧問、今朝上元節、處處掛燈毬、意旨如何、師云、風吹不入、進云、只將此正言、以祝天下春、師云、知言之漢、進云、記得、僧問香林、如何是室內一盞燈、此意如何、師云、言鋒冷似冰、進云、林云、三人證龜作鼈、又作麼生、師云、利舌硬如鐵。

乃云、燈燈相續、燈燈無窮、處處列夜光珠、頭頭莊夜明符、只此光輝底、都從者裏普、擊拂子一下。

佛涅槃上堂、僧問、今宵夜半、世尊入涅槃、兒孫以何酹、法乳、師云、杜鵑啼斷月如畫、進云、與麼則解知恩報恩、師云、也何妨、進云、世尊昔在靈山會上、拈起一枝花、此意如何、師云、萬里一條鐵、進云、迦葉獨微笑、意在那裏、師云、金不博金。

乃云、我若謂滅度、非我弟子、我若謂不滅度、亦非我弟子、當年若有人、道生靈終不改、辣、非但教得釋迦老子、也須扶得一會列聖、何故、良久云、紅霞碧靄籠高低、芳草野花一樣春。

三月旦上堂、山花開似錦、澗水湛如藍、堅固法身太無端、大龍何處露心肝、諸人見得不、無因甚不解擧得、擊拂子云、又逐流鶯過短墻。

上堂、一卽一切、一切卽一、拈拄杖卓一下云、三祖大師、無端穿柳巷、入花街、忽然逢著幽鳥語喃喃、辭雲入亂峯、合掌低頭道、揭諦揭諦、是什麼道理、諸人各辨別、又卓拄杖一下座。

佛生日上堂、僧問、釋迦老子今日初下閻浮、四衆臨筵、願聞法要、師云、斧頭元是鐵、進云、薔薇滴露、楊柳籠煙、莫是瞿曇眞面目麼、師云、莫認驢鞍橋、作阿爺下頷、進云、世尊初生下時、周行七步、一手指天、一手指地、是什麼心行、師云、鐵丸無縫罅、進云、稱天上天下唯我獨尊、不是傍若無人麼、師云、佗後有雲門一棒在、進云、雲門棒頭、還相當也未、師云、焦塼打著連底凍。

乃云、指地指天稱獨尊、顚言倒語卒難論、金容萬德有誰看、徧界堂堂常獨存、雖然如是、一杓惡水更難放過、以拂子擊禪床一下。

結夏小參、僧問、結制已前月白風淸、豈不是成就慧身底時節、師云、刺破眼睛、進云、結制已後風淸月白、向甚麼處剋期取證、師云、三生六十劫、進云、今夜小參緊要一句、不落結制前後、願聞提唱、師云、勘破了也、進云、和尙布幔天網子、籠絡衲子、忽如有透得金剛圈底漢、亦作麼生羅籠得佗、師云、森森夏木杜鵑啼、進云、恁麼則可謂隨處作主、立處皆眞、便禮拜、師云、且坐、地商量。

乃云、鵝護雪蘭人冰、古今結制榜樣、衲子禁足風規、三月九旬內、於七尺單前、澄瀘身心、成熟本智、情與無情、一齊安居、無前無後、同時寂定、謂之以大圓覺爲我伽藍、身心安居平等性智、

若其逐境走作、隨物紛拏、無有此處、正與麽時、本色行脚師僧、入此保社、不入此保社、擊拂子云、金屑雖貴、落眼成翳。

復舉、僧問雲門、如何是諸佛出身處、門云、東山水上行、韶陽只要箇箇以鐵壁爲戶牖、去山僧不然、若有人問如何是諸佛出身處、便對佗道、鷲峰山色青更青、且道、那箇親那箇疎、分明辨別看。

次日上堂、僧問、樹頭紅稀、林下綠暗、好箇時節、請師提唱、師云、萬里一條鐵、進云、恁麽則薰風自南來、殿閣生微凉、師云、見之不取、思之千里、進云、今朝盡是護生安居、當圖何事、師云、著黑衣護黑柱、進云、如朝行西天、暮歸東土、還有禁足分麽、師云、我者裏喚作走作漢、進云、學人今夏依附和尙、有何方便、師云、只此一問從何來、進云、若不登樓望焉知滄海深、便禮拜、師云、何必。

乃云、今日是結制、一衆各禁足、眼眸重千斤、堂裏伸兩脚、是箇什麽道理、三條椽下摸索、上堂、僧問、學人心猿未穩、意馬奔馳、願示方便、師云、鐵鎚無孔、進云、與麽則把斷要津去也、師云、又與麽去也、進云、記得、巖頭問德山、是凡是聖、意在那裏、師云、石從空裏立、進云、山便喝、如何理會、師云、火向水中焚、進云、若有人問和尙是凡是聖、奪、師云、九九八十一。

乃擧、僧問洞山、寒暑到來、如何回避、山云、何不向無寒暑處去、僧云、如何是無寒暑處、山云、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨、山僧不然、若有人問如何是無寒暑處、只對佗道、靜處薩訶、且道、那箇親那箇疎、諸人各辨別。

端午上堂、僧問、今朝正是端午節、家家掛艾虎、處處浴香湯、和尙應節一句、願聞提唱、師云、黃鶴樓前鸚鵡洲、進云、恁麽則山自青、水自綠、師云、隨後婁搜漢、進云、記得、文殊令善財採藥、財云、信手採來、無不是藥、此意如何、師云、瞎漢亂統作什麽、進云、善財拈一莖草、度與文殊、文殊云、此藥亦能殺人、亦能活人、又作麽、師云、上是天、下是地。

乃云、今朝端午節、無妖亦無怪、不假善財藥、人人自慶快、擊拂子下座。

半夏上堂、僧問、一夏已過半、崑崙嚼生鐵、半夏已後又如何、履踐去、師云、晨朝粥、齋時飯、進云、已前已後且置、正當今日直聞指示、師云、頭頂天脚履地、進云、記得、僧問智門、蓮花未出水時如何、門云、蓮花、意旨作麽生、師云、水洒不著、進云、僧云、出水後如何、門云、荷葉還蹋的也無、師云、風吹不入、進云、出水與不出水相去多少、師云、何不向老僧問將來、進云、移花兼蝶至、買石得雲饒、便禮拜、師云、吽。

乃拈拄杖云、六月不熱五穀不熟、今日爲諸人熱之熟之、卓拄杖一下云、已熱已熟後如何、擲下拄杖云、天平地平。

上堂、僧問、火雲燒空普天炎熱、向什麽處正得回避、師云、迦葉門前風凜凜、進云、學人今日脫却鶴臭布衫去、師云、淨躶躶地一句、作麽生道、進云、記得、馬大師一日陞堂、百丈出捲席、意在那裡、師云、方木投圓孔、進云、大師便下座、歸方丈、又如何、師云、清風隨步生、進云、和尙今日上堂、無人捲席、豈不是無事而去、師云、養子不及父、家門一世貧、進云、捲席與不捲席、那箇是親那箇是疎、師云、苦哉佛陀耶。

乃云、大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道、既是坐道場、因甚佛法不現前、擊拂子云、千里萬里一條鐵。

上堂、一葉落天下秋、是處無不風流、若記得箇時節、終不將語默酬、且道、是阿誰分上事、喚大衆云、還覺頂門獨立麼。

解夏小參、僧問、學人一夏已來、波波挈挈過了、剋期取證事、請師爲證明、師云、嫩涼秋意入簾櫳、進云、恁麼則可謂、光陰不虛度、師云、直饒儞實度也何是、進云、記得雲門因僧問、初秋夏末、前程忽有人問、如何祗對、門云、大衆退後、意旨作麼生、師云、崑崙嚼生鐵、進云、僧云、過在什麼處、門云、還我九十日飯錢來、又作麼生、師云、平出、進云、前程問過事卽且置、卽今和尙如何勘過、師云、不消一拶、進云、柳栗橫擔不顧人、直入千峰萬峰去、便禮拜、師云、脚下泥深。

乃云、秋初夏末、季熱未散、自恣賞勞、箇箇無缺、隨時應節無不漏逗、就理就事無不現前、軒知、會則途中受用、如龍得水、不會則世諦流布、似羝羊觸藩、畢竟與麼去、步步清風起、佛手遮不得、人心似等閑、路頭踏著不曾瞋、萬里神光頂後相、然雖如是、只如雲門道、還我九十日飯錢來、是阿誰分上事、擊拂子云、不因樵子徑、爭到葛洪家。

復擧翠巖夏末示徒公案、師拈云、一畝之地、三蛇九鼠。

次日上堂、僧問、衲僧家四月十五、結佗不得、七月十五、解佗不得、畢竟向什麼處安身立命、師云、須彌南畔閱浮樹、進云、與麼則西風一陣來、落葉兩三片、師云、矮子看戲、進云、昔有老宿、一夏不爲師僧說話、有僧嘆云、我只麼空過一夏、不敢望和尙說佛法、得聞正因二字也得、意旨如何、師云、拋却黃金捧碌甎、進云、老宿聞云、圓梨莫誓速、若論正因一字也無、道了扣齒云、我無端恁麼道、又作麼生、師云、三千八百、進云、隣壁又有老宿、聞云、好一釜糞、被兩顆鼠糞汙却、意在那裏、師云、同病相怜、進云、和尙一夏已來、說什麼法、爲人、師云、山青水綠、進云、攪長河爲酥酪、變大地作黃金、便禮拜、師云、也何妨。

乃擧趙州因僧辭、州云、有佛處不得住、無佛處急走過、三千里外逢人莫錯擧、僧云、與麼則不去也、州云、摘楊花摘楊花、師云、趙州若無後語、須是遭人點檢、何故、風從八月涼、月自七月明。

八月旦上堂、拈拄杖云、月月初一、無雨爲吉、今月初一、有雨爲吉、且道、吉在甚處、卓拄杖一下云、吉吉、吾道最吉、靠拄杖下座。

上堂、西風一陣來、落葉兩三片、銅鑼著生鐵、佛祖渾不辨、不辨不辨、諸人且過那邊。

重陽上堂、僧問、今朝是九九日、諸方盡賞佳辰、衲僧門下不墮常機、應節一句、願聞法要、師云、秋晚頓寒、箇箇萬福、進云、只如採菊東籬下、悠然見南山底、未審和尙如何證明、師云、刺破眼睛、進云、古德云、重陽九日菊花新、又是呈什麼道理、師云、謝答話。

乃云、採菊東籬下、悠然見南山、靖節只知其愛、不知其用、今日重九、作麼生用得、擧拂子云、二三三三三二。

上堂、擧、有官問雲門、佛法如水中月、是不、門云、清波無透路、官云、和尙從何得、門云、再問復何來、官云、正與麼時如何、門云、重疊關山路、師云、雲門官不容針、官人私通車馬、點檢將來、兩俱失利、何也、自從賢聖法來、未嘗殺生、卓拄杖下座。

開爐上堂、無賓主話、十八高人、一回舉來、一回是新、及乎問其意旨、大半便道、不知最親、阿呵呵、只要爐下煖似春。

上堂、南山松北嶺雪、夜雨晝晴、太平得節、達磨來東土、二祖行西天、行脚禪和子、莫失却目前、喝一喝。

上堂、一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法、皆從此經出、忽拈拄杖卓一下云、勸君盡此一盃酒、西出陽關無故人。

冬至小參、僧問、葭管飛灰、繡紋添線、不涉陰陽造化、願聞法要、師云、八角磨盤空裏走、進云、恁麼則岸柳未開眼、庭梅先發花、師云、好與麼去、進云、記得、僧問、百丈如何是奇特事、丈云、獨坐大雄峰、還端的也無、師云、把定要津不通凡聖、進云、僧禮拜、又作麼生、師云、不拶破頂上、進云、丈便打、如何理會、師云、依令而行、進云、古人則且置、卽今問和尚如何是奇特事、如何祗對、師云、三十年後、面熱汗出、進云、不入虎穴、爭得虎子、便禮拜、師云、爲我將得來看。

乃云、六陰謝盡、一氣方生、鐵樹開花、石笋抽條、祇僧家若向者裏轉身來、自然枯枯燥燥、得失是非一時放却、也是省錢易飽底事、古來淨悄悄地、爭之不足、何須運步念阿伽門、而今多是知時不知節也、猶不妨東西南北鳥飛兎走、直饒向山僧背後問訊、也山僧不敢可橫點頭、何故、卓拄杖云、國清才子貴、家富小兒嬌。

復舉、僧問趙州、如何是趙州、州云、東門南門西門北門、僧云、不問這箇、州云、儞問趙州、拈云、以機奪機、以毒攻毒、趙州老漢不無之、其奈何八十行脚事、猶未全用在、若得全用去、兒孫滿堂至今繁興。

次日上堂、僧問、霜飛大野、風戒林丘、普天普地、寒威凜然、更向什麼處得回避去、師云、陽氣發時無硬地、進云、璿璣未動、全機顯露、朕兆纔分、覩體現成、不涉時節、不借言薦、親切一句、願聞舉揚、師云、家家觀世音、進云、慈明揭牌、皓老不洗布裩、點檢將來、早是劍去久矣、寶山今日莫別有條章麼、師云、一冬二冬、叉手當胷。

乃云、瑞雪滿地、祥雲翻天、龍寶山頂和氣靄然、好箇時節爲君報知、一氣不言含有象、萬靈何處謝無私。

謝進退兩班、上堂、竿頭進一步、大千沙界現全身、退步就已、萬中一箇而不失、蓋是與麼人作與麼行履者也、大衆要見此人麼、雲在嶺頭閑不徹、水流澗底太忙生。

臘八上堂、僧問、釋迦老子六年冷坐、逗到臘八夜始方開悟去、未審悟得箇何事、師云、鼻孔掛上唇、進云、未見明星時、已雪山雪白、一見明星後、又雪山雪白、這裏端的事、和尚如何甄別、師云、鐵丸無縫罅、進云、只如有一人、發眞歸源、大地衆生向何處去、師云、向儞眼睫上去、進云、恁麼則可謂劫外一壺春、更好優曇花綻普天香、便禮拜、師云、道卽道得。

乃云、盡謂世尊臘月八夜成道、是則是、敢問諸人、如何是成底道、若是識得、報恩有分、若也識不得、擊拂子云、初中後三大劫。

除夜小參、僧問、舊歲今宵去、向甚處去、師云、頭上一堆塵、進云、新年明日來、從甚處來、師云、脚下三尺土、進云、還有不涉新舊底也無、師云、有、進云、如何是不涉新舊底、師云、大底鼻孔向下

垂、進云、記得、感首座問法昌、昔日北禪分歲、烹露地白牛、和尚今夜分歲、有何施設、昌云、臘雪連天白、春風逼戶寒、意旨作麼生、師云、兩口無一舌、進云、感云、大衆如何喫、昌云、莫嫌冷淡無滋味、一飽能消萬劫飢、此意如何、師云、鬼爭漆桶、進云、感云、是何人置辨、昌云、無慚愧漢、來處也不知、又作麼生、師云、彼此出家兒、進云、古人即且置、和尚今夜分歲、有何施設、師云、且待、有童行報去、進云、大衆如何喫、師云、不可從鼻而入、進云、是何人置辨、師云、衣鉢閣中常相逢、進云、和尚與麼施設、與古人是同是別、師云、許儞疑三十年、進云、鶴飛千尺雪、龍起一潭氷、便禮拜、師云、也何妨。

乃云、今宵臘月三十夜、家家爆竹賞結尾、或操歌吹之音、或促鐘鼓之響、祝來日新年之吉壽、萬歲松栢之操、龍寶山頂人、未必不點頭、只是終不墮悄然機、豈將等閑風味、以供養合山龍象、雖然如是、與衆分歲、各各須飽足、擊拂子云、趙州喫茶、雲門胡餅。

復舉、僧問古德、萬頃荒田、是誰爲主、德云、看看、臘月盡、師云、大衆要見此僧、當頭霜夜月、要知古德、任運落前溪、雖然如是、靜處娑婆訶。

正旦上堂、僧問、瑞草生嘉運、林花結早春、好箇時節、願聞擧揚、師云、箇箇道體、起居萬福、進云、恁麼則元正啓祚、萬物咸新、師云、一句道著、進云、正當今日大年朝、如何是新年頭佛法、師云、風暖鳥聲碎、日高花影重、進云、僧問雲門、如何是清淨法身、門云、花藥欄、意旨作麼生、師云、刺破眼睛、進云、僧云、便恁麼去時如何、門云、金毛獅子、又作麼生、師云、兩重公案、進云、即今問和尚、如何是清淨法身、擡、師云、千峰雪色寒。

乃云、今日大年朝、山僧渾解道、大衆箇箇道體、起居萬福、且道、是佛法是世法、卓拄杖云、東西南北、吾道大亨。

元宵上堂、僧問、今宵處處揭燈、萬民共樂、和尚爲人剔起心燈來看、師云、天晴日頭出、進云、恁麼則可謂光明寂照徧河沙、師云、不妨道著、進云、僧問香林、如何是室內一盞燈、林云、三人證龜作鱉、意在那裏、師云、罕遇便宜、進云、與麼則昔日香林、今日和尚、便禮拜、師云、好去好用。

乃云、燈燈相續、燈燈無已、且道、此燈從何處來、卓拄杖一下云、我見燈明佛、本光瑞如此。

上堂、僧問、春山疊亂青、春水漾盧碧、好箇時節、願聞法要、師云、莫向雪竇背後問訊、進云、恁麼則日自暖、風自和、師云、休向老僧背後問訊、進云、趙州訪一庵主云、有麼有麼、主豎起拳頭、州云、水淺不是泊舟處、意旨作麼生、師云、蠅見血、進云、州又訪一庵主云、有麼有麼、主豎起拳頭、州便禮拜讃歎、如何委悉、師云、鶻提鳩、進云、問答已一般、爲甚肯一人不肯一人、師云、看取不落兩頭、進云、若有人問有麼有麼、未審和尚如何祇對、師云、且去喫茶。

乃擧、三祖大師道、一即一切、一切即一、忽拈拄杖云、者箇是寶山拄杖子、阿那箇是一、卓拄杖一下云、只能如此、何慮不終。

佛涅槃上堂、僧問、法身無爲不墮諸數、釋迦老子因甚示涅槃之相、師云、爲涅槃不墮諸數、進云、古德道、十方薄伽梵、一路涅槃門、且道、如何是涅槃門、師云、日出東夜落西、進云、五通仙人問世尊云、世尊有六通、我有五通、如何是那一通、世尊召五通仙人、意旨作麼生、師云、平生肝膽向人傾、進云、仙人便應喏、世尊云、那一通儞問我、如何理會、師云、依稀似曲纔堪聽、又被風

吹別調中、進云、後來雪竇著語云、老胡元不知有那一通、却因邪打正、意在那裏、師云、無影樹下合同船、進云、即今問和尚如何是那一通、未審如何祗對、師云、三跳後。

上堂、舉雲門云、我看諸人、二三機中尚不能構得、空披衲衣何益、師云、山僧不然、我看諸人、悉是大機大用人、剛要作佛何益、住住、一不做二不休、不風流處也風流。

上堂、春山青春水綠、春雲片片、春鳥喃喃、敢問諸人、吾宗門中是放開是揑聚、箇箇歸寮舍摸索看。

四月旦上堂、驀豎起拂子云、西天二十八祖、東土六祖、盡在拂子頭上、說心說性、論玄論妙、山僧忍後不禁、見怪笑一聲、箇箇面熱汗出、諸人還見麼、若也不見、擊拂子一下云、滿地落花春已過、綠陰空鎖舊莓苔。

佛生日上堂、指天指地、墮尊貴、滿目青山笑點頭、自從雲門行令後、不風流處也風流、諸人向者裏、會得不妨報恩有分、其如未然、靜處婆婆訶。

結夏小參、僧問、看雲亭上月明明、古巖松下風拂拂、見成公案絕遮欄、不涉言詮、願聞法要、師云、九九八十一、進云、恁麼則山自青、水自綠、師云、隨後婁搜漢、進云、九旬禁足、剋期取證、則不問、七尺單前、三條椽下、學人一夏、如何履踐、師云、眼眸重千斤、進云、古德道、參須實參、悟須實悟、如何是實參、師云、金香爐下鐵崑崙、進云、實悟底又如何、師云、何必、進云、實參實悟畢竟作麼生、師云、心不負人、面無慙色。

乃云、言前句後、舌根裏難藏、身向上向下、驀拶挨葫蘆子、背面終不落、好手、首尾何處該萬類、遠超象外、迥脫天真、是處雲山溢目、鬧市大蟲誰不解、見見即見、因甚文殊頭黑普賢頭白、會得三月安居、九旬禁足、循規守矩、脚底不帶五色索、其如未然、靜處婆婆訶。

復舉臨濟示衆云、一人在孤峰頂上、無出身路、公案、師拈云、古來作者弄嶮落草、等是難禁、只是要須人人在背後點頭、大衆還會麼、鬱頭藍已定、全身何假周行跨七步。

次日上堂、僧問、如來聖制、禁足護生、衲僧朝游西天、暮歸東土、學人此間、禁足即是、游歸即是、師云、南番大舶主、本此土商人、進云、已道禁足安居、因甚文殊三處度夏、師云、曲終人不見、江上數峰青、進云、記得雲門示衆云、十五日已前不問、儞十五日已後道將一句來、意旨作麼生、師云、什麼處去、進云、自代云、日日是好日、又作麼生、師云、倒退三千、進云、和尚若逢韶陽垂示、向佗如何道、師云、法堂上寸草不生。

乃云、今朝是結制、不敢謾却諸人、只因現量、以擧揚正法眼藏、驀拈拄杖、卓一下云、者箇是龍寶拄杖子、阿那箇是正法眼、若也不會、雨過遠山綠、靠拄杖下座。

解夏小參、三月安居、九旬禁足、山色夕陽時、泉聲中夜後、圓覺伽藍、平等性智、竹有上下節、松無古今青、箇裏無取證、誰成熟慧身、正與麼時節、衲僧活脫處、要行便行、要坐便坐、東西南北無有遮障、運奔執捉全超象外、諸人一夏結眉交肩、今日何必苦口叮囑、雖然如此、擊拂子云、勸君盡此一盃酒、西出陽關無故人。

復舉嚴夏末示衆公案、師拈云、翠巖爲衆竭力不少、只得箇三枚把不住老凍膿、若有中郎鑑、何同野舍薪。

上堂、眞空不礙有、眞空不異色、忽拈拄杖卓一下云、且道、是有是不有、是色是不色、若是劍利衲僧、和水喫乳、其或躊躇、拄杖穿卻鼻孔、又卓一下。

奉謝大王上將入山下百味佳齋、伸合山供養、上堂、僧問、日月輪邊氣象高、魚龍穴下蟠根固、師云、好、進云、上將忽入山下來奇齋、供養大衆、未審和尚說什麼法、得報此恩、師云、風行草偃、進云、恁麼則蘋葉風涼、桂花露香、師云、好也與麼去、進云、只如達磨未來已前、還有這箇消息也無、師云、銀山鐵壁、進云、來後又如何、師云、鐵壁銀山、進云、來與未來且置、如何是這箇消息、師云、鐵壁鐵壁、銀山銀山、進云、學人今日小出大遇、便禮拜、師云、撒手那邊去。

乃橫拄杖云、大士三十二應身、天大將軍最是眞、摧蕩諸障與慶快、提持百福救窮貧、大衆要會者箇大機大用麼、卓拄杖云、看看、巍巍堂堂、煒煒煌煌、四海九州、威風凜凜、

材木採用歸謝普請、並善源雲和尚上堂、拈拄杖云、萬仞峰前千磵底、者邊那邊擇良材、斧頭用得諸人力、集此大成相呼回、正與麼時作麼生、卓拄杖一下云、行到水窮處、坐看雲起時。

上堂、驀橫拄杖舉、肇法師云、近而不可見者物性耳、卓拄杖云、者箇是寶山拄杖子、阿那箇是物性、又卓拄杖云、一槌兩當、蓋覆將來。

宗持禪尼逆修拈香、當陽突出迥脫根塵、薰天炙地、舉體全眞、乃佛乃祖、由佗出氣、衲僧巴鼻從此方親、況是宗持大姊、借山僧手拈出、等閑一見便見、自然一得永得、感生生正果、結世世正因、馥郁香風清徧界、靄然和氣恰如春。

除夜小參、年窮歲盡、黑漆桶裏盛墨汁、交頭結尾、半夜烏雞飛上天、所以師僧家、自從空劫已前威音那畔、一日日未嘗逐一日、一時時未嘗隨一時、墻壁瓦礫、露柱燈籠、背後面前、眞珠燦爛、雖然如是、今夜與諸人分歲、其中爲國一句作麼生、擊拂子云、村裏盡好驅儺、來年定是熟年。

復舉、香林因僧問、萬頃荒田、是誰爲主、林云、看看、臘月盡、師云、山僧不然、若有人發此問、便答佗道、昨日相見人、忽問是何人、劈口便摑。

正旦上堂、僧問、年年是好年、日日是好日、正與麼時、請師祝　聖、師云、萬年松下有茯苓、進云、恁麼則萬民樂業唱謳歌、師云、好音在耳、人皆聞、進云、記得、僧問、古德、新年頭還有佛法也無、意在那裏、師云、舌頭無骨、進云、德云、元正啓祚、萬物咸新、的當也無、師云、藕絲孔裏騎大鵬、進云、只如古人祇對、如何辨別去、師云、風暖鳥聲碎、進云、一句了然超百億、師云、富嫌千口少、進云、非但學人、四衆咸霑恩、便禮拜、師云、也何妨。

乃云、今朝大年朝、東廊下相賀、西廊下相賀、喚作佛法底、拂子與佗點頭、喚作世法底、拄杖與他點頭、且道、諸人孰與阿那箇點頭、若於此會得、便解山僧適來道箇箇道體、起居萬福、

二月旦、爲出材木、勸下大衆、上堂、梅腮柳面、吐香競榮、春山春水、湛綠疊藍、衲子清興、時哉時哉、許儞始隨芳草去、又須後逐落花回、忽回來時如何、箇箇萬福萬福、侍者急手點將箇好茶來。

佛生日上堂、僧問、青春已去、朱夏初臨、瞿曇今日降生、此是現成底、請師別舉揚、師云、鐵丸無縫罅、進云、二月十五不曾滅、因甚鶴林中示雙趺、師云、天上星地下木、僧云、四月八日不曾生、

爲甚九龍吐水灌沐金軀、師云、九九八十一、僧云、指天指地、道天上天下唯我獨尊、還、師云、芍藥花開菩薩面、僧云、雲門云、我當時若見、一棒打殺與狗子喫卻、意旨作麼生、師云、因邪打正、僧云、雪竇云、我若見、便與掀倒禪床、意在那裏、師云、把手相共上高峯、僧云、二大老用處、是同是別、師云、南山起雲、北山下雨、僧云、上來一一蒙指示、向上宗乘事又如何、師便喝、乃拈拄杖卓一下云、淨法界身、撐天拄地、本無出沒、種瓜得瓜、便恁麼領去、報恩有分、其如未然、二龍溫涼水。

結夏小參、僧問、綠暗紅稀、孟夏漸熱、應節一句願聞、提唱、師云、薰風自南來、殿閣生微涼、僧云、禁足安居誰似我、掛角羚羊不露蹤、師云、有路可上、高人更行、僧云、朝到西天、暮歸東土、是什麼人分上事、師云、是安居底人分上事、僧云、恁麼則一聲黃鳥青山外、占斷風光作主人、師云、那裏得與麼地、僧云、松源有三句、許咨參也無、師云、何妨問將來、僧云、大力量人、因甚擡腳不起、師云、草鞋和露重、僧云、開口因甚不在舌頭上、師云、不見牙齒一具骨、僧云、明眼衲僧、因甚腳跟下紅絲線不斷、師云、腳頭也腳底、僧云、學人今夜小出大遇、便禮拜、師云、向人作麼生舉、乃云、西天嚴規、東土嚴令、齊要知有箇剑利漢、大坐當軒底事、克得此事、三月安居、九句禁足、天覆不得、地載不能、日用四威儀中、全坐聲色堆上、尊做聲色堆主宰、箇中有領覽、都墮魔界、所以道、以大圓覺爲我伽藍、身心安居平等性智、瞥喜瞥瞋、無理會、新羅夜半日頭明、雖然如是、諸人切忌刺腦入膠盆、何故、良久云、綠樹陰濃夏日長、樓臺倒影入池塘。

復舉、德山小參不答話、有問話者、三十棒公案、師拈云、盡謂開口卽錯、動舌卽乖、殊不知九曲黃河混底流。

次日上堂、僧問、西天舊令、東土共遵、諸方依樣畫葫蘆、龍寶門下標格作麼生、師云、莫孤負山僧、進云、綠水青山、元來安居、露柱燈籠、終日禁足、衲僧家因甚別立規矩、師云、嚴師出好弟子、進云、恁麼則行到水窮處、坐看雲起時、師云、更須子細、進云、記得乾峯示衆云、法身有三種病二種光、須是一一透得始解穩坐地、意在那裏、師云、緬想會裏有人、進示、雲門便出衆云、庵內人、爲什麼不見庵外事、意旨作麼生、師云、果然、進云、峰呵呵大笑、又如何、師云、藏身無路、進云、門云、猶是學人疑處在、如何委悉、師云、有爭臣則君不落不義、進云、古人底且置、作麼生是正當今日法要、師云、水到渠成。

乃卓拄杖云、二千年前有此制、四聖六凡都不出者箇、二千年後摹錯商量、進云、恁麼裏、又卓拄杖云、出與不出在與不在、且喜靜處娑婆訶。

五月旦上堂、僧問、松竹陰陰夏日長、好箇時節、請師提唱、師云、三十年後莫錯商量、進云、恁麼則黃鶴樓中吹玉管、江城五月落梅花、師云、人無遠慮、必有近憂、進云、只變大地作黃金、攪長河爲酥酪、則不無、和尚且道、如何是向上宗乘事、師云、南斗七、北斗八、進云、向下又作麼生、師云、金香爐下鐵崑崙、進云、畢竟如何領略去、師云、阿儞全舌去亦可。

乃擧、鼓山問新羅僧、上山來作什麼、對云、禮拜和尚、鼓山云、盡世不標、向什麼處禮拜、對云、向不標處禮、鼓山云、念儞是新羅人、放儞二十棒、師云、者僧若於盡世不標、向什麼處禮、作摸著左右之勢、拜得鼓山、鼓山若於向不標處禮、亞身合掌、接得者僧、二俱莽鹵、儞師僧家、有什麼

救處、以拂子擊禪床一下便下座。

端午上堂、僧問、今朝正是端午節、昔日善財採藥來憑據、如何領會、師云、放過一著、進云、將逢佳辰、底莫不盡大地是藥、麼、師云、何必、進云、恁麼則薰風自南來、殿閣生微涼、師云、可謂諸侯避道、進云、記得文殊當年出女子定不得、意旨作麼生、師云、雲在嶺頭閑不徹、進云、下方罔明爲甚却出得、師云、水流澗底太忙生、進云、文殊爲無神力、罔明爲有神力、師云、釣魚船上謝三郎、進云、不行尊貴路、爭踏上頭關、便禮拜、師喝云、且看腳下。

乃云、强不用切菖蒲、剛不要掛靈符、祇僧家別在長處、消殞盡天下妖怪去、卓拄杖云、頭長三尺知是誰、相對無語獨足立。

上堂、僧問、綠樹布陰濃、薔薇吐晚香、正好看雲亭下避暑處、賞佳景句、請師提唱、師云、閣浮樹下笑呵呵、進云、如無寒暑田地、如何踏著、師云、墮坑落塹、進云、恁麼則處處綠楊堪繫馬、師云、蹉過也不少、進云、記得古人道、大用現前、不存軌則、如何是大用現前底時節、師云、勸破了也、進云、與麼則可謂隨處作主、立處皆眞、師云、雪上加霜、進云、學人今日親聞法要、如何保任、師云、踈田不貯水。

乃擧、趙州因僧問、如何是趙州、州云、東門南門西門北門、僧云、不問這箇、州云、儞問趙州、師云、山僧不然、若有問如何是趙州、只向他道、石橋度來也未、道不問這箇、便道、待下山去、腋裏汗出、且道、與古人道底那箇親那箇踈、請各辨別看。

半夏上堂、僧問、山連嵩嶺、地近洛川、一機一境無不勝槩、不涉唇吻、如何通津、師云、心不負人面無慙色、進云、九旬已過半、諸人自知時、當頭與麼時節、學人如何領略、師云、且過者灣、進云、恁麼則杲日麗天、清風匝地、師云、放下著、進云、僧問智門、蓮花未出水時如何、門云、蓮花、此意如何、師云、風吹不入、進云、僧云、出水後如何、門云、荷葉、又作麼生、師云、水洒不著、進云、蓮花出水與未出水相去多少、師云、秦甸幾人蹈著。

乃云、半夏已前、我爲諸人隱隱、隱而彌露、半夏已後、我爲諸人顯顯、顯而不露、正當今日半夏不隱不顯、我爲諸人說破、卓拄杖一下云、六月已熱、五穀好熟。

寺莊等賜公據上堂、拈拄杖云、自家田地觸處全彰、公驗一回得入手、百劫千生不曾荒、正與麼時作麼生、卓拄杖云、皇風與祖風、鎭扇帝道與佛道、遐昌、又卓一下便下座。

重九上堂、茱萸帶露、金菊發花、大用現前、不存軌則、諸禪德若識箇中意、南山東籬一家家。

二月旦上堂、拈拄杖云、雪霽千山綠正濃、梅腮柳面轉縱容、爲君擬報箇中意、幽鳥喃喃入亂峰、卓拄杖一下。

佛涅槃上堂、僧問、滿街楊柳綠絲煙、畫出長安二月天、應節一句、請師提唱、師云、寥寥天地間、獨立望何極、僧云、瞿曇今日入般涅槃、未審向什麼處去、師云、向人人鼻孔裏去、還覺麼、僧云、恁麼則哭底便是、笑底便是、師云、將謂儞是不領話、僧云、若謂我滅度、非我弟子、若謂我不滅度、亦非我弟子、意旨作麼生、師云、黃河點魚、僧云、不因今日節、徐日實難逢、便禮拜、師云、向後向人莫錯舉。

乃橫拄杖云、雙趺出槨事難親、有也累人無累人、瞻部州中休不得、年年二月費泮蘋、喝一

喝、擲下拄杖、下座。

龍翔正眼二塔主至上堂、寶山有一句子、只許人聽、不許人擧、已是許人聽、因甚不許人擧、擊拂子云、辨龍蛇眼俱正、擒虎兒機也全。

上堂、卓拄杖云、百億須彌、百億日月、恒沙諸佛、恒沙國土、盡在拄杖頭上、諸人見得、不妨一生參學事了畢、其如未然、開眼瞌睡、又卓一下下座。

四月旦上堂、拈拄杖云、此事無去來、因甚昨日春去、今朝夏來、迄乎道物性住一世、肇公也是盲龜入空谷、衲僧家牙如劒樹、口似血盆、到者裏作麼生道著、若無人道著、以拄杖畫一畫云、喜。

結夏上堂、僧問、今日是結制、結底是何物、師云、猛虎當路坐、僧云、恁麼則官池水深、看雲亭高、師云、吾常於此切、僧云、只將老師兩句子、布施七十員禪佛、師云、只有兩個吞吐不下。

乃云、是箇水牯牛、山邊水邊賴自無事、今日無端逗入欄裏、鼻貫索頭全在別人手裏、要行也不能、要臥也不能、才擬態情、痛加鞭策、道、叱、者畜生、嗚呼嗚、只可自知、擊拂子一下。

上堂、卓拄杖云、人情若似者箇、孔丘打殺顏回、道情若似者箇、達磨失却少林、便下座。

端午上堂、僧問、文殊小男爲誰要藥、師云、古佛廟前自顛蹶、進云、善哉童子採來何草、師云、無根滿地、無葉普天、進云、父子得便處、千古遺檢點、師云、個有老成之勢。

乃云、端午天中節、不用咒土書壁、只以一神咒、消殞一切妖怪、除却佛病祖病、且道、是那箇神咒、便振威一喝。

上堂、擧、三祖云、一卽一切、一切卽一、驀拈拄杖云、三祖大師在非非想天、擲下一箇木揔子、換却諸人眼睛、忽爾下來旋轉舞踏、恰如獨樂、而見諸人不見、不知、高聲唱云、龜毛長三尺、兎角長七尺、卓拄杖一下云、參。

上堂、橫按拄杖擧、芭蕉示衆云、儞有拄杖子、我與儞拄杖子、儞無拄杖子、我奪儞拄杖子、拈云、芭蕉與奪不無、只是擒縱未在、山僧尋常向皷皷鱗鱗地要出人、猶不救得一半在、豈況吐出山形邊事、太遠之遠矣、卓拄杖一下。

解夏上堂、僧問、三通鼓罷、四衆臨筵、好箇時節、請聞擧揚、師云、崑崙嚼生鐵、進云、九旬期已滿、衲僧脚頭闊、正當恁麼時、如何是自恣一句、師云、柳栗橫擔不顧人、直入千峰萬峰去、進云、記得、洞山云、秋初夏末、直須向萬里無寸草處去、意旨如何、師云、步步清風起、進云、石霜云、出門便是草、又作麼生、師云、草鞋和露重、進云、和尚恁麼答話、爲是與古人出氣、爲復與古人雪屈、師云、平蕪盡處是青山、進云、與麼則一言無別路、萬世盡同歸、師云、傍觀有分、進云、只將老師四五轉話、甘當九夏賞勞之功、便禮拜、師云、可、謂南北東西皆可可。

乃擧翠巖夏末示徒、一夏已來、爲兄弟東說西話、看翠巖眉毛在麼、保福云、作賊人心虛、長慶云、生也、雲門云、關、師云、三大老俱出隻手、扶樹翠嵓家風、龍寶今夏不爲兄弟說話、看眉毛如箭簳、長數寸、只是缺人覷破、雖然如是、落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色。

八月旦上堂、拈拄杖云、向上一路、千聖不傳、八月初一、龍寶山前、卓拄杖下座。

中秋上堂、擧、長沙與仰山翫月次、仰山指月云、人人盡有這箇、只是用不得、長沙云、恰倩儞用

那、山云、儞試用看、長沙一踏踏倒、仰山起來云、儞大似箇大蟲、師云、仰山起來道果然用不得、見盡長沙撞脚不起、雖然恁麼、月到中秋滿、風從八月涼、擊拂子一下。

九月旦因　太上法皇惠種種剪采上堂、擧須菩提巖中晏坐、帝釋而花話、師云、天帝釋雨花動地、與　太上法皇惠此花、是同是別、若謂別眼裏无筋、若謂同其意作麼生、良久云、住住、秋色登平楓葉序、西風轉冷草花天、擊拂子一下。

重陽上堂、採菊東籬下、悠然見南山、靖節阿轆轆處、作衲僧一重關、且道、他是俗漢陋韻、爲甚作衲僧一重關、喝一喝云、參。

上堂、山僧卽今在須彌頂上說法、諸人也是在銕輪峰頂聽法、坐底立底、賓主歷然、還會麼、會得盡十方界乾坤大地、在諸人眼睫上、放大光明、其如未然、樹頂老山顏醉、擊拂子一下。

開爐上堂、擧趙州示衆云、三十年前、南方火爐頭有个无賓主話、直至而今無人擧著、師云、趙老面皮厚三寸、要須炙手助熱、其如爐下似春何、直饒而今有人擧著、方知三个枯柴品字燒。

上堂、一句去一句來、慶快儞一平生、忽然傾漱倒岳、入那裏、出那裏、昨夜三更失却牛、天曉起來失却火、卓拄杖一下。

上堂、擧、盤山云、向上一路千聖不傳、慈明云、向上一路千聖齊行、山僧便道、向上一路千聖齊行。

大德寺語錄終

頌古

淨居於窗牖中叉手
玉囿鑑月不期秋、夜靜方知波浪別、從此相逢路似迷、崔嵬檀特硬如鐵、
爾時迦葉告諸比丘、佛已荼毗、金剛舍利非我等事、我等宜當結集正法、無令斷絕。

列三析半信何通回首白雲眼力空、鷄足峰前未歸去、多羅葉上動悲風。

行思禪師問希遷云、汝什麼處來、云、曹谿來、思乃擧佛子云、曹谿還有這箇麼、云、非但曹谿、西天亦無、思云、子莫曾到西天否、云、若到卽有也、思云、未在、更道、云、和尚也須道取一半、莫全靠學人、思云、不辭向汝道、恐已後無人承當。

明暗雙雙絕對揚、愁人未說斷愁腸、金毛獅子解踞地、寃苦蒼天又一場。

僧問大隨、劫火洞然大千俱壞、未審這箇壞不壞、隨云、壞、僧云、與麼則隨佗去也、隨云、隨佗去。

劫火隨佗喚不回、遠離西蜀去還來、大千摠等者僧眼、古佛光中笑口開。

百丈懷海、一日謂衆云、佛法不是小事、老僧昔被馬大師一喝、直得三日耳聾眼暗、黃檗聞擧吐舌、丈云、子已後莫承嗣馬祖、檗云、不然、今日因師擧、得見馬祖大機大用、然且不識馬祖、若嗣馬祖、喪我兒孫、丈云、如是如是。

一喝耳聾天地黑、當機吐舌生荊棘、承虛接響意難論、兩兩三三好動着。

保福・長慶遊山次、福以手指云、只這裏便是妙峰頂、慶云、是卽是、可惜許、雪竇著語云、今日共這漢遊山、圖什麼、復云、百千年後不道無、只是少、後舉似鏡清、清云、若不是孫公、便見髑髏徧野。

妙峰孤頂難人到、只看白雲飛又歸、松檜蒼蒼歷幾歲、莫教巖畔鳥聲稀。

僧問巴陵、如何是提婆宗、巴陵云、銀椀裏盛雪

提婆宗難分節、誰道銀椀裏盛雪、大地山河一等風、人間天上蕭洒絕。

盤山垂語云、三界無法、何處求心

千峰雨霽露光冷、月落松根蘿屋前、擬寫等閑此時意、一溪雲鎖水潺潺。

巖頭問僧、什麼處來、僧云、西京來、頭云、黃巢過後、還收得劍麼、僧云、收得、頭引頸近前云、囚、僧云、師頭落也、頭呵呵大笑、僧後到雪峰、峰問、什麼處來、僧云、巖頭來、峯云、有何言句、僧擧前話、雪峯打三十趂出。

黃巢過後劍難收、提去提來傷手憂、不是山藤三十下、梵天餘血五湖流。

雲門垂語云、古佛與露柱相交、是第幾機、自代云、南山起雲、北山下雨

古佛光中第幾機、南山雲外少人知、千溪日晚樵歌路、歸去來兮來去歸。

仰山問三聖、汝名什麼、聖云、慧寂、山云、慧寂是我、聖云、我名慧然、仰山呵呵大笑、師著語云、什麼處去也。

賸日影中雪霽春、梅腮柳面鬪芳新、詩緣風興無限意、獨許苦吟野外人。

雲門垂語云、乾坤之內、宇宙之間、中有一寶、祕在形山、拈燈籠向佛殿裏、將三門來。

燈籠上。

宇宙乾坤同一寶、燈籠佛殿形山中、青松雪霽岩勢晚、寒月風清溪畔空。

禾山垂語云、習學謂之聞、絕學謂之隣、過此二者是爲眞過、僧出問、如何是眞過、山云、解打鼓、問、如何是眞諦、山云、解打鼓、問、卽心卽佛卽不問、如何是非心非佛、山云、解打鼓、問、向上人來如何接、山云、解打鼓。

天上星地下木、覿機那肯涉離微、明明歷世無別物、猛烈身心更不疑。

仰山問僧、近離甚處、僧云、廬山、仰山云、曾遊五老峰麼、僧云、不曾遊、仰山云、闍梨不曾遊山、雲門云、此語皆爲慈悲之故、有落草之談。

看看落草不遊山、的信何通千里關、敲唱當鋒見禪悅、一圓空裏二三三。

外道問佛、不問有言、不問無言、世尊良久、外道讚歎云、世尊大慈大悲、開我迷雲令我得入、外道去後、阿難問佛云、外道有何所證而言得入、佛云、如世良馬見鞭影而行。

不問有言異道事、鐵山當面勢崔嵬、孤峰雲散千溪月、鞭影追風直下來。

魯祖山寶雲禪師、因僧問、如何是言不言、雲云、汝口在什麼處、僧云、無口、雲云、將什麼喫飯、僧無對、洞山代云、他不飢、喫什麼飯。

超然一句錯流布、强弄爪牙未作家、箭後路頭端的別、誰知高處有風波。

潙山因仰山問、如何是西來意、潙云、大好燈籠、仰云、莫只這箇便是麽、潙云、這箇是什麽、仰云、大好燈籠、潙云、果然不識。

機意交馳何處去、陣雲千里鎖重關、大家問著不相識、堪笑古風匝地寒。

江州龍雲臺禪師、因僧問、如何是祖師西來意、臺云、老僧昨夜欄裏失却牛。

昨夜欄裏失却牛、不風流處也風流、枯禪無限喚得作、祖意西來特地酧。

南泉一日東西兩堂爭貓兒、南泉見遂提起云、道得卽不斬、衆無對、南泉斬却貓兒、爲兩段、南泉復擧前話問趙州、州便脫草鞋於頭上戴出、泉云、子若在、恰救得貓兒、兩堂爭處南泉斷、王老放時趙老收、頭上草鞋多少重、白雲流水共悠悠。

僧伽難提知衆生慢乃曰、世尊在日世界平正、無有丘陵、江河溝澮、水悉甘美、草木滋茂、國土豐盈、無八苦行、十善自雙樹示滅八百餘年、世界丘墟樹木枯悴、人無至信、正念輕微、不信眞如、唯愛神力、言訖以右手漸展入地、至金剛輪際、取甘露水、以琉璃器持至會所、大衆見之、卽時欽慕悔過作禮、師著語云、拈得也未。

日暮雲晴空眼界、清風況是草離離、松根石上與誰說、月到中峰猶未歸。

迦耶舍多尊者、領徒到一舍、舍主鳩摩羅多問云、是何徒衆、尊者云、是佛弟子、羅多聞佛號心神悚然、卽時閉戶、尊者良久、自扣其門、羅多云、此舍無人、尊者云、答無者誰、羅多聞語知是異人、遽開關延接、

踏斷春風千萬峰、蒼苔青蘚鎖靈蹤、落花啼鳥夕陽裏、雲合雲開晚寺鐘。

梵摩淨德云、弟子衰老不能事師、願捨次子以令出家、

退已進、人無可比、百千年後有誰知、室羅城畔金水上、百佛放光動地時。

不如蜜多聞偈再啓祖云、法衣宜可傳授、祖云、此衣爲難故、假以證明、汝身無難、何假其衣、蜜多聞語作禮而退。

月高松頂孤光冷、風弄殘雲穩意寬、四海涓涓百川落、琉璃殿上夜遊闌。

玄沙示衆云、諸方老宿盡道、接物利生、忽遇三種病人、作麽生接、患盲者拈槌竪拂、它又不見、患聾者語言三昧、它又不聞、患瘂者敎伊說、又說不得、且作麽生接、若接此人不得、佛法無靈驗、僧請益雲門、門云、汝禮拜著、僧禮拜起、門以拄杖拄、僧退後、門云、汝不是患盲、復喚近前來、僧近前、門云、汝不是患聾、乃云、還會麽、僧云、不會、門云、汝不是患瘂、僧於此有省。

盲聾瘖瘂誰能接、退後近前指下明、多向珍候沉動處、不知三種一毛病。

翠岩夏末示衆云、一夏已來、與兄弟東說西話、看翠岩眉毛在麽、保福云、作賊人心虛、長慶云、生也、雲門云、關。

儞眼才開先下手、眉毛生也月方明、雲門關子萬重鎖、直至而今絕夜行。

鹽官一日喚侍者云、與我將犀牛扇子來、侍者云、扇子破了也、官云、扇子旣破、還我犀牛兒來、侍者無對、投子云、不辭將出、恐頭角不全、雪竇拈云、我要不全底頭角、石

霜云、若還和尙卽無也、雪竇拈云、犀牛兒猶在、賚福畫一圓相、於中書一牛字、雪竇拈云、適來爲什麼不將出、保福云、和尙年尊、別請人好、雪竇拈云、可惜勞而無功。

犀牛扇子清風起、坐斷淸風出氣難、破了當年重用去、和烟搭在玉欄干。

雪峰住庵時、有兩僧來禮拜、峰見來以手托庵門、放身出云、是什麼、僧亦云、是什麼、峰低頭歸庵、僧後到岩頭、頭問、什麼處來、僧云、嶺南來、頭云、曾到雪峰麼、僧云、曾到、頭云、有何言句、僧擧前話、頭云、佗道什麼、僧云、佗無語、低頭歸庵、頭云、噫、我當初悔不向佗道末後句、若向伊道末後句、天下人不奈雪老何、僧至夏末再擧前話請益、頭云、何不早問、僧云、未敢容易、頭云、雪峯雖與我同條生、不與我同條死、要識末後句只這是。

同條生處不同死、拈却明頭收暗頭、從此放身歸庵去、至今籠外鬼神愁。

潙山五峯雲岩同侍立百丈、百丈問潙山、倂卻咽喉唇吻、作麼生道、潙山云、却請和尙道、丈云、我不辭向汝道、恐已後喪我兒孫、復問五峰、峰云、和尙也須倂却、丈云、無人處斫額望汝、又問雲岩、岩云、和尙有也未、丈云、喪我兒孫。

東街柳色和烟翠、西巷桃花相映紅、幾度春風曉鐘裏、遊人著意到寥空。

南泉參百丈涅槃和尙、丈問、從上諸聖還有不爲人說底法麼、泉云、有、丈云、作麼生是不爲人說底法、泉云、不是心、不是佛、不是物、丈云、說了也、泉云、某甲只與麼、和尙作麼生、丈云、我又不是大善知識、爭知有說不說、泉云、某甲不會、丈云、我太煞爲儞說了也。

從上爲人事、不容老胡知、寒雲抱幽石、霜月照淸池。

大隨問僧、什麼處去、僧云、禮普賢去、隨擧拂子云、文殊普賢、總在這裏、僧作圓相拋向背後、乃展兩手、隨云、侍者取一帖茶與這僧。

遠聞近見一賓主、半暗半明孰與揖、若是箇中全用去、普賢特地逐亡羊。

三角總印云、若論此事、眨上眉毛、早已蹉過也、麻谷便問、眨上眉毛卽不問、如何是此事、角云、蹉過也、谷乃掀禪床、角打之、谷無語。

地獄天堂阿剌剌、機關直下沒應把、姦生多變卻難得、雙放雙收過新羅。

維摩詰問文殊師利、何等是菩薩入不二法門、文殊師利云、如我意者於一切法無言無說無示無識、離諸問答、是爲入不二法門、代維摩打出、於是文殊師利問維摩詰、我等各自說已、仁者當說、何等是菩薩入不二法門、維摩默然、代文殊乃喝。

不二法門何再說、二千三萬一齊來、當年妙吉親用去、扶得病翁使口開。

僧問趙州、初生孩子、還具六識也無、州云、急水上打毬子、僧復問投子、急水上打毬子、意旨如何、子云、念念不停流。

六識問來難識破、趙州老大只麼酧、可憐同道實頭漢、道道念念不停流。

京兆米和尙因有老宿問、月中斷井索、時人喚作蛇、未審七師見佛喚作什麼、米云、若有佛見卽同衆生、宿云、千年桃核、師別米和尙、蓦口一拳。

斷井索子、月中爲蛇、銜氣吐毒、跳沫馳波、生兮佛兮齊難話、多劫潛微歸滅磨、不滅磨紫金光聚照山河。

雲門云、古人道、人人盡有光明在、看時不見暗昏昏、作麼生是光明、代云、厨庫三門、又云、好事不如無。

九天雲淨衆星微、風與何餘一句詩、今夜與君無事去、時人喚作那斯祈。

三門厨庫是光明、見不見時難辨別、好事元來不如無、烏鷄半夜啄生鐵。

馬大師不安、院主問、和尚近日尊候如何、大師云、日面佛月面佛

日面佛月面佛、三三兩兩太無端、二十年來苦辛客、照絕精微見大難。

僧問雲門、如何是超佛越祖之談、門云、胡餅

觀面胡餅難下口、摩斯吒徒入瀾中、者回休吐黑雲霧、寥廓天邊無白虹。

百丈惟政禪師、一日謂衆云、汝爲我開田、我爲汝說大義、僧衆開田、竟請和尚說大義、百丈便展開兩手。

閃電激怒雷馳、眼裏耳裏箇覩機、昨夜三山三跳後、北辰鬼谷作擬議、作擬議、七佛祖師曾未知。

平田普岸禪師、因有僧到參、平田打一拄杖、其僧近前把住拄杖、平田云、老僧適來造次、僧卻打平田一拄杖、平田云、作家作家、僧禮拜、平田把住云、是闍梨造次、僧大笑、平田云、這箇師僧、今日大敗也。

一向一背不易親、互換韜略鼓旗別、千將劒未斬甲鎧、夏服箭何穿七札、鬼哭神悲崖崩石裂還顛蹶、師僧今日大敗缺。

大慈山寰中禪師住庵時、南泉至問、如何是庵中主、寰云、蒼天蒼天、泉云、蒼天且置、如何是庵中主、寰云、會即便會、莫切切、南泉拂袖而出。

庵中主見還難、句裏藏身太無端、偷眼暫時休也未、夜深誰共過關山。

僧問藥山、平田淺草麋鹿成群、如何射得塵中麋、山云、看箭、僧放身便倒、山云、侍者拖出這死漢、僧便走、山云、弄泥團漢、有什麼限、雪竇拈云、三步雖活、五步須死。

塵中麋走得三步、五步未堪趂虎兒、趂虎兒、獵人徒莫覓坤維。

懸忠國師與紫璘供奉論議、既升座、供奉云、請師立義、某甲破、忠云、立義竟、供奉云、是什麼義、忠云、果然不見、非公境界、便下座。

祖風迥振機輪轉、學海瀾忙自沒頭、大鵬一擧九萬里、籬邊燕雀空啾啾。

僧問洞山、如何是佛、山云、麻三斤

木落岩崗鋒骨冷、月斜禪石曉難開、寒雲伴來閑不徹、飛瀑從他起忽雷。

六祖云、不思善不思惡、正當恁麼時、還明上座本來面目來

五步款行三步疾、莫教正眼頂門開、悠悠不見庾嶺路、腳後腳前歸去來。

霍山和尚、問祕魔岩和尚、凡有僧到禮拜、以木叉叉著、霍山一日遂往訪之、才見不禮拜、直入祕魔懷裏、祕魔拊霍山背三下、霍山起拍手云、此老一千里地、賺我來、便

回。

當機提覲面疾、取次用來若爲宗、箇箇一千應走卻、草鞋跟斷起清風。

梁武帝問達磨大師、如何是聖諦第一義、磨云、廓然無聖、帝云、對朕者誰、磨云、不識。

廓然不識有幾人、古路橫行鎖嶺烟、從此少林深雪裏、斷臂刀下別疎親。

風穴垂語云、若立一塵、家國興盛、野老頓蹙、若不立一塵、家國喪亡、野老謳歌、雪竇拈拄杖云、還有同生同死底衲僧麼。

頓蹙謳歌在一塵、同生同死憑何人、紅霞碧露籠高低、芳草野花一樣春。

南嶽懷讓遣一僧到馬祖處去云、但問作麼生、伊道底、言語記將來、僧去一如懷讓旨回、謂懷讓云、馬祖云、自從胡亂後三十年、不曾闕鹽醬、讓然之。

朝三千暮八百、箇箇放過一著、生鐵如和土壞、大冶可解拈却。

頌古 終

拈古

擧、臨濟上堂云、一人在孤峯頂上、無出身之路、一人在十字街頭、亦無向背、那箇在前那箇在後、不作維摩詰、不作傳大士、珍重、師云、將謂龍頭蛇尾、元來只是蛇尾龍頭、雖然如是、深領指示。

擧、欽山同岩頭雪峯到德山乃問、天皇也恁麼道、龍潭也恁麼道、未審德山作麼生道、德山云、汝試擧天皇龍潭底看、欽山擬議、德山便打、欽山歸延壽堂云、是則是、打我太煞、岩頭云、儞與麼、他後莫道見德山、師云、可惜許。

擧、雲門上堂云、遇人卽鼻孔遼天、師云、堪笑這老漢、赤脚上刀山、披毛入火聚、其爭奈解笑底也少。

擧、僧問雲門、如何是透法身句、門云、北斗裏藏身、師云、衆生若非法身卽非衆生、法身若非衆生亦非法身、透之一字因誰致得、直饒是北斗裏藏身、可謂修羅三目似伊字。

擧、雪竇示衆云、譬若二龍爭珠、有爪牙者不得、或有衲僧問、既是有爪牙者、爲什麼不得、請大衆爲雪竇下一轉語、師云、其貧不學儉、富不學奢、此是俗漢之陋韻、卻可謂知言也、且問諸人、二龍爪牙、就與雪竇爪牙、他既爭珠不得之、這老爭箇什麼而不得、諸各下一點語。

擧、趙州問投子、大死底人、卻活時如何、投子云、不許夜行、投明須到、師云、趙州移步不移身、投

子移身不移步、雖然承虛接響、爭奈他後學得者少。

擧、臨濟令侍者傳語德山、侍云、德山要打人、濟云、汝但去、待伊拈棒接住與一送、管取不打、僧、擧、臨濟令侍者傳語德山、侍云、德山要打人、濟云、汝但去、待伊拈棒接住與一送、管取不打、僧、侍依所敎、果然不打、歸擧似臨濟、濟云、我從來疑著者漢、師云、蓋是作者動止、神鬼難測、一人向海枯終見底處、坐斷千聖之項顎、一人向人死不知心處、瞎却衲子之眼睛、咦、可貴可賤。

擧、雪竇一日問僧、儞浴未、僧云、某甲此生不浴、竇云、儞不浴、竇云、儞不浴、圖箇什麼、僧云、今日被和尙勘破、竇云、賊不打貧兒家、師拈云、雪竇老漢才兼文武、出將入相、今日遭拈出一口鉛刀子、高堅降旗、諸人要識雪竇麼、一種是聲無限意、有堪聽有不堪聽。

擧、風穴因僧問、如何是淸涼山中主、穴云、一句不遑無著問、迄今猶作野盤僧、師云、古人恁麼答、褒淸涼主貶淸涼主、若是道褒、因什麼有不遑無著問之句、若也道貶、他有箇什麼過、道不褒不貶、風穴何必有恁麼語話、無端觸著獅子哮吼。

擧、臺山路上有一婆子接待、凡有僧問臺山路甚麼去、婆云、驀直去、僧才去、婆云、好箇師僧、又與麼去、如是既久、游僧傳到趙州、州聞得云、待我去勘破他、遂去問臺山路、婆隨例云、驀直去、州才行、婆又云、好箇師僧、又與麼去、州回云、我勘破婆子了也、師云、盡謂日下挑孤灯、殊不知失錢遭罪。

擧、臨濟上堂云、有一人、論劫在途中不離家舍、有一人、離家舍不在途中、那箇合受人天供養、便下座、師云、這老漢、威容嚴肅、衲子到者無不失其擧措、大家寢默俛仰、過日不見道、衆人之唯唯、不如一士之諤諤、若是人天供養、要擇取一人。

拈古　終

大燈國師行狀

大應國師唱臨濟宗旨於橫嶽、萬壽建長也、幾乎四十年矣、其間摳衣者不知幾何、師其一也、師諱妙超、宗峰其號也、生於播州揖西縣紀氏子、父母禱於本州書寫山如意輪觀音、母夢、一僧手携白花開於五葉而與之、有妊、妊而後如寐而不寤、至其誕之時、熟睡而不知也、保母俄聞呱地一聲、往而見之、未澡浴而肌體瑩潔、克岐克嶷、頂骨聳立、伏犀揷額、目光射人、隨面前人能轉顏目、五歲時、見人發刀於硎云、何爲而作也、云、貴圖快利、云、不快利處有快利、儞還知麼、其人罔測、師呵呵大笑、觸事以言折挫人、若比親族有諫而欲使住之者、拈棒便打、鄉黨稱爲神童矣、十有一歲而師事於書寫山戒信律師、每屏坐靜處、志厭俗塵、經書過目成誦、一日慨然云、假使究九流三藏百家異道書、爭若入不立文字直指單傳宗、未剃染而發足、至京城幷相州、參問諸尊宿、尊宿雖氣呑佛祖底、不敢嬰其鋒、謁建長長老、問曰、路逢死蛇、莫打殺、無底籃子盛將歸、意旨如何、老曰、放下着、者般底直下便看取、師云、只如道直下便看取、如何、老擬議、師乃喝、造萬壽、問佛國禪師、曰、佛法無多子、着衣喫飯處卽是、纔作恁麼理會、早是不是了也、國云、未知恁麼事以前與而今如何區別、師云、區則區、別則不別、國云、試區別看、師指露柱云、喚者箇作露柱、則與昔時迥區、不喚者箇作露柱、則而今已別、國云、豈是佛法、師云、和尙好箇時節、國云、只與麼受用、與老僧別、師云、若見有和尙某甲、佗日悔去、國云、平生日用處、直

下道來看、師云、步步踏着毘盧頂、言言勘破維摩詰、次日又來問云、昨日與今日請師辨別、國云、說什麼昨日、直道今日事、師云、雲從龍風從虎、國云、雲未起風未來時如何、師云、天上天下唯我獨尊、國云、雲門云、我當時若見、一棒打殺與狗子喫、貴圖天下太平、如何、師曰、一口呑却了也、國橫點頭曰、此語不敢肯、師乃喝、國亦喝、師又喝而出去、國送出門、曰、我見多少學者未嘗逢如公俊底、宜祝髮披衣棟梁吾道、師翌日重參佛國、國見來曰、古人云、大用現前不存軌則時如何、師曰、和尚未問以前已現前久矣、國云、在甚麼處、師曰、夜來狂風吹折門前一枝松、國云、如何是狂風、師搖手中扇子、國休去、師云、狂風豈不是扇子、國大笑云、纔見相似却也蹉過、師於此服膺矣、自歎曰、人身難得、佛法難遇、遇賤則貴、豈丈夫志、遂落髮受具、旦夕留心於此事、一夕坐僧堂、聞僧隔壁誦百丈語云、靈光獨耀、迥絶根塵、體露眞常、不拘文字、驀然有省、夜半扣門呈其見解、國云、既是眞正見解也、宜建法幢立宗旨、厥後大應國師應詔自橫岳來京師、館于韜光庵、師在相州聞其手段辛辣、趨于京徑詣其室、問云、學人遠遠來化下、請師一接、師云、老來無力、且坐喫茶、師云、恁麼用去、只恐不肯、國師云、儞是新到、爭知這裏事、師云、千里同風、豈不是君子、國師云、室中物色、儞試指出看、師云、七九六十三、國師云、無慚愧漢、來處也不知、師云、謹謝老師以學人托上梵天、國師云、今日自領出去、明日事儞作麼生、師云、天際日上月下、檻前山深水寒、國師云、一死不再活、師便休、國師便問、五祖演示佛眼云、牛過窓櫺、頭角四蹄全出、尾巴因甚出不得、儞試下一轉語看、師云、曲心已露、國師云、如何是曲心、師云、拄天拄地、國師大笑云、與麼空過、他日有悔、三日後師下語曰、杓卜聽虛聲、國師云、方得相似、自儞會參暮請、不敢退轉、國師時臥疾、經旬閉方丈戶、止學者參問、唯師見許參請、國師云、儞是天然衲子也、不是一兩生參學士、國師承詔住京城萬壽、師從之侍巾瓶、國師示以翠岩眉毛在麼、雲門云、關之語也、師下語云、將錯就錯、國師曰、是則是、儞能於關字着精彩、他時別須有生涯、德治丁未、國師赴于相州、住建長、師乃參隨至彼、未經十日、因案上放在鎖子、忽然打透關字、到了圓融無際、眞實諦當、大法現前處、汗流浹背、急趨方丈下語曰、幾乎同路、國師大愕云、夜來夢見雲門入吾室、儞今日透關字、儞是雲門再來也、師掩耳而出、翌日呈二偈云、一回透過雲關了、南北東西活路通、夕處朝遊沒賓主、脚頭脚底起清風、透過雲關無舊路、青天白日是家山、機輪通變難人到、金色頭陀拱手還、妙超胸懷如是、若不孤負師意、伏望賜一言、近擬歸故都、莫惜尊意、以爲大幸耳、國師掇筆自書其後云、儞既明投暗合、吾不如儞、吾宗到儞大立去、只是二十年長養、使人知此證明矣、爲妙超禪人書、巨福山南浦紹明、延慶戊申臘月、國師示滅、心喪既畢、歸京而卜居於洛水東、衲子纔六七輩、刻苦自厲、至忘寒飢、一夕夢有六人僧狀若羅漢、居第一位、僧云、出世時至、何不出也、師云、仁義盡從貧處斷、僧卽領而以竹針挑破腦後云、爲儞抉出貧肉、覺後頭腦尙痛焉、不幾而去雲居、徙居城北紫野、不立佛殿、唯樹法堂、洗心子玄惠法印、僧儒者九人奏於朝、欲破禪宗、禪宗若有奇特事、吾儕豈敢、諸儒徵詰、諸方禪將無有當意者、諸儒聞師名、而特來問云、禪宗手段如何、師云、以虛僞示眞實、儒云、聖人有虛言否、師云、有、云、既是聖人、有甚虛言、師云、不見孟子有之、象謂已殺舜了而入宮、見舜在床琴、舜見象來而喜、豈不是虛僞、其間激揚經綸、問答罷、儒却問、師云、畢竟如何決、

斷此義去也、師云、舜却殺象了也、諸儒皆稽顙而執弟子禮、就中洗心子、入室參禪、造詣不淺、不勝崇信之至、施第宅而作大德方丈、今雲門庵是也、師氣宇如王、人少近傍、數年罕有、爲檀越外護者、一旦　萩原法皇聞其風而召入內、　上遣中使告師、而欲披道服而除一重坐席、談話、師再三乞着袈裟而對坐、一一許之、　帝勅云、佛法不思議、與王法對坐、師奏云、王法不思議、與佛法對坐、　上動龍顏、一日、　上勅問云、不與萬法爲侶者、是什麼人、師搖手中扇子云、皇風永扇、一日面有勅云、朕欲以大德寺爲朝廷第一祈禱處、去師受命而云、唯唯、　後醍醐天皇卽位、如前所勅禮敬彌敦、寵恩益渥、　帝召弟子僧入內、　帝問云、不與萬法爲侶者、是什麼人、僧起而鞠躬、僧却奏云、不與萬法爲侶者、什麼人、　上以手中珪劃一劃云、這箇、師上法語云、億劫相離而不相離、盡日相對而不相對、不審是什麼物、請聽、　綸言、帝御筆書紙尾云、昨夜三更露柱、向和尙道了也、　上書投機頌、賜師云、二十年來辛苦人、迎春不換舊風烟、着衣喫飯恁麼去、大地那曾有一塵、又書紙尾云、弟子有箇悟處、以何驗朕、師又書云、老僧恁麼驗、禪、又　御筆書古人節角、請訛則語、問師、師謹書紙奏對、不可勝計、勅洞院都護、請師入、　禁掖就五節所、俄設法座、請師陞座、面前懸百丈禪師頂相、　帝亦於法座右側設御榻、側天聽、月卿雲客皆在於左右前後、拈香祝　聖罷、師下法座、　帝亦下御榻、師奏云、臣僧適來許多鄙俚言說、功歸何處、　帝指百丈眞云、百丈禪師爲證明、師云、此外更無有人作證明麼、　帝便竪起拳頭、師云、與麼則南山朝北闕、夜夜見明星、　帝瞬目而祇揖、師鞠躬而出去、　皇情大悅、次日賜兼金縑帛等、兩朝特賜、與禪大燈高照正燈國師號、所賜庄田、濃州長森、播州小宅三職方、并浦上、總州遠山方、御厨、信州伴野、紀州高家、仍見下官府宣、正中年中、南禪虛席、　詔下請師、再三、竟不赴、建武初、下　綸旨云、大德禪寺宜處五山之一也、師却而不受之、又下　詔云、宜相並南禪淨刹、　萩原法皇、後醍醐天皇、親　宸翰、有一流相承不許他門住、涇渭殊流、貽言於龍華、　御製、臨之刊之、見懸於塔額左右、　萩原法皇自剪髮、造小塔安於其中、被置在靈光塔左邊、蓋爲結與大燈當今來世香火緣也、筑州太宰府都督司馬少卿、上帖於師、請住橫岳山崇福禪寺、詣闕而以此事奏、　帝堅留之、重敷奏、以師翁行道地、　帝乃允之、纔作百日主而告退、迂歸于大德、垂三轉語示衆云、朝結眉夕交肩、我何似、露柱盡日、往來我因、甚不動、若透得箇兩轉語、一生參學事了畢、建武丁丑冬、一夕召首座、(德禪開山徹翁和尙也)曰、我化緣已盡、衣法并本寺末寺住持職事、悉付與爾、克令子孫接續使不斷絕、未幾得疾、臘月二十一日夜書、亨首座相從久矣、悟徹既人皆知之、語而授焉、又示遺誡於諸弟子云、我行而後、置骨於丈室、莫別造塔、其有以也、夫汝等宜委悉、二十二日午時、欲端坐胡床、示滅、而久有足疾、患不克結跏趺坐、首座出以此爲憾語、師自以兩手加左足於右股上、左膝傷折、血流霑衣、至今血痕尙存焉、乃書辭世偈云、截斷佛祖吹毛常磨、機輪轉處虛空咬牙、擲筆而逝、大鑑禪師時住南禪、有人傳誦遺偈、鑑聞而大驚云、不意、日本有明眼宗師也、平生欲會面、而人皆沮止之、遺恨不少、欲赴茶毗、而緣有朝廷祈禱事、不能也、且遣僧人伺茶毗時、至馳歸告之、乃牽大衆出山門頭諷經、遣侍者二人贈薰香、溫中和尙、正翁和尙也、薰香至、今爲寺什物、世壽五十六、僧臘三十四、門人悉遵遺誡、親承印可、嗣其法者、妙心關山

和尙、興德海岸、池寺白翁、野州了翁、長福壁峰、金剛日山、貞庵主、可盛寺、和典座、各據一方接引學者、師平居與物爲春、無町畦也、迄于夫陞堂而秉拂子、開室而握竹篦、以機攻機、如張良躡足而封韓信、是賊知賊、若孫子滅龐而敗龐涓、阿脩羅王托動三有大城、金翅鳥王擘破娑竭羅海、談笑而起臨濟於已仆、叱咤而破雲門之機關、到于極處穿山透石壁、鼻孔血淋淋有語錄三帙、一帙雪竇錄着語、有自來矣、按夫雲門遺誡云、吾滅後、置吾於方丈中、上或賜塔額、祇懸於方丈、勿別營作、又遺表云、聯叨鳳詔、累對龍庭、繼奉頒宣、重疊慶賜、師示遺誡、准雲門故事、置骨於方丈、塔賜靈光額、沐兩朝寵光優渥、嬰足疾患、大應雲門再誕語、絲髮不爽也、大應滅後十有九白、嘉曆元年奉　詔開大德法堂、一香供大應、二十年長養記莉、若合符節、入滅纔九十年矣、夫何門庭冷落、子孫寢微、所謂强弩之末勢、不能穿魯縞者歟、寔足歎息、應永三十三年龍集丙午九月日、德禪遠孫小比丘禪興謹狀梗槩、以備大方尊宿名公銘塔之目云。

大燈國師語錄 終

國譯大覺禪師坐禪論

解題

大覺禪師坐禪論一卷は、鎌倉建長寺の開山勅諡大覺禪師の撰述にして、禪師來朝後、參禪學道者のために坐禪の用心を說示せられたるものなり。外に大覺禪師の省行文、大慧禪師の發願文、中峰和尙の坐禪論等を添へたるは、後年本書の開版者が婆心の餘に出でたるものにして、之を彼此對照せば、其の得る所尠からざるべし。

傳を案ずるに、道隆、諱は蘭溪、宋の西蜀涪江の人なり。姓は冉氏、寧宗の嘉定六年に生る。年十三、甫めて成都の大慈寺に投じて薙髮し、諸方に遊歷して講席に侍す。後、江を下りて浙に入り、無準師範、癡絕道冲、北磵居簡等を歷訊し、終に陽山に抵つて無明惠性を訪ひ、東山の牛牕櫺を過るの話を擧するを聞いて忽然大悟す。其の明州の天童山に在るや、偶々我が入宋僧の日本の敎界を語りて、敎法のみ蕃榮して禪宗未だ振はざるを嘆するを聞き、深く東渡の志を懷く。淳祐六年、我が國の商船來遠亭に在り、遊志頗る動き、遂に義翁、龍江等の數神足を率ゐて博多に着す、時に我が後嵯峨天皇寬元四年にして、師年三十三歲なり。始め博多の圓覺寺に留まり、尋いで京都に上り、泉涌寺

の來迎院に寓す。時に鎌倉壽福寺に大歇了心のあるを聞いて、之に赴き、錫を席下に掛く。執權北條時頼、道隆の來化を聞き、延いて常樂寺に請じ、政務の餘暇、常に其の室に入つて道を問ふ。遂に一寺を山之内の地に搬めんとし、建長元年寺地を卜して工を起し、同五年成る。乃ち丈六の地藏を中尊とし、巨福山建長寺と號し、道隆を屈して開山となす。道隆乃ち常樂寺七年の居を去つて、建長寺に入り、四來の大衆を接して、大いに宗風を擧揚せり。同七年、時頼更に千人に募緣して巨鐘を鑄る、道隆之が銘を作る。正元元年、師四十六歳、請によつて京都の建仁寺に移る。時に東福寺には聖一國師圓爾あり、都下の禪風大いに興る。後嵯峨上皇、師の道譽を聞き、宮中に召して宗要を聽き給ふ。師一偈を進めて曰く、「夙緣深厚にして扶桑に到る、忝く精藍を主ること十五霜、大國の八宗今鼎に盛なり、禪門の廢を建て賢王を仰ぐ」と。建仁寺を董すること三歳、席を義翁に讓り、去つて鎌倉に歸り、建長寺に退く。之れ延曆寺衆徒の、道隆が建仁寺に在つて、專ら禪宗を弘通するを嫉めるを知りたるが故なり。而も尚ほ衆徒は更に不平を朝に訴へたりと聞き、師は其の煩累の身に及ぶを惡み、逃れて甲州に赴き、東光寺に匿る。師曰く、「我れ法を弘めんが爲に海を踰えて此の國に入る、而も唯だ皇畿侯服に周旋するのみ、未だ遠陬に誘導するに遑あらず。偶々讒譖に會し、僻地に入る、是れ我が弘道の素懷なり、天龍豈に意あるか」と。居ること三歳、再び歸つて建長寺に就く。而も誘議未だ已まず、復た甲州に移る。後時宗の懇請により、再び鎌倉に還りて壽福寺に入る。弘安元年五月建長寺に歸り、七月微疾を示す。二十四日、偈を書し、衆に辭して寂す、年六十六。遺偈に曰く、「日に翳晴の術を用ふること三十餘年、筋斗を打翻して地轉じ天旋る」と。卽ち靈骨を山の東南に收めて塔を樹つ、西來庵是れなり。翌弘安二年、時宗、朝廷に奏して大覺禪師と謚す。蓋し我が國に於ける禪師號の嚆矢たり。

國譯大覺禪師坐禪論

夫れ ㋑坐禪は ㋺大解脫の ㋩法門なり。諸法是れより流出し、萬行是れより通達す。㋥神通智惠の德、此の內より起り、人天性命の道、此の內より開く。諸佛已に此の門より出入し、菩薩行じて卽ち此の門に入る。㋭二乘は猶ほ半途にあり、外道行ずと雖も正路に入らず。㋬顯密の諸宗、此の法を行ぜずして、佛道を成ずるものあらざるなり。

問うて曰く、「坐禪は諸法の根源たりと、意志如何。」

答へて曰く、「禪は佛の內心なり、㋮律は佛の外相なり、敎は佛の言語なり、念佛は佛の名號なり。是れ皆佛心より出づ、是の故に根本とするなり。」

問うて曰く、「禪法は無相無念にして、靈德露れず、㋯見性もまた證據なし、何を以てか之を信ずべき。」

答へて曰く、「自心と佛心と一味、豈に靈德にあらずや。我が心我れ知らずんば、誰を喚んでか證據とせん。㋰卽心卽佛の外、何の證據をか求めん。」

㋑坐禪。六祖壇經に曰く、「外一切の善惡の境界に於て心念起らざるを名けて坐となし、內自性を見て動ぜざるを名けて禪となす」と。

㋺解脫。煩惱の繫縛を解き、迷界の業苦を脫すること。

㋩法門。法は敎法なり、門は通入の義。佛法は衆生をして生死を脫して涅槃に趣かしむるの門なるが故に、法門と云ふ。

㋥神通。神變不思議にして自在無礙なる作用を云ふ。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通を六神通と云

問うて曰く、「能く㋓一心法を修すると也た萬行萬善を修すると、功德爭か之を比すべき。」

答へて曰く、「頓に㋔如來禪を覺了すれば、㋕六度萬行體中に圓なり。然るときんば禪の一法、一切の諸法を備へたり。豈に道ふことを見すや、㋖三界唯一心、心外無別法、縱ひ萬行を修すとも、心法を知らずんば、悟を得べからず。若し悟を得ずして、成佛すと道はゞ、豈に其の理あらんや。」

問うて曰く、「此の法如何が修行すべき。縱ひ修行をなすとも、開悟することを得ずんば、成佛不定なり。若し不定ならば、修行をなすと雖も、何の益かあらん。」

答へて曰く、「此の宗は甚深微妙の法門なり。若し一たび其の耳を經るることあれば、長く㋗菩提の勝因となる。古人云く、『此れを聞いて信ぜざるものも、福人天に超ゆ、學んで得ざるものも、終に佛果に到る』と云云。此の法は㋘佛心宗なり。佛心本より迷悟なし、正しく如來の妙術なり。縱ひ悟を得ずと雖も、㋙一座の坐禪は、一座の佛なり、一日の坐禪は、一日の佛なり、一生の坐禪は、一生の佛なり、未來も亦是の如し。只だ是の如く信ふ。

㋓二乘は聲聞、緣覺なり、共に小乘教の聖者。

㋔顯密。顯教と密教なり、密教とは眞言宗及び天台宗の一部を云ひ、顯教は其の餘の諸教宗を云ふ。

㋕律。佛の制し給へる戒律、即ち規矩法度なり。

㋖見性。衆生本具の佛性を見徹して、一超直に佛地に入るなり。

㋗即心即佛。僧あり、馬祖に問ふ、「如何なるか是れ佛、」祖曰く、「即心即佛」と。

㋘一心法とは見性悟道の禪法を指す。

㋙如來禪。釋迦如來より迦葉に傳へ、以後轉々相傳したる禪法。

㋚六度。度は梵語、波羅密の譯語なり、生死の此岸を度して涅槃の彼岸に到る意にして菩

ずるもの是れ㋛大機根の人なり。」

問うて曰く、「若し是の如くならば、我も也た修行すべし。云何が安心し、如何が用心せんや。」

答へて曰く、「佛心一切、㋜相に着することなし。相を離るゝを以て、實相とす。行住座臥、㋝四威儀の中、坐を以て安穩の義とす。以て端坐思實相と云ふ。」

問うて曰く、「端坐思實相の義、微細に之を說け。」

答へて曰く、「端坐とは如來の㋞結跏趺坐、思實相とは、所謂坐禪なり。㋟法界定印を結んで、身心動せず、眼半目を開き鼻端を守つて、當に一切㋠有爲の法は、夢幻泡影の如しと見るべし、念頭に繫くること莫れ。」

問うて曰く、「足を結び印を結ぶは、如來の威儀なり、半目を開き鼻端を守るは、何事ぞや。」

答へて曰く、「眼を開いて遠く見れば、紛飛の境に侵されて、心散亂し、目を塞げば又昏沈の境に落ちて、心中明かならず。眼半目を開くときんば、念㋡惣々ならずして、身心一如にして、明察なるとき、生死煩惱、近傍す

藏の修する行を云ふ。六度は布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、是れなり。萬行はよろづの善行なり、大藏一覽に云く、「開いて六度となり、散じて萬行となる」と。

㋖三界唯一心。心外無別法とは森羅萬象悉く一心に外ならざるを云ふ、此の意華嚴經に詳かなり。

㋗菩提は梵語なり、智、道、覺などと譯す。佛の正覺を云ふなり。

㋘佛心宗とは禪宗を云ふ。他の諸宗の佛の言說即ち經論を所依として立教開宗するに異なりて、直に佛心を相承するが故に斯く云ふなり。

㋙一座の坐禪は一座の佛云々。多時の坐禪修行の功を積みて、而して後、佛となるにあらず、他念を雜へず三昧に坐禪せる當體、即ち是れ佛に外

べからず。是れを名けて、立地成佛、大機大用と云ふなり。」

問うて曰く、「是の如きの事を聞くと雖も、尙ほ以て信心及び難し。經咒を讀誦して其の功を積み、(ヘ)持齋持戒、名號を唱へて、其の德を累ねて專ら憑あり、只だ何事をもなさずして安禪せば、何の奇特かあるべきや。」

答へて曰く、「是の如く疑ふを生死の業と云ひ、是の如く疑ふを煩惱と云ふなり。一切の法を行じて所得の心なきを、名けて深甚(ト)般若となす。般若は智惠なり、此の智惠能く生死の根源を切る利劍なり。善根を修して、其の果報を願ふは、凡夫の迷なり。菩薩善根を修して、其の果報を求めず、大慈大悲に向つて善根を修するが故に、菩提の資となる。果報を願つて善根を修し、人天の小果を成ずる人、定めて生死の業なり。」

問うて曰く、「善根の功德を聚めずして、爭か萬德圓滿の佛を成ずべきや。」

答へて曰く、「善根功德を聚むれば、(チ)三大阿僧祇劫を歷へて、當に成佛すべし。(リ)因果不二の法を行じては、一生に成佛す。自心を明め自性を悟る人、(ヌ)自己本來の佛を見るなり、今始めて成佛するにあらず。」

(ヘ)機根。根は物の本となる力、機は此の力の發動する作用なり。大機根とは卽ち佛道修行の大能力あること。

(ト)相に著す。相はすがた、かたちなり、著は執著なり、外相に執著すること。

(チ)四威儀。行住座臥のこと、威儀とは規矩禮節に合へる動作のこと。

(リ)結跏趺坐は坐禪の際の座り方なり、右足を左の股の上におき、左足を右の股の上におくを云ふ、精しくは坐禪儀等を見よ。

(ヌ)法界定印。定印とは入定の相を標する印契なり、法界定印とは、一に佛部の定印ともいひて大日如來の住定印なり。

(ル)有爲。因緣によりて生じたるもの、爲作造作を有するの意なり。

問うて曰く、「見性成佛の人は、因果によらず、善根を修すべからざるか。」

答へて曰く、「見性成佛の人、善根を修して利益をなすと雖も、果報のためにせず。衆生を敎化するが故に、因果を敎ふるなり。我が身のため所得なきが故に、功德に憑らず、一切無心なり。」

問うて曰く、「無心といふは如何。若し一向に無心ならば、誰か見性し誰か悟道し、誰か又說法敎化をなすべきや。」

答へて曰く、「無心とは、一切愚痴の心なきを言ふ、邪正を辨ずる底の心なきを言ふにはあらず。我れ衆生を思はず、亦佛を望まず、又迷を思はず、悟を求めず、人の尊敬にも從はず、名利養聞をも望まず、毒害怨讎をも厭はず、一切の善惡について、差別の念を起さゞるを、無心の道人と言ふ。故に云く、『道、無心にして人に合ひ、人、無心にして道に合ふ』と云云。」

問うて曰く、「持齋持戒、經呪を讀誦し名號を唱ふる功德、勝劣ありや無や。」

答へて曰く、「持齋は食貪の欲を離れて、來生に當に大福德を得べし。持戒は又惡心をやめ善心を生ぜんがためなり。善心あるものは、人天の中に

(ヲ)恣々は念邊なり。

(ワ)持齋は、午後に食事せざること、持戒は佛の制し給へる戒律を守るなり、名號を唱ふは佛の名號を唱ふること。

(カ)般若は梵語、譯して智惠と云ふ、此の智惠と云ふは菩提に入る智惠にして、世間普通に用ひらるゝとは其の意味を異にせり。

(ヨ)三大阿僧祇劫。阿僧祇は梵語譯して無數とす、劫は非常に長き時間を云ふ、算數の及ばざる長年月なり。菩薩は此の長年月間、修行を積みて後成佛するなり。

(タ)因果不二の法。修證不二卽ち修因と證果と別ならざるを云ふ、前に一座の坐禪は一座の佛云々と云へるは卽ち此の義なり。

(レ)自己本來の佛とは衆生が本來

生れて、位尤も高し。經呪を讀むものは、佛法を護持する故に、此の人來世に當に大智惠を得べし。名號を唱ふれば、佛に歸するが故に、當來に必ず佛土に生ず。又此の無心といふは佛心なり。佛心の功德は、言語も及ぶこと能はず、思量も到るべからず、實に不可思議なり。」

問うて曰く、「此の如きの善根は、面々に其の功德疑なし。無心の功德は尙ほ以て不審なり。」

答へて曰く、「佛の威儀を學び、佛の言語を傳へ、佛の名號を唱へて功德あらば、又是れ無心の道人にも功德あるべし。若し無心に功德なしと道はば、㊅餘行も也た功德あるべからず。一切の善根功德は、天上人間の因緣なり、無心は卽ち是れ頓證菩提の道なり。功德之を㊆言ふに足らず、實に一大事因緣なり。生死煩惱も自ら消滅して、身心一如なり、卽心成佛、何の疑かあらんや。故人の云く、「三世の諸佛を供養せんより、一無心の道人を供養せんにはしかじ云云。」實に是れ㊇唯佛與佛の境界なり、凡夫二乘の測るべき處にあらざるものなり。」

問うて曰く、「諸敎には無心と說かず、又讚歎せず。何に由ってか宗門に之を貴ぶ。」

答へて曰く、「諸敎にも其の說なきにあらず。或は言語道斷と說き、或は不可說と曰ふ、或は畢竟空、

具有する佛性なり。

㊅餘行。持齋、持戒、讀經、念佛等を指す。

㊆言ふに足らず。言ひ盡す能はすの意ならん。

㊇唯佛與佛の境とは佛と佛とのみ默契領會し得る境界にして、他の窺知し能はざるもの、世語に英雄あつて英雄を知ると云ふが如し。

或は一大事因緣、或は又諸法寂滅と說く。㊇釋迦室を掩ひ、淨名口を閉づ、是れ豈に無心を示すにあらずや。㊈影響の菩薩は、已に證智するが故に、佛之を說きたまはず、二乘は及び難きが故に、佛又之を說きたまはず。故に法華經に、『無智人中、莫說此經』と云ふ、此の意なり。諸敎に八萬四千の法門ありと雖も、色空の二法を出でず。一切形相ある者は、皆色なり身なり。形相に顯はれざるものは皆空なり。身は形あるが故に色と云ひ、心は形なきが故に空と云ふ。一切の經は、皆此の色空の二法を離れず、是れ不可說無心の境界なり。所以に斯の事を讚歎せず、言語も及ばざるが故に、敎外別傳と云ふなり。」

問うて曰く、「則ち此の身迷とすべきや、悟とすべきや、又心は是れ何物ぞ、迷悟の根本、之を知らずんばあるべからず、又心は身內にあるか、身外にあるか、何れの處よりか起る。」

答へて曰く、「㊉四大五蘊の色身、十方に遍滿して、一切衆生を根本となす。因緣和合するときんば、身體を建立す、是れを生と名け、果報遷謝するときんば、四大分散す、是れを死と名く。色相は凡聖あり、心體は迷悟なし。然りと雖も假に迷へるを衆生と名け、悟れるを諸佛と名く。迷悟は

㊇室を掩ひ口を閉づ。佛、摩訶陀國にありて室を掩ふて說法を止め、維摩、毘耶離城に文殊と對して默然たり、共に妙法の不可說を示すなり。淨名は維摩の譯名なり。

㊈影響。諸佛菩薩が形を變へて所化の衆生の委を現じ、如來說法の會座に連りて之を助くるを云ふ。

㊉四大。地、水、火、風なり、此の四者は一切形體あるものを構成する大作用ある故に大と云ふ。五蘊とは、色、受、想、行、識なり、蘊は積集の義、有爲の一切萬法を此の五に總攝するなり。

只だ妄心に因る、眞心には迷悟なし。㋐生佛は本一心の迷悟に因る、本性を了るときんば、畢竟して凡聖の差別あることなし。故に首楞嚴經に曰く、『妙性圓明にして、諸の名相を離れたり、本來世界衆生あることなし云云』と。」

問うて曰く、「㋖心性はもと迷無しと、若し然らば迷情は、何れの處よりか起るや。」

答へて曰く、「妄念若し起れば迷隨つて來る、迷來るが故に煩惱も又生ず。妄念若し滅すれば迷則ち去る、迷去るが故に煩惱も又滅す。㋙煩惱は生法なり、生死の種となる、菩提は滅法なり、寂滅の樂となる。迷ふときんば諸法皆煩惱、悟るときんば諸法皆菩提なり。世人此の迷悟の根本を知らず、生死の念を壓へて起さゞるを、而も㋚一念不生と思へり。又是れを無心となす。猶ほ是れ生死の念なり、無心にあらず寂滅にあらず、念を以て念を息むるは、生死相續なり。」

問うて曰く、「㋛小乘は空理に墮して無心を知らず。㋜大乘の菩薩は此の無心を得べきや否や。」

㋐生佛。生は衆生なり、佛と衆生とを云ふ。

㋖心性。人間の本心本性にして心性の實體は佛心なれば、迷ひあることなし。

㋙煩惱生法菩提滅法。煩惱は是れ迷妄の基源、菩提は佛果の現實なり、故に迷妄せば諸法幻現して、一切の有情に纏綿し、佛果を證すれば、諸法頓に蒙塵しつくして如々不動なり、法は是れ生滅の主體、生滅は法の示現なり、法の示現ある時は、是れ煩惱の中にありといふべし、菩提を證する時、一切の法を解脫して、虛空理に自在なり。

㋚一念不生。煩惱は一念生ずる時に起る、一念とは法の幻示なり、即ち一念を生ずる時法生ず、法生じて煩惱生ず、一念不生の時、法滅す、法滅して菩提を證す、一念不生とは

答へて曰く、「菩薩は十地に至りて、猶ほ惑智の二障あり、故に無心を得ず。一に惑障といふは、第七地に至つて、求法の心あるが故に障となる、第十地に至つて、覺照の心あるが故に障となる。成等正覺の時に至つて、此の無心に合ふと云々。」

問うて曰く、「菩薩だも尙ほ十地に至るまで之を知らず、初心の學人、爭か無心に合ふべき。」

答へて曰く、「大乘は不思議なり、直に一念の根源を截つて、頓悟するもの之あり。㋝教家に㋞三賢十聖の位を立つることは、鈍根機のためなり。利根の人は初發心の時、便ち正覺を成ずといつて、直に成佛するもの之れあり。㋟十地等覺に至つて、無心に合ふと即今見性成佛すると、無心の理は差別あることなし。」

問うて曰く、「見性成佛といふは、如何なる道ぞ、性といふは何物ぞ、見といふはいかなる見ぞや、智を以て知るべきか、目を以て見るべきか、如何。」

答へて曰く、「經論を學んで得る智は、見聞覺知の分別の智なり。此の修

三昧の狀態にして、生なく死なく願なく、色なく、一切忘我の時なり。

㋟小乘。自己一人の成佛するものをいつて小乘といひ、聲聞緣覺の如きものは所謂小乘なり。宗派でいへば、念佛宗、有部宗の如き是なり。

㋜大乘。自他共に成佛するものをいふ、佛菩薩の如きものは所謂大乘なり。宗派でいへば法相宗、天台宗の如き是なり。

㋝教家とは禪家に對して他の佛教諸宗派を云ふ、禪の直ちに佛心を相承するに異なりて他は佛の言教、即ち諸經論を所依とす、故に之を教家と云ふ。

㋞三賢十聖。菩薩の位次階級なり、三賢は十住、十行、十回向の三位を云ひ、十聖は此の上に位する十地を指す。

行には之を用ひず。回光返照して、本有の自性を知見するを、慧眼と名く。見性の後は見聞覺知も、也た受用すべし。」

問うて曰く、「本有の自性を知見すといふは、知見は知るべし、本有の自性といふは如何。」

答へて曰く、「一切衆生本來性あるが故に、自體を扶起す。此の性無始より以來、不生不滅、無色無形、常住不變なり、是れを本有の自性と名く。此の自性は、一切諸佛と一味平等なるが故に、佛性と名く。一切の三寶、六道の衆生も、此の性を以て根本として、一切の法を成就す。」

問うて曰く、「回光返照といふは如何。」

答へて曰く、「外の諸法を照す、自己の光明を回らし返して、內の自己を照すを云ふなり。心明かなること日月の光の如く、無量無邊にして、內外一切の國土を照す。光及ばざる處は闇し、是れを㊀黑山の鬼窟と名く。一切の鬼神、其の內に住す、鬼神はよく人を害す。心法も亦復た是の如し。心性の智光は、無量無邊にして、一切の境界を照す。光及ばざる處は闇し、是れを無明の陰界と名く。一切の煩惱、其の內に住す、煩惱よく人を害す。智心は光なり、妄念は影なり。光の物を耀すを照と云ふ。心念の境界に遷らずして、本性に向ふを回光返照と言ふ、又は遍照とも言ふ。遍照の當體は、迷悟未

㊀十地等覺。等覺は菩薩の最上位にして直に佛位に次ぐ、十地は等覺に次ぐ菩薩の位なり。

㊁黑山の鬼窟。鐵圍兩山の間日月の光を見ず、餓鬼其の中に集りて宿債を償ふと。

だ露はれざる處なり。今時の人は、妄念を以て本心と思ふ、煩惱を以て樂とす。何れの時か生死を離れんや。」

問うて曰く、「㊂坐禪は一念不生を以て省要となす。念を以て念を止むれば、卽ち是れ血を以て血を洗ふに似たり、如何。」

答へて曰く、「一念不生は所謂心法の本體なり。念を止むるにもあらず、又念を止めざるにもあらず、但だ是れ一念不生なり。若し此の本體に合ひぬれば、是れを法性の如來と名く。然るときんば坐禪も亦無用なり。迷もなく悟もなし、豈に念あらんや。若し此の本體を知らずんば、不生を得べからず。縱ひ念を押へて起さずと雖も、皆是れ無明なり。譬へば石の草を壓して久しからずして又生ずるが如し。綿密に工夫すべし、容易なるべからず。」

問うて曰く、「或人云ふ、『當に一念不生の處に向ふべし』と、如何。」

答へて曰く、「一念不生とは、全く生滅去來の相なきを指示する語なり。生死は念より起る、若し念の起る處を知らずんば、生死の根本を知るべからず。衆生は十二時中、煩惱の念に使はれて、本有の性に背く。若し復た妄念の雲晴れて、心性の月彰るれば、已前憎む所の念、還つて皆智惠となる。乃ち此の念を以て說法して、衆生を敎化すべし。㊃古人の云く、『諸人は十二時に使はる、我れは十二時

㊂坐禪。坐禪の方法は半結跏、兩結跏等ありと雖も、要は心頭一念何の處にありても諸慮を一所に別することに外ならざるなり。

㊃古人の云く云々。是れ趙州和尙の語なり。